始

14.6.23

348-12
3

帝國圖書館藏

先

覽

全

大正
4. 9. 29
購求

凡例

△本書はロシヤ現代の作家メレジュコーフスキイ氏の小説Forerunnerを英譯より重譯したものである。

△著者メレジュコーフスキイ氏の如何なる作家であるかに至つては序文を見られたし。

△Forerunnerの譯語には少なからず困却した。初めには「先達」として見たが、それでは多少頭領株の意があるので、改めて先覺者の意味で「先覺」としたのである。併し著者の主人公ヴインチの取扱ひ方は、たゞに先覺としてゞはない。矢張Forerunnerとしてゞある。則ち先きぶれ、時代の先驅としてゞある。それ故意味から言へば先驅とするのが尤も良いのであるが、先驅では少し題名として落着を缺くので、やむなく先覺とした次第である。

△本書の内にはイタリヤ語とラテン語とが隨處に顯はれて來るのでこれまた少なからず困却した。先輩の敎を受けた處も少くはないが大體は自分の乏しい

兩國語の智識をいろ〳〵に工面してこれを譯して置いた蓋し間違も少くはあるまいと思ふが、これを諒とせられたい。

△本書の譯については西野彌三次君の多大なる助力を仰いだ深く同君に謝意を表して置く。

大正四年八月末日

譯者識

序

ミランの公イル・モロはその宮廷に當代の學者を集めて哲學・神學の問題を討議させた。時は千四百九十八年で、サヴォナロォラが火渡りの試驗をするといふその時の事であつた。列席の學者の提出した論題が頗る面白い、その一二を取つて見ると斯樣なのがある。

美人は醜婦よりも子を產む事多きや。

婦人は不完全なるものなりや。

基督が十字架に釘けられし時、その脇腹より水出でたりといふ、此の水は身體の何處に存したりしか。

婦人は男子よりも多情なりや。

先づこんなもので甚だ滑稽な話であるが、當時の學者は決してこれを滑稽とも冗談とも考へて居たのではない、眞面目に本氣で、斯樣な事を考へて居たのである。その時本書の主人公たるレオナルド・ダ・ヴインチは一隅に默々として控へ

て居たが、それと見た宮廷の婦人達は是非レオナルドにその學説を述べさして見たいと云つて、その起立を強ひた。彼等婦人達はこの學者の討論を犬の嚙合か雞の蹴合のやうに心得て居たのである。レオナルドは素より自分の學説などの傾聽される筈はないと考へて居た事として、固く起立を辭つたが、宮廷の人々は斷じてそれを許さないので、やむなくやがて演壇に立つて口を開く、そして何を云ふかと思ふと口を訥らせながら、

諸君はアノ貝殼を御存じですか、アノ貝殼を、始め海に棲む生物の骸が山の上にあるのを御存じですか、あれは一體何の理由でせうかと説き出した。

神學・哲學の高尚な問題を討議する際に當つて、こんな馬鹿らしいたわいもない貝殼の話を始めたので、一坐の大學者は一齊にレオナルドを嘲笑し、中には憤怒するものもあつた、そしてその結果は一堂大騒亂に終つてしまつた、而もレオナルドはこの貝殼から地球上の變化、地理上の諸問題を説明したのであるが、所謂當時の學者にはそんな事は一向に解らなかつたのである。

自分は嘗てこの「先覺」の中に於けるこの一節を讀んで深く感ずる所があつた。

今日理想とか絶對とか如何にも高尚らしい事を云つて居るものは、矢張り千四百九十年代の學者の考へて居た途方もない滑稽な所論と軌を同じくして居るのではないかと、爾來自分はこの書を以て近代の好著と考へて居た。

併しさらにそれを熟讀するに及んでこの書が暗示的にまた啓發的であり、而も讀物として頗る面白いものであり、上記の貝殼の話説の如きはその内の些細なる一挿話に過ぎぬ事を知つた。先づレオナルド・ダ・ヴインチなる人物が近代人物の先驅として、所謂文藝復興期の一切を代表して居る所が興味甚だ深く、次で文藝復興期なるものが如何にし明晰に眼前に見えるやうに描かれて居る事は、正にこの書が近代の歴史小説として他に一頭地を抜いて居る所以である。

文藝復興期、その代表たるヴインチ、この二者を明らかに描いて當代を具現するのが恐らくこの書の目的であらう。そしてその目的は充分に達せられて居ると自分は思ふ、思想の公平な人であるならば、何人でもさう考へる事であらう。

ヴインチの事業の第一は飛行である、飛行機を考察するのが彼の第一の仕事であつた。飛行機は實に二十世紀勞頭の所産である、新らしきものと云へば飛行

機である。それを、今を去る四百年の昔にあつて考察したといふに至つては、その事が新人にして新時代の先覺たる第一の特徴と云はなければならない。よし飛行機の考察は實際の事ではなくて、只著者メレジュコーフスキイの想像から、ヴインチがこれを工夫したと假定したのだとしても、新人先覺たるヴインチを具體的に描くには尤もその當を得た要點である。

第二にはその特に專門としたる繪畫の上に於ける新機軸である、恐らく油を以てする近代の油繪なるものはヴインチから始まつた事らしい。そして其畫は今なほルーヴル宮殿の寶物となつて居る「最後の聖餐の圖」「モンナ・リサ」――昨年盜難にあつて一代を騷がした――等は美術の新時代を規するものとして永く敬重されて居る。

その他都市の設計、運河の開鑿を始め耶蘇の十字架に用ひたりと云ふ釘をあぐる起重機の工夫、桃樹に毒素を注入する試驗等、凡て時代を遠く踏み出したる考慮をなせる事は、その新人先覺たる所以を明らかに示すに足るのである。

特に繪畫を以て手工に於ける一技術となさず、これを以て天地の美を表現するものとなし、特に自然科學、解剖學にその基礎を置かなくてはならぬ事を說いた處は、深く最新時代の精神と合致して居る事として注意すべきである。なほその弟子に與へる折々の敎訓等に至つては實に驚くべきものがあるのである。さて一方にかく主人公ヴインチが斯樣な風に顯はされて居ると共にその時代なる文藝復興期がまた同樣に面白く顯はされて居る。

第一に中世から過渡期の文藝復興時代に於けるイタリヤの邦國は實に紛亂を極めて居る、ミラン、ヴエニス、フロレンス等の諸侯それ〴〵相結び相戰ひ、その合縱連衡の狀は支那の戰國時代と同じく諸々の專制君主がみなその權勢を張らんとして居るその狀態は、イル・モロ公を劈頭に、シイザア・ボルシヤ、その他皆手に取るやうに示されて居る。さしもに紛亂したイタリヤの有樣も著者メレジュコーフスキイの筆に依つて瞭然たらしめられるのである。

なほ專制君主に對してはロオマ法王なるものがあり、さらにこれに對して宗敎界の大人物サヴォナロォラを點出し、これに依つて當時の宗敎界が如何なる有樣にあつたかを說明して居る。サヴォナロォラは曠世の大聖であらうが、時代の影

譽は免れがたく常に一種の迷信に囚はれて居たり、さらに法敎に潛心するの餘り、あらゆる奢侈品は云ふまでもなく、美術に關するものをも盡くこれを異端のものとなして、これを排斥し遂にこれを燒棄してしまう。こゝにも文藝復興期の特徵が見えるが、面白いのはその美術品を沒收する少年の神聖軍で、やがてサヴォナロォラの大刑に就かんとする時には、同じこの少年隊の一人が惡戲して老僧をその途中で轉倒せしむる事をするあたりは、些事ながらまことによく文藝復興期の人心を指示したものであると思ふ。

美術を排して異端惡魔の眞とする敎徒から見れば、ヴインチは勿論惡魔そのものである。それ故酷しく當時の熱狂者流から迫害される。併しその實ヴインチは深奧な思想家であると共に必らずしも大なる意味に於ける宗敎に冷淡なるものではないのであるが、その眞想は到底了解されずに終る。

さらに時代は斯くの如くであるが、一方に又民人の間に於ける古美術に對する憧憬は甚だ切なるもので、切りに土地の開鑿が行はれ、埋沒されたる古美術が世に引き出される。同時に諸々の專制君主もまた美術を愛好し、ヴインチの如きもかれよりこれと轉々して諸の君主に師事する事を得たのであつた。

そんな事實を一々書いて居ては際限はないが、特に注意すべくまた面白く思はれるのは、この才人の仕事が一として成就されたものはなく盡く失敗に終つたといふ事である。第一に『最後の聖餐』の畫は龜裂を生ずる傾向を示して、永久の作となる能はざる事を證し始め――但しこれは今でもルーヴルに立派な實物として殘つては居るが――イル・モロ公の沒落と共に騎馬像は野蠻なる佛軍の兵士の爲めに破壞され、飛行機は終に飛行せず、却つて弟子の一人は計算の誤謬を知らずして飛行を試み、負傷して不具になつてしまつた。その上に財政上の窮乏に陷り、一方には自分より偉大なるミケランヂェロ、ラファエル等の大畫家が輩出して己の名聲を蔽ふてしまふのは、まだしも、ヴインチの公明なる喜んでアンヂェロと握手せんとするも對手はこれを惡意に解し――アンヂェロの性格描寫には やゝその當を得て居ないやうに思はれる節もあるが――さらにその弟子中の尤物はラファエルの下に去り、尤も愛情を傾けたる一弟子は失望のあまり自殺するに終るが如きは、尤も痛烈なる悲劇といふべきものである。なほ自分はこの一

代の奇才と怪傑マキァヴェルリとの會見交情に多大の感興を持つもので、こゝに無量の情趣が籠つて居ると考へるものである。

さてこの書はこんな風にして一方には時代を明らかに描き出して居るが、かくて自分はこの書を以て近代の傑作となし、特に新らしい歴史小説としてこれを讀書社會に推擧するに躊躇しない。

由來この先覺Forerunnerは三部小説の中卷である。第一卷は「神々の死」と題し、背教者ジュリャン Julian, the Apostate を書いたものであり、第三卷はピーター大帝を材としたものである。そして第二卷なる此の書はレオナルド・ダ・ヴインチを題としたものであるが、第一卷の題に對してこの書を一つに又「神々の復活」といふのである。蓋し第一に於ては皇帝ジュリャンの努力を以てしてなほ且つ古の神々は基督教のために倒され全く死して葬られ終つた事を寫し、第二卷に於て新時代則ち近世の先驅としてヴインチをあげ、これと共に再び古ギリシャの神々は復活し來る事を示し、さらに第三卷のピーター大帝に於てギリシャの神々の思想と基督教の思想との合致を說くのである。而も三卷を一貫して明らかに認められるものは非基督教的精神である。恐らく著者の考は、キリスト教の爲めに埋沒されたる古の思想精神が徐ろにその頭を擡げ來つて、近代に於て優にキリスト教的思想を壓倒するに至つた經過を語らんとするのであらう。三卷を通じてこの心持はまざ〳〵と認められる。

メレジュコーフスキイに於けるこの非基督の思想は、蓋しその源をドイツのニイチェに發し、著者はその感化の下に筆を執つて居るのだといふ說もある。その力なるものを力說しこれを宣傳し、且つ今のべた如くに非基督を唱ふ處を以て見ればこの說には道理がある。正しく著者はゴルキイと共にこのドイツの思想家の影響を受けて居るのであらう。殊に又基督、非基督を超脫した偉人の出現を著者が期して居る邊は、ニイチェの Over-man を眼中に置いて居るとも云へやう。

さてこの書は三部小説の中卷であるが、他の二部とは獨立して讀みうる事勿論である。そして往々人は背教者ジュリャンを書いた第一卷を以て尤も勝れて居るやうに云ふが、自分はいろ〳〵の理由からこのヴインチを書いた「先覺」を以て

Super Man

白眉とする。これは人々の嗜好にも依る事であるが靜かなる判斷力ある人は自分のこの意見を正當と認めるであらうと信ずる。蓋しこの「先覺」には非基督の勝利の露骨に顯はれて居る爲めに或は宗教の側から嫌はれる恐れがありはしまいかと察しられる、但し吾々基督教にあまり深い關係のないものには殊にこの點に就て公平な判斷が出來はしまいかと思ふ。

抑も文藝復興期の事を書いた小說と云へば、吾々は直ちにジョオジ・エリオットのロモラを思ひ浮べる。ロモラはエリオットの大作でまた往々その傑作と言はれて居るものである。自分は嘗てこれを讀んだが、さらに何等の感興を得なかつた。當時は自分の鑑賞力がなかつたのであらうと考へて、其後數年にして、これを再讀して見た、併し再讀の場合にもなほ且つその評判ほどの優越を認める事が出來なかつた。婦人なる主人公ロモラの性格に至つては一向に人間らしい感じを得られなかつた、サウォナロォラに至つても强い印象を與へられなかつた。文藝復興期といふ感に至つてはさらにこれを得るによしなかつた。たゞテイトオなる青年の心理、その罪惡の淺瀨より一歩毎に深みへ陷つて行き、再び引きかへせなくなる經過丈けは多少の興味を以て味ふ事が出來たのであつた。ロモラほどな有名な作に對して、それほど感興を得ないといふのは、勿論自分の鑑賞力の不足に依るに相違あるまい、併しながらそれは全然鑑賞力の不足にのみ歸する事は出來まいかとも思ふ。嘗て自分は小泉八雲——Lafcadis Hearne——氏の講義を聞いた時、氏は英文學史を說いて、このロモラに至り、その諄々たる口吻を以て、ロモラの作に就て、著者の苦心と努力とを語り、さて曰く、書を閲する事五百、而もこれ失敗の作なりと。先生はかくこの大作を斷じ去つたが、その時の先生の語氣はまだ耳に殘つて居るやうな氣がする。兎に角先生の批評に依つてもロモラが文藝復興時代の描寫としては價値のないものである事が了解される。

然るにメレジュコーフスキイのこの作に至つては前段述べた通り、その大局に於て微細の點に於て、著者の期して居る處は充分に達せられ、讀者は實に十五世紀のかの不思議な時代に伴はれ、ヴインチといふ不思議な鬼才に接して居るやうに感ずるのである。イギリスの批評家Courtney氏の如きは、メレジュコーフスキイの作が必らずしも、現實のヴインチを顯はすものでないやうに云つて居るが、そ

れは間違ひである。吾々はエリオットの作に於て時代の事に關して得る處のないに反して、この作に於てはよしコオトネエの説の如くヴインチが眞實でないにしても、讀者はそれに依つてその人物と時代とに關して何者かを獲取しうる、この獲取はすでに偉大なる所得ではあるまいか。吾々は少くともこの點に於て著者メレジュコーフスキイをエリオットの上に置きうるのである。そしてメレジュコーフスキイがエリオット以上であると云へば、その世界文學の間に於ける位置は大略察し得られる次第ではあるまいか。

著者メレジュコーフスキイ氏は最近のロシヤの作家である。ツルゲネフ、トルストイ、ドストイエフスキイに次でロシヤ文壇の覇權を握つて居る作家である。自分はロシヤ文を讀み得ないので、その文の如何を云ふ事は出來ぬが、察する處頭腦の頗る明晰な人であるらしい。その例は澤山にある、中にも自分の尤も感服したのは Tolstoi, as Man and Artist なる書物である、この書に於て著者は尤も明晰にトルストイを論じ、ドストイエフスキイと對比して飽まで讀者を首肯せしむる斷案を下して居る。この外極めて小冊子ではあるが、プロオペルを論じた小論文の如きも同樣である。その明晰といふ點に就てはこの Forerunner も同樣で、飽まで著者は自分の思想と主張と、その取り扱つて居る時代なり人物なりを讀者に納得させなければ已まない概がある。若し缺點と云へばあまりその明快な處にある、何となれば讀者はあまりに要領を得るに過ぎて、或は著者が云ひ過ぎて居るのではないかとの懸念を起さしめるからである。併しそれがまた氏の著書の興味に富んで居る所以である。自分は今こゝにこの珍らしい近代の好著を吾が讀書社會に紹介し得たのを光榮とするものである。

戸川秋骨

目次

一の巻　白夜叉……二
二の巻　此の神を見よ——此の人を見よ……七一
三の巻　毒ある果實……一一七
四の巻　巫女の安息日……一七一
五の巻　汝の意思の如く成させ給へ……二一七
六の巻　ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオの日記……二七一
七の巻　虚榮物の篝火……三二三
八の巻　黄金時代……三六九
九の巻　相似……四四九
十の巻　靜水……五五九
十一の巻　翼を有するやうになる……六三七
十二の巻　ケーザルか然らずんば無……六七五

十三の卷　紫衣の獸……七五七
十四の卷　夫人リサ・ジョーコンダ……八〇九
十五の卷　宗教裁判……八六五
十六の卷　レオナルド、ミケランヂェロ及びラファエル……八九三
十七の卷　死――翼ある先驅……九一九
後敍……九六五

先覺

露國　メレジュコーフスキイ著
戸川秋骨　譯

我れ想ふ、ユリアヌス再び起てりと――

ペトラルカ

人なる神の神なる人に對するが如き――
アポロ・ベルヴェデレの基督に對するが如き、
吾人は廣大なる矛盾の逢着を見る。

ドストイエフスキイ

一の卷

一の巻　白夜叉――一四九四年

「シエナで又もヴィーナスの彫像が發見されたので、其處の市民は非常に喜んだ。そして大勢の者が集まつて盛大な宴を張り儀式を催してから、此の彫像をば「歡樂の泉」といふ名の噴水の上に据ゑ付けて飾りとした。

「ところが後にフロレンスと葛藤を生じて國歩甚だ艱難となつたので、シエナ議會の一員、即ち市民の一人が起つて斯んな事を提言した――我が市民諸君、あの彫像が發見されて以來、不幸の數々が當市に起りました。で、我等は如何に偶像崇拜が吾々の信仰上嚴禁されてゐるかの點に思ひ及びますれば、神がこれを罪惡なりと認めて此の禍難を下し給ふたとより外に考へやうがないのではありますまいか？　依つて私は忠告致します。彼の像を當市の廣小路から持出し、その面を傷けた上、粉微塵に打碎いてから。フロレンス人の領分内に運んで埋めなければなりませぬ――

「衆人は此の說に贊同して法令を以て之れを認可した。そして實際にそれを執行して、彫像は我等の領土内に埋沒された。」（十五世紀に出でたるロレンツォ・ギベルチの「フロレンスの彫刻家」に附せる註釋より。）

一

フロレンスにある染物組合の商店はオルサンミケレなるカノニカの直ぐ近くにあつた。小屋、納屋、それから曲がつた突喰棒を嚙まされてゐる張出しの建物なぞのために店々の形は損せられた上に、瓦屋根が甚だ近く接し合つてゐるため、殆んど天が塞がつて、眞晝の光りにあつてさへ往來は暗かつた。下の門口には外國から送つて來た毛織ものゝ見本が吊下がつてゐるが、それは蘚苔から得るリトマス液や、洋紅や、タスカニの明礬の腐蝕液に浸した大青なぞで染めるために、このフロレンスに送られたものである。往來には粗雜な敷石があつて、染料の桶から滲み出す各種の色は下水に流れて居た。それから主要立つた商店、即ち伊太利語で云ふフォンダキの入口にある楯形の看板には、『紅色地に金地の鷲を出し、銀地の羊毛の球形の上にそれを見せた』此のカリマラ（蓋し染物組合を斯く名けるので）の紋章が光つて居た。

此等大商店の一つの、夥しい出納帳や商賣に關した書類を重ねた中に、チブリアノ・ブオナコルシは座を占めてゐた。此の人はフロレンスの豪商で同時にカリマラ組合の長である。

時は寒い三月の誰彼時、壓し付けられて息詰まるやうな窖からじめ〳〵した空氣が發散して

ゐる。老主人は風邪心地なので、着てゐる栗鼠の外套をば固く掻き合はした。彼の耳には鵝筆が挿んであつて、視力衰へて近眼となつた其の目は、無頓着なやうで然かも念を入れてゐるらしいのであるが、一切のものを知りぬいて居るかのやうに、彼はその嵩高な元帳の羊皮紙を見てゐた。元帳は左方が借方、右方が貸方で、幾本かの直線を以て其の間を劃られ、直立體な變化のない手跡で小書を入れられ、句讀、花文字、亞剌比亞數字などの飾りは付けてなかつた。それ等は些細な新案で商用の帳簿には邪魔なものと考へられて居たのである。其の最初の頁には大きな文字で次ぎの文句が記してあつた。

『我等の主耶蘇基督と最とも幸ある童貞マリヤとの御名により、本帳簿は紀元一千四百九十四年に始まる。』

チブリアノ主人は抵當に受取つた荷包の數に誤りのあるのを直して、それから茨の儘の胡椒や、メッカの生姜や、肉桂の束なぞの最近の記入を見て、滿足の色を見せて疲れた身體を椅子の背に倚り掛け、兩眼を瞑つて、佛蘭西モンペリエの羊毛市場へ派出した自分の使の者に送るべき手紙の事を考へてゐた。丁度其の時誰か這入つて來たので、老人は目を開けて見ると小作人のグリルロであつた。此の男には兼てムニオーネの河畔にあるサン・ヂェルヴァゾの山莊に附屬してゐる葡萄園や畠を貸してあるのである。グリルロは無暗と丁寧な辭儀をして、念入りに塡めた鳶色の卵の籠を差出した。其の帶の間には肥へた雛が二羽、足を括られ首を吊られて、ククと鳴いてゐる。

『あ、グリルロかい！』と例によつて品の良い口の利き方をしてブオナコルシは言つた。『何うちやな神樣の御慈悲に預かつてゐるかな？でも何うやら到頭春めいて來たやうぢや。』

『チブリアノ樣、私ら見たやうな年寄りに春が來たとて何の嬉しい事がござりませう。古びたこの骨の痛みは前よりも烈しくなりまして、墓へ這入りたいと大い聲で怒鳴つてをりますぢや。然う〳〵旦那樣、復活祭のお供へになさる卵と雛を持つて參りました。』彼は斯う言つて碧い目を緊め付けるやうに閉ぢた。すると無數の小皺が目の回りに現れたが、それは無慈悲な風や天日に曝された結果に外ならないのである。ブオナコルシは進物の禮を述べて仕事に取掛らうとした。

『ぢやお前は畠の方の人數を用意して置いたね？夜の明ける前にすつかり片付くか知ら？』

グリルロは大袈裟に溜息して、杖にぐたり倚り掛かつて考へ込んだ。『支度はすつかり出來てゐますし、人數も充分に揃つてゐます。だがチブリアノ樣、これは私からお伺ひするのでござ

いますが、少しお待ちなさる方が善くはございますまいか？』

『それはお前可けないよ。待つてはならん、でないと事が人に知れるからとお前が言つたぢやないか。』

『如何にも申しました。が、恐ろしい事なのでございますで。云はゞ罪惡でございますから——それに此の頃は聖日に差掛かつてゐまして、齋日ですし、あの仕事と云つてはそれとはまるで違つた性質のものでございますからナ。』

『構はないよ、罪は私一人の身に背負つてやるから。何にも恐がるには及ばん、私はお前を困らすやうな事はしないから大丈夫だ。只これだけ聞かして呉んなさい——尋ねてゐる物が全く見付かるか何うか。』

『なんで見付からない事がありますものか？私共の手引になるやうな形跡は幾らもございます。あの水ケ窪にある水車場の後ろの山の事は先代の人だつて知つてゐませう？それから夜分はサン・ヂョーヴァンニに鬼火が飛ぶさうでございます。それに依つてもその附近にはどつさり缺けらのある事が分ります。大して古い事でもありませんが、私が一寸小耳に挿んだ事がございます、マリニョラの葡萄畑を掘つてゐましたら土の中からそつくりした鬼が出て來たさうでございます。』

『鬼だつて？何んな風の鬼だナ？』

『青銅で出來てゐまして角が生えていました。毛の一杯生えた足をしてゐまして——左樣、山羊の足で——蹄もありましたから。そして笑ひ顏をして、片足で踊りながら指を彈いてゐました。何でも極く古いものと見えまして、體中が綠色になつて、壞れて居ました。』

『それを皆で何うしたのぢや？』

『鐘に鑄まして、新たに建立になつたサン・ミケレ寺へ納めました。』

チブリアノは我を忘れて言つた。『グリルロ、お前其の時私に言つて呉れゝば好かつたのに。』

『でも旦那樣はシエナへ行つてゐらつしやいました。』

『手紙で知らして呉れさうなものぢやないか。左樣すれば誰か人を送るのだつたに——否や私が行つても好かつたのだ——金なんぞは惜む事じやない——それを呉れゝば代りに鐘の十位鑄てやるのだつたがな。實に馬鹿共ぢや！踊つてゐる林野の神を潰して鐘にするなんて——殊によつたら本統のスコォバスの作であつたかも知れんのに！』

『左樣でございます、馬鹿な眞似をやつたものでございます。併しチブリアノ樣、左程お腹

立ち遊ばすがものはありませぬ。其の罰があの衆らに來たのでございますもの、と申すのは新しい鐘を吊るしてからは蟲共が林檎を喰ひまするし、それに阿列布は滅茶でございました。のみならず鐘の音色は惡うございます。』

『何故かな？』

『其の御返答は私には出來ませんが、本統の音色ではございません。基督敎信者の心に喜びを起す調子ではなく、何だか意味のないやうな音を出してゐます。それは其の筈でございませう、口の利けない鬼を基督敎の鐘に拵へる事は出來ませんからな。箇樣に申しましたとてお忿りになつては可けませぬが、父なる神樣のなさる事に間違はございませぬ。チブリアノ樣、御覽なさいまし、汚物を斯樣掘り出しましたが善い事は少しもございませぬ。今晩もあの仕事に出掛けまする時は能く用心をしまして、十字を切つたり祈りをしたりして豫防をするのが肝腎でございます。惡魔といふ奴は悧巧な上に威力の强い者でして、まあ犬の子とでも云つたやうなものでございませう。何しろ一方の耳から這入つても一つの耳へ拔ける奴でございますからな。現に私らは水車屋の山でツァケオが見付けた石の腕位で以て誘惑された程でございますから。私らを誘惑したのは惡魔でございました。其のため非道い目に逢ひました。お丶神樣の御守護を願ひまする！斯う思出してさへ恐ろしい！』

『何んな事だつた、グリルロ？』

『それは昨年の秋、マルチン祭の晩に起つた事でございます。私らは坐つて食事しようとしまして、家内が食卓の上へ粥を載せました。丁度其の時でございます。水車場の山で畠の土を掘つてゐた私の甥のツァケオが飛んで這入つて來ました。そして叔父さん！まあ叔父さん！と叫んで、顏は心配らしく色を變へてゐますし、震えて齒はカチ〳〵鳴つてゐるのでございます。神樣がお前を護つて下されてゐるぢやないか！と私が斯う申しますと甥は話し出しました。あ丶叔父さん！壺の下から死體が匐ひ出してゐます！叔父さん御自身で行つて御覽なさい――斯う申すものですから私らは十字を切つて家を出ました。その時はもう暗くなつてゐまして、林の後ろから月が上つてゐました。行つて見ると橄欖の古い切り株があつて、其の側の土を掘つてある處に何か光る物がございます。屈んで見ますると、それは眞白な一本の腕で、御城下の女御衆に見るやうな丸々とした綺麗な指がついてございました。で、私は、これはまあ何と云ふ殘酷な事をしたものだらうと思ひながら、提灯を穴の中へ差し入れますと、ま何うでせう、其の腕が動きまして、指で以て私に何か合圖をします！これが何うして動じないでゐられませう、

私はキャッと叫んで膝を突きました。所が私の祖母のモンナ・ボンダは私を叱りました。元來此の祖母は評判の悧巧者でございまして、隨分年を取つてはゐますが、何うして仲々の元氣者でございますが。それが私に言ひますには、此の馬鹿者が、何がそんなに恐いのだ？目で見れば分るぢやないか、これは死んでもゐなければ生きてもゐない唯の石といふ事が見て分らないのか？と申しまして手を掛けて土の中からそれを引き出しました。私は、そんな事をしては可けない、矢張り打遣つて置きなさい、手を觸れてはならない、埋めて置いた方が宜い、でないと私らは飛んだ目に遭ひますよ、と斯う言ひました。それでも祖母は、そんな事はあるもんぢやない、兎に角お寺へ持つて行つて神樣に祓ひ淨めて頂かうと言ひましたが、それは祖母が私を欺いたのでした。何故ならお坊樣には出さずに煖爐の隅の方にそれを隱して置いたからでございます。一體祖母の部屋には襤褸、膏藥、草、御符と云つたやうな種々樣々のがらくた物が貯めてあるのでございます。私が達て申しますと祖母も强情を張つて其の腕を手放さうとはしません。そしてその日からと云ふもの此お婆樣が非常に不思議な療治をするやうになつた事は疑ふ餘地もありませぬ。例へば齒痛みと致しませうか。祖母が其の人の頰にあの腕を觸れるだけで以て、腫れてゐるのが退いてしまひます。熱病、疝氣、癲癇も祖母の手に掛れば治りまする。

牛が產氣付いてゐながら出ない時は、モンナ・ボンダがあの石の腕を其の牛に當てますと、鳴き聲を立てゝ犢を產みまして、出た牘は藥の中で躍つてゐるといふ始末。斯んな不思議な事をする評判が世間に立ちましてお婆樣の金箱には金が盛り上りましたが、併しそれがために一向何も善い事はございませんでした。と云ふのはあのドン・ファウスチノ樣が一日として私に安い思ひをさせなかつたのでございます。寺で皆の前で說敎なさる時、此の私を惡し樣に仰有りました。お坊樣は私を地獄の子だの惡魔の伜だのと罵つた上に、私の事を僧正樣に傳へて聖餐を頂かせないやうにすると言つてをられます。往來へ出ますと子供達が背後から跟いて來て、指しながら、彼處へ行くのがグリルロだ、魔法使ひだ、彼奴の祖母は巫女なのだ、二人とも惡魔に身體を賣つたのだと囃します。夜分でさへ私の心には休まりがありませぬ。思ひなしか石の手が持ち上がつて柔然私の首の上に載つかります。と不意に其奴のために喉を押へられて息がつまりさうになりますから、聲を出さうとしますけれど、それが出せませぬ。此奴あ本統に飛んだ事だ――と斯う考へたものですから、或る朝未だ明るくなる前に婆樣が草を摘みに行つたを幸ひ、私は起きて婆樣の部屋を明けると腕がありましたから、取出して旦那樣の處へ持參致しました。屠屋のロットならあれを十ソルヂで買つたのでせうが、あなたからはそれで八ソルヂを

頂いた計りでした。けれども旦那樣のおためになる事なら差引二ソルヂは愚かな事、私の一命をさへ何時なりとも差し出しまする。何卒神樣の聖い御惠みが旦那樣に降りますやうに、アンヂェリカ樣にも、お子樣達にも、お孫樣達にも降りますやうに！』

『それではグリルロ、お前の言ふところに依つて見ると』とチブリアノは思ひに沈みながら言つた。『水車場の山には私らの物が見付るなう？』

『何うやら澤山見付かりさうでございます』と深い溜息を吐いて老爺は言つた。『併しドン・ファウスチノ樣に何うあつても話してはなりませぬ。若しかお坊樣の耳に其の事が這入ると、お坊樣は定めし私の惡口を言ひ觸らしませうし、又旦那樣に對しましても惡い事をし兼ねますまい。何故と申すに坊樣は皆の衆を煽動て、旦那樣のお仕事が成就できないやうにするからでございます。まあ〜神樣にお願ひをしまして御慈悲を垂れて頂かなくてはなりませぬ！それは然うと旦那樣、私を御見捨てなく何うぞ私のために一言裁判官に言つて戴きたいもので。』

『はてな？お前の地面を少し計り水車場の奴が横取りした事かな？』

『左樣でございます、旦那樣。彼奴實に狡猾極まる惡漢でございまして、よく人を酷い目にあはす奴でございます。斯うでございます、私が裁判官に牝の犢を一匹贈りましたら、奴孕み牛を奮發しました。裁判官が奴の利益になるやうな判決をしはせぬかと案じられてなりませぬ。何しろ訴訟の黑白が付かないのに、最早あの牛は立派な牡を產んだのでございます。何うぞ御願ひでございますから私のために口を利いて戴きたいもので——全く旦那樣は親と思つて居りますので。あの水車場の山でしようといふ仕事は、旦那樣の御親切に報いる積りでする計りでございます。他の理由なら私の良心を斯んなにして罪に墮すやうな事は致さんのでございますが。』

『安心してゐらつしやい、グリルロ。お前のために此の私が口を利いて進ぜよう、裁判官とは友人の間柄ぢやでなう。ではお前臺所へ行つて、御飯を食つて一杯やるが好い。そして今晩は私と一緒にサン・デェルヴァゾへ出掛けるのぢや。』

老爺は數多度辭儀をして出て行くし、チブリアノは藏に近い小さな部屋へ這入つた。其處は古物の置場で、大理石や青銅で作つた物が壁に懸かつたり臺の上に並べたりしてある。それから鑄牌、古泉の列んでゐる臺には巾を被せてあるし、彫像の壞れて未だ繼合せてないものは大きな箱の中に入れてあつて、何時かを待つて癒合する事になつてゐる。彼は各國にゐる自分の商業代理人の手を經て、或はアゼンス、或はスミルナ、ハリカルナッサス、サイプラス、リュー

コシア、ローデス、又埃及の僻陬、東部諸邦の中心地と云つたやうな、あらゆる古代美術の土地から古物を買ひ入れたのであつた。カリマラ組合の長は此の寶物を眺めてから、羊毛の輸入に對する關稅の事を深く考へ込んだ。そして到頭モンペリエの羊毛市場へ行つてゐる手代に送る手紙を書いた。

二

さて一方に、倉庫の後ろの、荷包みが重ねてあつて、光りといへばマドンナ像の前の燈明のみが細々と光つてゐる前で、三人の青年ドルフォ、アントニオ、ヂョーヴァンニが冗口を利いてゐた。ドルフォといふのはブォナコルシの手代で、赤毛の獅子鼻ではあるが氣心の善い若者、アントニオ・ダ・ヴィンチがカンナといふフロレンスの尺で手早く反物を量つてゐるのを帳簿に記入してゐる。アントニオは年よりは老けて見え、眼はどんよりとして、其の黑い髪は薄くばさばさしてゐる。ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオはミランから繪畫の修業に來てゐる者で、十九歲の大きな少年なのに、憶病な羞恥み屋で、そして無邪氣な灰色の目は打沈んで、優柔不斷な容子が顏に表れてゐる、彼は既に出來上つた荷包みの上に足を組んで坐つて熱心に耳を傾けてゐた

『到頭斯んな事になつたのだ、異端の神を土中から掘り出したりなんかして！』とアントニオは激して言つてから、『さ、蘇格蘭地の茶縞だ、三十二ブラッチォ、六フィンガーと八ネールだ』と反物の丈をドルフォに書き取らした。それから其の反物を疊んで、置き場所へ投つてから、豫言者の威嚇するやうな態度をして指を擧げて、フラ・ヂロラモ・サヴォナロオラの句を眞似て、アントニオは叫んだ、『疾く〳〵地上の神に短劍を！　聖ヨハネはパトモスの島で斯んな光景を夢想された。それは天使が龍、即ち大蛇、實は惡魔であるが、其の龍を捕へて一千年の間繫いで置く事にして、底無しの穴に入れて閉ぢ込めた上封印をなされた。そして一千年が滿つる迄は人間を欺かないやうにされた。所が今日こそはサタンが宥されて彼の幽閉から出たのだ、今日こそは千年が盡きたのだ。僞りの神や、非基督教徒の先進や後進は天使の封印の下から這ひ上つて、人類を誘惑するため此の世界へ歸つて來たのだ！　陸上に棲むものも、海上に棲むものも、みな憐れなる哉だ！――えゝと、ブラバントの黃色薄地、十七ブラッチォ、四フィンガー、九ネールだ！』

『ではアントニオ、君の考へは何うです？』と驚きながらも熱心な興味を見せてヂョーヴァン

ニは尋ねた。『そんな徵候は證據になるのか知ら――』

『然うとも、然うとも！ね、君、到頭其の時になつて來たのだよ。古代の神像を發掘するばかりか、それに模して新らしい奴を拵へるのだ。畫家も彫刻家もモロク――といへば惡魔の事だがね、其のモロクに奉事するに日も維れ足らずだ。詰り神のお住ひを變へてサタンの殿堂にするのだ。宗教畫としてからが、殉教者や聖徒と見せ掛けて、不潔な神を描くのだもの、そして一般の人がそれに祈りを捧げる始末さ。例へばバプテスマの約翰の代りにバッカスを描くし、主の聖母の代りに無恥なヴィーナスを私らに授けるのだ。あの畫が皆んな火に焚けて、其の灰が風に吹き散らされゝば好いのに！』

熱心な手代の惰い黑目から押へ隱して居たやうな閃光が發した。併しヂョーヴァンニは敢て答へようともせずに沈默してゐた。其の憂しい、子供のやうな眉毛は沈思の重みに壓されて締まつてゐたが、それでも到頭口を開いた。『アントニオ、噂に依れば君の親戚のレオナルド先生は畫室へ弟子を取つてくれるさうだ。私も以前から希望してゐたが――』

アントニオは澁面作つて相手の言を遮つた。『ヂョーヴァンニ、君は魂を亡くしたければレオナルドの家へ行くが好い！』

『何ですと？何故です？』

『あのレオナルドは私の近い親戚で、私よりは二十年も先に生れてゐるけれど、併し聖書に書いてあるぢやないか、汝は第一、第二の諫めを受けたる後には、異教の徒より引返すべし、と。レオナルドは其の異教徒なのだ、そして不信心家さ。あの人の心はサタンのやうな自負で以て曇つてゐる、何しろ數學や魔術に沈湎して自然の奥秘を闡明しようと云ふのだもの。』斯う言つてから目を天の方に向けて、サヴォナロオラの最近の說教を繰り返した。『此の世の知識なるものも神の眼には愚なる事に過ぎぬ。我等は彼等――彼の學者達の如何なるものなるかを知つてゐる、彼等は擧つて惡魔の家へ行くのである。』

『そしてアントニオ、君はレオナルド先生が此のフロレンスにゐる事を聞きましたか？つい此の頃ミランから歸つて來たさうですが』となほ羞恥むやうにしてヂョーヴァンニは言つた。

『何の目的で來たのか知ら？』

『それはミランの殿樣が、なくなられた大ロレンゾ樣の所藏に係る畫を買はれるものなら買ひたいと思召されて、レオナルド先生を御遣はしになつたのです。』

『成程。レオナルドが當フロレンスにゐるのなら、ゐるだけの事だ。そんな事は私に取つて

大事な事でも何でもない』とアントニオは言つて、身體を旋してカンナを持つてつゞいて綠色の反物の丈を量りだした。

暮方の勤行に呼ぶ寺の鐘が鳴り出した。ドルフォは身體を伸ばして、安心の色を見せて帳簿をハタと閉ぢた。蓋しこれで此の日の仕事は濟んで、店や倉庫の戸が締まるからであつた。

ヂョーヴァンニは往來へ出た。微かに夕映に赤く染まつた灰色の空は濡れた屋根の間から細く見え、細かい雨が風のない空から降つてゐる。と、不意に近い小路の窗から唄の聲が流れて來た——

偖ても綺麗な羊飼ひ、
女だてらに足輕く、
何處の山からいらしつた？

聲はよく徹つて若々しい。調子を取つて踏子をうつ音からヂョーヴァンニはそれが娘の機を織つて居るので、唄は梭を投げる度に唄ふのであると察した。何とはなしにぼんやりした喜びを感じて彼は聞いてゐるうち、春めいて來た事を思ひ出して、柔かいそして物悲しい一種變な風の感情が湧き上つてゐるやうに思はれた。

『ナンナ！ナンナ！小つちやなお前は何處へ行つた？お前の耳は何を聞いた？急かぬと儘鈍は冷めるぞえ。』と唄の聲がしてから、木履で牀の上を早く歩む音が聞えて、尋いで靜かになつてしまつた。

ヂョーヴァンニは窗を見詰めて長い間立つてゐた。今聞いた快活な唄は、

偖ても綺麗な羊飼ひ、
女だてらに足輕く、
何處の山からいらしつた？

と宛ら遠くに響く牧童の笛を聞くやうに、彼の耳の中で反響してゐた。

そして獨りで溜息しながら彼はカリマラの組合長の家へ這入つて、蟲の食つた欄干が附いてぐる〳〵曲つてゐる階を登つて、圖書室になつてゐる大きな部屋へ這入つたが、其處の机に倚つてゐるのはミラン侯の宮廷の史官ヂョルヂオ・メルラであつた。

三

メルラがフロレンスに來たのは君侯の使命を奉じて、大ロレンツォの書庫にある珍本類を購

ふためであつた。そして古代人の學藝に關して自分と同樣に甚だ熱心なブオナコルシの家に寓してゐるのである。で、フロレンスへ來る途、メルラは路傍の或る旗亭で、このヂョーヴァンニ・ボルトラフィオと知り合ひになつて、寫字生が要るといふ口實を設けて、チブリアノの家へ伴つて來たのである。

ボルトラフィオが這入つて來た時、メルラはロオマ敎の祈禱文書か乃至は詩篇らしい非常に古びた書物を恭く眺めながら吟味してゐた。彼は用心に用心を加へて水氣ある海綿で羊皮紙の上を撫でたが、それは死んで生れた小羊の皮から製した物で甚だ柔かな質の紙であつた。そして所々を輕石で擦つて、小刀の刄と光澤を付ける道具とで滑かにしてから、明るい方へ翳して再びそれを打ち眺めた。

『實に美しいものだ！』と嬉しさうに唇の內に吸ひ込むやうにしてメルラは呟いた。『出て來て天の光りを受けるが好いぞ！まあ大勢ゐること、そして何といふ美しさぢやらう！』

彼は仕事を止めて禿げた頭を擡げた。其の顏は脹れて鼻は赤く、眉毛は能く動いて、小さな生彩のない目にはそれでも一杯の元氣が籠もつてゐるらしい。窗臺の自分の傍にある杯に酒を注いで、それを飲んでから咳をして、更に仕事に着手しようとした時、ヂョーヴァンニの姿が目に這入つた。

『おや、これはお若い出家樣か！』とメルラは愉快氣に叫んだ。『其方は私の手を缺かしてゐたぞ。私は一人で、小僧さんは何處へ行つてゐるぢやらう？屹度フロレンスの美人に戀慕したのに違ひない、と言つてゐたのぢや。大した美人に相違あるまい。そして戀慕は罪惡ではないからなう。いや、此の私も無駄に時間を費しては居なかつたぞ。あんな美しい代物を其方は生れて未だ見た事はなからうて。其の美人を見せて貰ひたいといふのかな？否、然うは行かぬ、見せるが最後、其方は東西南北にバッと一件の物を言ひ觸らすからなう。そして考へて御覽、私は希伯來の襤褸賣から歌と思つて買つたのに、それが實は美人ぢやつたのだ。まあ〳〵其方には見せてやらざなるまい、其方だけにはな！』そして怪しげに麾いて囁いた。『此方へお出で——もつと寄つて——此方へ！』

そして經文の角張つた文字を一面に書き附けてある或る頁を指したが、それは聖母を頌した詞や、聖歌、祈禱の文句なぞで、大きく記した樂譜が其の間に混じつてゐた。更にメルラは書物の他の處を開けて、ヂョーヴァンニの目の高さ位に擧げて光線に當てた。ヂョーヴァンニは注意

して見ると、メルラが經文を削げ取つた箇處からは別の文字が現れてゐるが、それは判然分らないもので、謂はゞ文字ではなくて文字の幽靈であつた。蒼白く痩せ衰へ、消え入らん斗りの姿ながら、それでも矢張り羊皮紙の上に捺されて迷つてゐるのである。

『見えるかな？見えるかな？』と得々としてメルラは言つた。『可愛い奴ぢやないか？だから美しい代物だつて言はぬこつちやない！』

『けれども何でせう、これは？』ヂョーヴァンニは魂消て斯う訊いた。

『其處迄は言へんが、多分古い詩集の殘片で、希臘の美神に屬する新らしい寶ぢやと思ふ。で、若しか私がゐなければ、此奴は神の光りに接する事が出來んのぢや――和唱の歌や懺悔の讃美歌の下に何時までも埋もれてゐるのぢやつた。』そして中世の寫字僧は高價な羊皮紙を利用するため、多分希臘の古代文字と思はれる此の詞句を削つて、其の跡へ自分の聖歌を書いたのだらうと、メルラはヂョーヴァンニに説明して聞かした。此の時、室内は徐ろに暮れ行く夕陽の紅色に滿ちて、それが最後にパッと輝いた刹那、古書の幽靈たる此の古びた文字の影は、一倍明瞭になつて現れた。

『御覽！御覽！』とメルラは恍惚として叫んだ。『年代を經た墓から死人が出たのぢや！オリンピヤの神々を頌した歌なのぢや！其方に初めの方の數行は分つたらうな！』

と言つて、希臘語を譯しながら斯う讀んだ――

『優しき神、見事なる冠を戴き給ふヂオニサスに光榮あれ、
銀の弓を持ちて箭を遠くに射給ふ恐ろしき神、
流るゝ髪の神、ニオベの子等を殺し給ひし神、
爾フェーバスに光榮あれ――

それから其方が非常に恐れてゐる例のヴィーナスを頌した歌もあるぞ――

榮光あれ、爾に、金の四肢を有ち給ふアフロヂテの神よ、
爾は神と人との喜びなり。』

併し詩句は此處で上に書いてある經文のために隱されて斷れてゐた。ヂョーヴァンニは其の本を下に置いたが、置くと直ぐ古代希臘の文字の跡が薄く有耶無耶になつて、羊皮紙の滑かな黄色の中へ消えてしまつた。目に見えるのは、寫字僧の書いた黑色の、判然として脂染みた文字で、唄ふため大きい方形の譜の書いてある懺悔の歌であつた――

我が祈りに耳を假しませ、あはれ大神よ、願はくは隱れて我が祈願を拒み給

ふが如き事あらざれ。我が心は、我が中にありて我れを痛め苦しむ、あなや
死の恐怖は我れに臨み來りぬ。

薔薇色せる反射の光は消え失せて、暗黑は室内に漲つた。メルラは土燒の德利にある酒を注いで飲んでから、相手に差した。

『これさ、私の健康を。一切の善き物を捨てゝ酒を選ぶ！其方は厭やと言ふのか？よし、よし！何うなりと其方の自由ぢや。其方のため、私は飲むとしよう。それにしてもお若い出家樣、あなたは何故其のやうに機嫌が惡るい？水の中へ陷まつたやうに靑い顏をしてゐらつしやる。はゝあ、あのアントニオの沒分曉漢が豫言めいた事を言つて嚇かしたのぢやな？あんな言葉には唾を引つ掛けるのぢや、ヂョーヴァンニ、唾を引つ掛けて置けば澤山ぢや！不吉な聲を出すあの鴉共のカァ〜〜啼くのに痘瘡の神が取つ憑けば好い！さ、言はつしやい、其方はアントニオと一緒にゐたのぢやらう？』

『然うです。』

『して彼奴何と言ひ居つた？』

『非基督敎徒の事とレオナルド・ダ・ヴィンチ先生の事を言つてゐました。』

『私の思つてゐた通りぢや！其方は口を利けば必然レオナルドの事を言ふ！あの男に其方は迷ひ込んだな、お馬鹿さん。私の言ふ事を聞くのぢや、ヂョーヴァンニ。そんな愚にも付かん事を頭の中から出してしまつて、甘んじて私の秘書となつてゐらつしやい。世間の事は私から其方に見せて上げる、古學や法律を敎へようし、又辯舌家にもして上げるし、堂上の詩人にもして上げる。富貴榮達の途は備はつてゐるのぢや。ヘン、畫か！あんな無益な物が何になる！畫なんてものは一種の商賣ぢや、士人の携はるべき物ぢやない、とセネカが言つたげな。美術家なんていふ手合ひを顧みてゐちや可かんて、奴らはみんな無學で、野鄙な人間なんぢやから——』

『そんな事はありません。私の聞いたところでは、レオナルド先生は大學者ださうです。』

『これは耳新らしい。ぢや伺はうが、あの男は拉典ができる樣ぢやらうか、シセロとクインチリィアンとを混雜にし、希臘語といへば匂ひさへしないぢやないか。それでも其方は彼れを學者と云ひなさるか？』

『でも、』とボルトラフィオは言ひ張つた。『先生は素晴しい機械を拵へました。それに自然現象に關する先生の研究は——』

『機械だつて！ウーフ！自然の研究だつて！其方は何處までそんな事に囚はれてゐるのぢやらう？私は「拉典語の優美」といふ書物を書いて、語の特質を二千以上摘錄した事がある。あれなんぞは眞に新機軸で、實に優美なものぢや。あのため私が何れ程困難をしたか其方には分るまい？所で車輪を機械に應用したり、鳥の飛び方や野原の草の發芽を注意して見たりするのを、其方は學問ぢやと言ふのかえ？そんな事は要するに遊び事ぢや、赤ん坊の碌でもない戯れに過ぎんのぢやて。』

老人は口を閉ぢた。其の顏は嚴めしくなつた。尋いで少年の手を執つて、重々しい口調で言葉を續けた。

『能つく聽くが好い、ヂョーヴァンニ、私の言ふ言葉を其方の心に燒き付けて置きなさい。私らの先生は希臘人と羅馬人ぢや。凡て此の地球上の人間の出來る事は殘らずあの人達がして置いたのぢや。私らはたゞ希臘羅馬の人の後から跟いてさへ行けば宜いのぢや。『弟子は其の主より大ならず』と記されてあるではないか？』と言つて酒の杯を擧げながら自分の顏の線も皺も一つの大きな微笑の中に溶けるやうに無氣味な笑ひを湛へつゝ、ヂョーヴァンニの目の中を凝と眺め入つてから言葉を續けた。

『おゝ青春！青春！其方を見てゐると羨望に堪へん。其方は蕾ぢや、春が來れば綻びる蕾なのぢや。所が馬鹿な其方は女を遠ざけ酒を賤しとして、隱者、世捨人になりたがつて居るが、それにも拘らず其方の心中には小さな惡魔が住んでゐるぞ。おゝ私の友よ、私は能く其方の心を讀んで知つてゐる。其方の心の奥の奥まで能く見拔いて知つてゐるのぢや！そして何時か其の惡魔が飛び出す日が來るに相違ない。いや、左樣でないと云つてもそれは駄目ぢや。其方は何れ程氣六ッかし屋でも、其方と交る事を嬉しがる奴がゐるぢやらう。これさヂョーヴァンニ、これ伜や、其方は此の羊皮紙ぢやぞ――外は懺悔の歌ぢやけれど、其の下にはヴィーナスを頌する歌がある！』

『ヂョルヂオ先生、暗くなりましたが、明りを持つて來る方が好いぢやありませんか？』

『何故そんなに急くのぢや？斯んな薄暗がりの中で話し合つて、私の過ぎ去つた青春を回顧する方が樂しいて。』彼の舌は縺れて、言葉は判然しなくなつた。『定めし其方は私の顏を見詰めて、此の爺、酒に醉つて他愛もない事を言つてゐる、と心の中で思つてゐるぢやらう。それはちやんと私に分つてゐるさ。併し私は其奴を此處の中に納めてゐる』と滿足氣に禿げた額を拍つて點頭いて見せた。『自慢ぢやないが、此のメルラ位拉典語の精妙な者が他にゐるか何うか學

者に尋ねて御覽！マルチアルを發見した者は誰ぢやつた？チブル門に載つてゐる有名な誌銘を讀んだ者は誰ぢやつた？と云ふのは即ち頭がフラ〳〵する位高い處に昇つて、石は足の下から崩れ落ちるし、木の枝に掴まる時は眞逆樣に墜ちさうな氣がするやうな目に遇つての事ぢや。幾日となく、日がな一日燃えるやうな太陽に照らされて、僅か計りの古文字を讀んで、そして寫し取つたのぢや！其處を百姓娘らが通り掛つて、あの上を御覽よ、肥えた鶏が彼處で巣を作る場所を搜してゐますよ、と互に斯んな事を言ひ合ふので、私も媚かしい返答をする。そしてその娘達が彼方へ行つてから私は又仕事に取り掛つたのぢや。或る時なぞは石が壞れてその上に羅や茨が生えてゐたが、それを取つて見ると唯つた二語が見付かつたわい、「羅馬人の光榮！」つて。」斯う言つて大分默してゐたが、此の壯嚴な響きある發聲の反響を聞くやうに、メルラは低い、恐怖を帶びた語調で繰り返した。「グロリア・ロオマノォルム！」羅馬人の光榮！」

更に彼は危なかしく手を振つて、「本統に！過去は再び歸らないけれど、こりや記憶すべき事なのぢや」と言ひつゝ杯を擧げて、嗄れた聲で學生の酒の歌を唄つた。

『唯の一雫だつて僕は見逃さない、
唯の一滴だつて、君！
生命のある限り樽を目掛けて行つて、
樽のある所で僕は止まる、君。
僕は酒を愛して酒の歌を唄ふ、
僕は又拉典の三女神を愛する、
僕が酒を飲めば僕の喉は、
ホラチウスよりも上手に唄ふ。
酒に親しみ居る限り、
酒は僕らの腦の回りを廻轉する、
諸君、バッカスに對して聲を揚げよう、
神を榮頌せん！と。』

彼は咳しさうになつたので、歌を終りまで言ふ事が出來なかつた。此の時は最早や暗くなつて、ヂ・ーヴァンニに師の顏は見取れない。戸外の雨は依然止まずに、頻りにザア〳〵降つて、騷がしい音を立てながら下の中庭へ流れ落ちる。

『まあお小僧樣聞かつしやい』とメルラは吃りながら言つた。『えゝと、何を言ふのだつけ？

私の妻は美人ぢやて――否――然うぢやなかつた。まあ待つてゐらつしやい。然う、思ひ出した。其方は、記せよ汝羅馬人、汝は帝國の人民を恢復せん、といふあの詩の句を知つてゐる筈ぢや。本統に彼等羅馬人は巨人ぢやつた、宇宙の君主ぢやつた！』とかく語つた彼の聲は震えた、ヂョーヴァンニは師の目の中に涙の宿つてゐるのを見た。『私は繰り返して巨人と呼ぶ。然るに今日は――あゝ今日はそんな事を口にしてさへ宜しくない！がまア私らの君主、ミランの大公、ルドヴィコ・イル・モロ樣の事を言つて見てもさ。成程私はこの人から祿を頂戴してゐる。この人の傳記を書いてゐる。私はチッス・リヴィウスの亞流で、臆病な野兎であり、又藥のやうな人間でもあるこの人を、ポンペーやシーザーに比べて居る。併し私の心には、ヂョーヴァンニ、私の心には――』と言葉を止めて、世なれた廷臣に能く見るやうに疑念らしく戶の方を眺め遣つてから、相手の少年に寄り添ふて囁いた。『メルラ老人のこの心には自由を愛する念が未だ死んではをらぬ、否決して死にはせんのぢやー！斯んな事を又と口にしてはならぬが私は其方に言つて聞かせる、今の時世は善くはないぞ、これ程邪惡な事は未だこれ迄なかつた事ぢや。そして人間も然うぢやて！あんな奴らを見るさへ此の胸が惡るくなる。腐れ果てた奴！土くれに過ぎんのぢや！所が何うぢやい、奴らは鼻を捻り上げて古代人と同じ者と思つてゐる。何であんなに自惚れが強いのか私は知りたい位ぢや。まあ聞かつしやい、斯んな事がある。希臘にゐる私の知人から手紙が屆いたのぢやが、それに依れば未だ近頃の事、キオスの島で尼寺の洗濯女共が朝早く麻の洗ひ物を叩いてゐると、海岸に神樣のゐるのを見付けたのぢや。正眞の昔の神樣で、魚の尾、鰭、鱗が備はつてゐるトリトンぢやつた。馬鹿な物知らぬ奴とて女共は惡魔ぢやと考へて、恐れて逃げたのぢや。併しトリトンは老衰して何うやら、病氣らしく、沙の上に腹を付けて、綠色の鰭を太陽に干して、其の髮は灰色であるし、目は乳呑兒のそれのやうにどんよりしてゐるので、臆病者共はこれなら大丈夫と勇氣を出したと思ひなさい。そこで周圍に寄つて來て、基督敎の祈禱文を無暗と浴せかけて、犬のやうに毆り殺しにしたのぢや。あの古代の神、海洋の神々の中の最後に殘つてゐた神樣をさ。ポセードンの末孫であるかも知れぬにさ！』

老人は痛ましさうに首を動かして、基督敎徒の洗濯女に殺された海の怪物の事を思ひやつた時、酒が流さす脆い涙は、雙頰を傳はつて下に落ちた。此の時下部が蠟燭を持つて這入つて來て窗の扉を締めたので、異敎の幻は暗と共に去つて消え失せた。そして二人は食事の案內を受けたけれど、メルラは酒に醉ひつぶれてしまつたので扶けて寢に就かせる事にした。

ボルトラフィオは仲々眠れなくて、ヂョルヂオ先生の安らかな鼾を聞きながら、心では例の如くレオナルド・ダ・ヴィンチの事を思つてゐた。

四

ヂョーヴァンニは叔父のオスワルド・イングリムの命を受けて當フロレンスへ來たのである。此の叔父といふのはグレッツに生れた獨逸人で、硝子畫を職とし、ストラスブルヒの有名なヨハン・キルヒハイムに師事してゐた人であつた。ヂョーヴァンニは此處タスカニーの首府なるフロレンスでのみ得られる澄んで光りのある繪具を求めに來たのであるが、それはミランの伽藍の仕事をするに就いてイングリムが要るのであつた。此の少年はオスワルドの兄で寶石細工を業としてゐたライノルドの私生兒なので、ボルトラフィオの名は母方から傳はつたのである。そして此の母はロンバルヂーの生れであるが、オスワルドに言はせると破廉恥な女で、兄の零落は一々此の女のためであつた。心の扭ぢくれた叔父に養育され、話して聞かされる昔話といへば邪惡な妖怪の事や、鬼、鬼婆、魔法使、狐憑きなぞの事であつたゝめ、ヂョーヴァンニは物怖ぢのする淋しい質の少年となつた。就中彼が恐れてゐたのは一種の鬼で、北部伊太利の口碑に依れば、それが女の姿に化けるので『白夜叉』又は『白眉の叔母さん』と呼ばれてゐるものであつた。併しヂョーヴァンニは極く小さな時分、そら泣くと白夜叉が來るぞと叔父に嚇かされて默つた頃から、何時か自分は其の白い顏の奴に出會つて、目のあたり其奴の容貌を見てやりたいといふ兢々した好奇心が恐怖の中に混じてゐたのである。

ヂョーヴァンニが大きくなつた時、叔父のイングリムはこれを宗教畫家フラ・ベネデットに託して弟子とならしめた。ベネデットは親切な淳朴な質の老人で、畫に取り掛る第一歩として全能の神や、愛の深い聖母や、基督教徒中最始の畫工であつた聖路加や、其の他天國にまします一切の聖徒に祈願する事を敎へ、次に慈愛、恐惶、忍辱、從順の衣を著ける事を敎へ、最後に卵の黃味と、無花果の嫩枝から得た汁に酒を混じたのとで、繪具を調合し、且つ骨灰――能ふべくば去勢した鷄の翼を燒いて灰にしたので、椨の古木の板を磨いて置くべき事を敎へた。其の敎授は無際限な上に微かい點に涉つてゐたので、ヂョーヴァンニは直きに『そんな物を打遣るが好い、何の益にも立ちやせんのだから』と言つて、麒麟褐といふ色を捨てる時に用ゐた其の輕蔑的な言葉を覺えてしまつたが、此の言葉は定めしフラ・ベネデットの師匠も、又其の師匠の師匠も口にしてゐたものであらうと想像した。ベネデットが弟子に順次畫の秘訣を敎授して行く時

は、常に靜かな誇りの含んだ微笑を湛えてゐるのであつた。例へば年若い者の顏を描くには町に飼つてある牡鷄の卵でなくてはならない、田舍のは赤味の勝つた黃味の卵を生むので、それは皺の寄つた赤黑い顏を描く場合にしか適しないといふやうな事を敎へて呉れた。斯うした微細な事を心得てゐながら實に質朴な小兒のやうに淸淨な畫家で、仕事に取り掛る前は夜も眠らず食物を攝らないのである。救世主磔刑の圖を描く時、顏は定まつて滂沱たる涙に濡れてゐた。

ヂョーヴァンニは此の師匠を敬愛して畫家中第一の人であらうと目してゐたが、近頃になつてそれが動いて來た。フラ・ベネデットは、男子の身長は其の顏面の長さの八倍と三分の二に當るといふ自家の解剖上の規則を說明する際、麒麟褐の事を言つたと同じ生半可な語調で、『併し婦人の身體の方はそれに據つては可けない、婦人には比例がないものだから』と附加するのが常であつた。此の獨斷、並びに他の例則ち凡て魚類の表面は黑味を帶びてゐるが內部は鮮明であるとか、神がイーヴを造り給ふた理由に依つて、男子の肋骨は婦人のに比して數が少いと云つたやうな事は、彼に取つて信條とも目すべきものであつた。又例へば比喩的に四大元素を描き表さうとして、鼴鼠を土、魚を水、火蛇を火、カメレオンを空氣の意味にしたが、併しカメレオンなる語はカメル（駱駝）から來たものと考へた結果、此の單純な頭腦の僧は、大きな駱駝が喫驚する程顎を開いて、仰山相に呼吸してゐる圖で氣體を表したのである。此の他彼の有する概念は凡てこれと同樣不精確なもの計りであつた。斯んな譯からヂョーヴァンニの心に疑惑が潛むやうになつて、フラ・ベネデットが所謂『現世の知識の惡魔』たる反抗的精神が生じたのであつた。此の少年がフロレンスに來る暫らく前、たま〳〵レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた畫を少し計り見たので、疑惑の念は彼の心に迅速な勢ひで湧き上つて、最早それが鎭壓する事の出來ないやうになつた。

此の夜、タスカニーの首府フロレンスで、ヂョーヴァンニはヂョルヂオ師の安らかな鼾聲を傍らに聞きながら寢てゐても、依然此の事を思ひめぐらしてゐた。今夜これを思ふのは恐らく千回目であるかも知れないが、考へれば考へる程益々惑ふ計りなので、彼は天の加護を乞はうと決心した。そして滿腔の希望を抱きながら、夜の濃い闇の中に目を擧げて祈りを捧げた。

『神よ、私を捨てずに助力し下されるやうに願ひます。まことレオナルド師が不信仰の人で其の妙技の底に誘惑と罪惡が潛んでゐまするなら、何卒私の思ひがあの人の事に及ばないやうにして下さい。私の心を彼の畫の記憶から淨め、且つ私を惡から遠ざけさせて下さい。それとも若しや貴い畫があなたの喜びとなり、あなたの御名の光榮となつて、フラ・ベネデットの知ら

ぬ事、又私が切に學びたいと望んでゐる事、例へば解剖、遠近法、明暗の法則のやうな――畫道の一切を知る事が出來まするものなら、お丶神樣、果してそれが出來まするなら、何卒私の意志を強固にして下さい。私の目を明かにし、斯くして疑惑を根絶しうるやうにして下さい。そしてレオナルド師が師の畫室へ私を接見して呉れるやうに、又フラ・ベネデットは私を宥して呉れて、私は決してあなた神樣の目に罪ある者と映じてゐない事を知つて貰ふ事を許して下さい。』

熱誠の籠もつた此の祈りが濟んだ時、ヂョーヴァンニは心の上に鎭靖劑が降つて來たやうに感じ、頭腦が少しづゝ混亂して來た。そして自分は硝子畫家たる叔父の家へ歸つて、白熱した鐵を硝子の中へ突き刺す時に發するシューといふ音を聞いてゐるやうな氣がした。幾つかの色硝子の框になつてゐる紅形の鉛の扭ぢれたのが見えるし、又硝子を固著せしめるため、鉛の端の方にもつと刻み目を入れろと命令してゐるオスワルドの聲も聞えたが、其の中にあらゆる物は消え去つて、寢返りを打ちながら彼は眠つてしまつた。

それから一つの夢を見たが、後々に至る迄それは折々思ひ出されるのであつた。今自分のゐる處は廣い眞暗な大伽藍の中で、前には樣々な色を見せたゴチック式の窗がある。其の窗の畫は救世主が『我が父は農夫なり』と說かれた言葉に因みある彼の不思議な葡萄の刈入れの光景であつた。磔に掛かり給ふた裸形の體は酒を搾る器械に挾まれて、傷口から血が流れてゐる。そして其の血を桶や樽に受けてゐるのは法王、大僧正、皇帝なぞで、諸々の使徒は葡萄の實を投げ込んでゐるし、彼得は其の葡萄を踏み躪つてゐる。後ろの方では豫言者や長老達が葡萄畑の土を掘つたり葡萄の枝を剪んだりしてゐる。それから、獅子、牡牛、鷲が一臺の荷車を挽いて通り過ぎたが、其の馭者は聖馬太であつた。

此の種の意味を寓した畫を自分は叔父の仕事場で見た事はあるが、併し斯んな各種の色――黯黑んではゐるが寶石の燦たる光ある斯んな色は何處でも見た事はない。就中自分が驚いたのは主の血の眞紅な事である。と、伽藍の奥の方から微かに反響して聞えるものがある、それは自分が愛誦してゐる次ぎの歌らしい――

あゝ童貞の花、
匂高き百合の花、
いつくしみは深く、
朱の色は六個に。

併し歌は止んで窗の眞赤な光りは最早やなくなつた。そしてアントニオ・ダ・ヴィンチの荒々しい聲が耳邊に高く響いた。

『おい逃げろ！逃げないと生命がないんだぞ！そらあの女が來るよ！』

あの女とは何の女の事か訊く必要はない。何故なら白夜叉が後ろに來てゐる事は自分に分つてゐるからである。氷のやうに冷めたい一陣の風が吹き起つて、人間の手とは見えないほど重い手が自分の喉を締めて窒息させようとする。もう今にも死にさうなので聲を揚げた途端に目が覺めた――見ればヂョルヂオ師が自分の側に立つて、蒲團を取除けようとしてゐる。

『さ、牀から出ないと置いてきぼりを喰はされるぞ。さ、起きるのぢや！時間がもう過ぎてゐるのぢやから』と考古學者は喚き立てた。

『え、何です！何處へ？』と半分は眠りながらヂョーヴァンニは呐つて言つた。

『何處へだつて？忘れる法があるものか。サン・ヂェルヴァソの山莊へさ、水車場の山へ掘りに行くのぢや。』

『私は行きません。』

『行かない？何のために私は其方を起したと思ふ？何故私は二人で樂に行けるやうに、黑驢馬に鞍を置かせたと思ふ？さ、そんな强情はな廢めにするのぢや。さ、さ、起きた、では、ヂョーヴァンニの坊ちやん、其方の耳の端で言ふ事がある、レオナルドも行くが何うじや。』

と聞くなりヂョーヴァンニは跳ね起きて、二の句を繼がせず著物を引つ掛けた。

そして二人は直ぐに中庭へ降りて行くと一行は其處で出立の支度をしてゐた。グリルロは彼方此方を驅け廻つて助言したり指圖したりしてゐた。到頭一同は發足した。チブリアノの今一組の友人連、其中にはレオナルド・ダ・ヴィンチもゐるのであつたが、それは別の途を取つてサン・ヂェルヴァソへ行くので、此の一行とは後刻出會ふ事になつてゐた。

五

雨は止んで、北の風が雲を吹き拂つてしまつた。月のない空に星のきら〳〵してゐる樣は、宛ら小さいランプが風に煽られてゐるかのやう、樹脂の燃える松明も風にゆら〳〵搖らめいて、火の粉がぱッと飛んで行く。騎馬の一隊は道をリカソリ街道に取つて、サン・マルコの御寺を過ぎて鋸の目に似たサン・ガルロ門に差し掛かつた時、其處の番兵共は口喧しく罵つて罷り通す事は成らぬと力味立つたが、餘り眠たさに眼前の事が能くも分りはせず、それに過分の釉の下

を掴まされたので直きに門を出してやつた。門を出ると道はムニョーネ河の狹い深谿に沿ふてゐる。一行は幾つか寒村を通つたが、其處の往來は、フロレンスのよりは狹隘で、粗雜な石造の家は城塞のやうに高かつた。それを通り拔けるとサン・ヂェルヴァソの農民の所有に係る橄欖の林に出た。そして二道の會合してゐる處で馬を下りて、チブリアノの葡萄畠の直ぐ側にある水車場の山へと歩んだ。百姓衆は鍬や鋤を手にして一行を此の山で待つてゐた。山の後ろで、水ケ窪の名で通つてゐる沼の向ふ方の、闇に暗い樹の間から朧ろに白い物の見えるのは、山莊の壁であつた。それから亭々として黑く聳えてゐる絲杉が山巔に見えるし、下のムニョーネ河の岸に山の名の由來ある水車があつた。

グリルロは發掘の箇所を考へて、其の場所を示したが、メルラは別の處を持ち出すし、園丁のストロッコは、總じて惡鬼は水の邊りに潛んでゐるのが常であるから、今一層下へ降りて水ケ窪の附近を掘らなくてはならんと主張した。併しチブリアノはグリルロが言つた箇所を掘るやうに命じたので、鋤はさく〳〵音を立てゝ、掘り立ての土の匂ひが直きに鼻を打つた。一羽の蝙蝠が無氣味な翅でヂョーヴァンニの顏を掠めて行つたので彼は喫驚したが、メルラは其の肩を叩いて斯んな事を言つた。『お出家樣、何も恐がるに及ばないて、惡鬼なんか此處には一匹もゐないのぢやからな。あのグリルロは頓馬さ。仕合はせと此處の發掘は何時も私の見聞してゐるものと違ふのぢや。時は第四十五回のオリンピアッドの年（メルラは基督敎曆を嫌つてゐた）、法王はインノセント八世の頃であるが、ロンバルヂから羅馬府へ來た土掘りがケーチリア・メテルラの墓に接したアッピア街道を掘つてゐると古代の石棺が出て來た。「クラウヂウスの女ユリア」といふ字が現れてゐて、其の中の死骸は芳紀十五の美しい少女で、體は一面に蠟で包まれてゐながら、其の顏は宛ら眠つてゐる人のやうであつた。然うぢや、現に呼吸をしてゐると言ふても宜かつたのぢや、頰の赤味が去らずにあつて、未だ生命が通つてゐるやうぢやつたからな。で、大勢の者が墓へ羣つて來て、何うしても立去らうとしないのぢや、何故かならユリアの美しい姿を見たいからぢや、親しく見なかつた者は兎ても信じない縹致ぢやつたわい。ところが法王は自分の宗徒の者共が異敎徒の死骸を拜してゐるのを憤つて、死骸を密にピンチアの岡に埋めさせたのぢや。何うぢや、私の言つた事は分つたらうな？そんなのが幾分か發掘らしい發掘ぢや！』

と言つて彼は土掘りが自分の足へ投つた土塊を忌々し氣に蹴飛ばした。不意に一挺の鋤がカチリと音を出したので、立つて見てゐる人は一齊にはッとした。

『骨だ！此處は昔の墓地の跡ですから』と園丁のストロッコが言つた。

丁度此の時サン・ヂェルヴァソの方から犬の遠吠が聞えた。ヂョーヴァンニは心の中で、『斯んなにして墓を發くなんて、不祥な事にならなければ好いが』と思つた。

『何だい馬の骨か！』とストロッコはさも蔑んだ調子で言つて、朽ちた長形の頭骨を土中から出した。

『グリルロ』とチブリアノは心配さうに言つた。『もつと他の場所を試る方が好くはないかな？』

『だから私は言はぬこつちやない』とメルラは大聲で言つて、二人の土掘りを拉して山の裾の方で新に發掘を始めた。ストロッコも同時に一手を率ゐて水ケ窪を掘つた。

と、程なくヂョルヂオの興奮した聲が聞えた。

『やい阿呆共此方へ來い！何處を掘つて好いか知らぬ私ぢやないわい。』

一同はヂョルヂオの方に馳せ寄つたが、此の度も又寶と思つたのが無になつてしまつた。大家の手に成つた大理石の殘缺と思つた物は其の實普通の石に過ぎなかつた。

誰一人グリルロの側にゐるものはなくなつたので、彼は陽に屈辱を感じながら、それでも唯一人壞れ掛けた角燈の光りを便りにして掘つてゐた。

風が止んで空氣は幾分の暖氣を帶びて來た。水ケ窪から霧の立ち昇るのが見える。櫻草や菫の匂ひは淀んでゐる水の濕りに縺れて來た。曉の氣空に迫つて、夜明けを報ずる二番鷄が鳴いた。

突然グリルロは穴の底に落ちて悲鳴を揚げた。

『助けて！助けて！落つこつた！地面が崩れた！』

彼の持つてゐた角燈が消えたので暫らくは何も見えずに唯跪いて、呻つて、はあ〳〵言つてゐる聲が聞えるばかり。やがて明りが來たので能く見ると、グリルロの身體の重みで地下の窖の屋根が拔けた事が分つた。で、二人の若い男が穴の中へ這入つた。

『おい、グリルロ！お前何處にゐる？さ、手をよこせ！それとも、生き埋になつて居るのか、馬鹿な奴だなア。』

と言はれても、グリルロは聲が出ないものゝやうに、挫いた手を事ともせず、引摺るやうに歩みながら、甚だ奇妙な風に足掻いたり藻掻いたりして、最後に魂消たやうな聲を出した。

『神體ぢや！神體ぢや！早く、チブリアノ樣！見事な神體ぢやで！』

『間抜け奴！今度も馬の頭に定まつてらあ』とストロッコは罵つた。

『んにや決して！手が一本ないだけぢや。其の他の處は皆んなちやんとしてゐるぞ――足も、首も、肩も！』と狂氣のやうになつてグリルロは喚いた。

そこで數名の男は用心して煉瓦の崩れを押し分けて穴に降りて行つた。ヂョーヴァンニは地面の上に俯して窖の中を覗いたが、墓に特有な冷氣と長い間蔽はれてあつた濕氣の黴びたやうな臭氣が上つて來た。

チブリアノが穴の中の人々を側に避けさせたので、ヂョーヴァンニは底の方を見ると、古代の赤煉瓦で築いてある壁と壁との間の深い處に、裸體の白い姿が棺臺の上に置かれてある死骸のやうになつて横になつてゐる、併し松明の搖れる光りに當つてゐるので、それが薔薇色に染まつて生命の溫みが通つてゐるやうであつた。

『これあヴィーナスぢやぞ！』とヂョルヂオが叫んだ、『正にプラクシテレスの刻んだヴィーナスに相違ない！チブリアノ殿、お祝ひを申し上げませう！ミランやヂェノアの國々を得るよりも、これがお手に這入つた方があなたに取つて仕合せぢやわい！』

人々はグリルロを穴から引き上げた。彼の顏に血が膠り着いて、片手は腫れ上つて利かぬやうになつたが、其の老いた雙眼には勝利者の誇りが閃いてゐる。

と、ヂョルヂオは、『おいグリルロ！其方は私の友人ぢや！愛人ぢや！恩人ぢや！私は其方を輕しめて頓馬ぢやと言つたが、何の其方は――其方は人間の中で、一等悧發な者ぢや！』と言ひながら、グリルロの腕に抱かれて深い情を以て接吻した。

そして『昔、フィリッポ・ブルネルレスキも自宅の斯んな窖の中でヘルメスを見付けたのぢや』と老人は依然饒舌を續けた。『全くのところ異教徒の者共が彫像の眞價を知つてゐて、基督教徒の憤怒に觸れさせてはならぬと隱して置いたのぢや、何故と云ふに奴らは昔の信仰を剿絶しようとしてゐたからぢや。』

グリルロは滿足氣に微笑を含んで老學者の言ふ事を傾聽してゐて、羊飼ひの笛の音も、羊の鳴き聲も彼の心を引きはしなかつた。丁度白々と明けて水氣を帶びた光りの照り初めた空も見ねば、フロレンスの鐘樓が互に朝の挨拶を交してゐるのも知らなかつた。

『靜かに！靜かに！其の右の方へ寄つたり！然う、然うするのぢや！そして壁から離して！さ、さ、少しも傷けずに持ち出すと一人宛に銀貨五枚やるぞ！』チブリアノは左樣叫んで居た。

此の時星は悉く消え去つて、白晝尙ほダイヤモンドのやうに輝く金星が唯つた一つ殘つてゐ

るのみであつた。女神（ヴィーナス）は不斷の笑みを見せながら徐々に又徐々に上つて來た――昔、泡沫の玉と飛び散る海原から上つたやうに、今や時節到來して暗い土中の千年を經たる墳墓から上つて來た。

『爾に榮光あれ、黃金の四肢を有ち給ふアフロヂテの神よ、
　爾は神と人との喜びなり……』

メルラは此の句を朗唱した。

併しヴィーナスの顏が、朝日の白い光線に照らされて蒼白くなつたのが、ヂョーヴァンニに見えたので、少年の顏色も恐怖のため眞靑になつて、思はず『白　夜　叉！』と呟いた。

彼は起つて逃げようと思つたが、併し驚異の情が恐怖の感を壓倒してしまつた。自分は永劫の熱火を以て罰せらるべき大罪を犯してゐるのだと承知しながら、然かも眞潔な裸體と奕々たる美の輝いてゐる顏面とを凝視しない譯には行かなかつた。嘗てアフロヂテが世界の女王であつた時代に於てさへ、何人と雖も此のヂョーヴァンニ位敬虔の籠もつた戰慄を以てそれを禮拜した者はなかつた。

六

サン・ヂェルヴァソの小寺に鳴る鐘の音が不意に一行の耳を破つたので、一同は思はずその方を向いて仕事の手を止めた。それは朝の靜けさに響く音の事とて、ブリ〳〵して威嚇するやうに聞えたからである。

『神樣、私らの心に惠みを垂れて下さりませ！』と小聲で言つたのはグリルロで、絕望した容子で頭を抱へながら、『それドン・ファウスチノ樣が來ました。大勢の者も連れ立つてをります！私らが目に這入つたのぢや！あれ御覽なされ、あんなに手を鳴らして叫んで居ります。あれ御覽なされ、此處へ押寄せて來まするぞ！アヽ私はもう助からない！』

丁度此の時チブリアノの友人の一行が此處へ到着した。彼等は發掘の模樣を見る目的であつたのに道を失したのであつた。ボルトラフィオは彼等を一瞥した瞬間、新に發見された女神に依然心を奪はれながら、彼等の一人に注意した。其の人は早やヴィーナスを眺めてゐたが、冷々として泰然自若たるその態度は自分の心の動搖と甚だ異つてゐるので、少年は驚嘆の感に打たれざるを得なかつたのである。少年の目は依然彫像を見てゐたが、心は全然自分の傍にゐる人

の方へ行つてゐた。

チプリアノは暫らく思案してから言つた。『別莊迄は二足と掛らないし、扉は丈夫ぢやから包圍されたつて安全ぢやないか。』

『左樣、其の通りでございます。さ、兄弟、神像を救うて上げよう』と叫んだグリルロは、自分が骨を折つて掘り出した像に一心になつてゐるので、自ら指圖をして、易々と水ケ窪を渡つて運ぶ事の出來る工夫を考へた。そして女神の像を家に運んで入口の閾を越すか越さぬに、山巓にドン・ファウスチノの姿が現れ、滿面火のやうに赫となつて兩手を打振つて嚇かしてゐた。

山莊の下の間には此の時人はゐなかつた。そして大廣間は物置きのやうになつて、農具や阿列布油の大甕が澤山入れてあり、一隅には黃金色の藁が山のやうに積んであつて、アフロヂテは靜かに此の上に寢かされた。何の事はない藁は女神に取つて粗末な鄙の寢牀となつたのである。併し此の事を果して、扉に門を差すより早く、打つやら高聲に罵り騷ぐやらして扉に押寄せて來たものがあつた。

『開けろ！開けろ！』と濁聲を揚げたのはドン・ファウスチノであつた。『現に此の世に在ます誠の神の御名によつて私は開けさせるぞ！』

チプリアノは屋內にある石の階段を昇つて、廣間の上の格子窗から羣集を覗いた。そして押寄せて來た者の少數である事が分つたので、例の微笑を面に見せながら談判を始めに掛つたが、僧は指で耳を塞いで、地中から掘り出した偶像（彼は女神を左樣呼んだのである）を渡せと罵り騷いだ。

そこでカリマラの長は策略を用ゐた。

『御用心召され』と落着き拂つて彼は言つた。『町の衞戍長を呼び寄せて置いたから、もう二時間經てば馬に乘つた兵士共は貴殿の相手となるでござらう。何人たりとも暴力を用ゐて我が家へ這入る事は許しませぬ。』

『此の扉を叩き壞せ。神樣が私らに附いてゐらつしやるのぢやぞ。何も恐がる事はない！それ攻めろ！』と僧は喚き叫ぶと共に、側にゐる溫和しさうな老農の手斧を奪ひ取つて、滿身の力を籠めて大扉に打ち込んだ。

『ドン・ファウスチノ樣！これさファウスチノ樣！』と老農は怒り狂ふ僧をを〻〳〵制しながら、『私らは貧乏人でござるぞ。野良を掘つて金錢が出るではなし、斯んな事をしてゐましては皆んなの破滅の基、引つ搦めて牢へ打ち込まれる事でござりませう！』

恐ろしい町の衞戍兵の名を耳にしたので狼籍者共は恐怖に打たれたのか、多數の者は既に後ろを見せてゐた。

『これが寺の地内であつた事柄なら、又兎角うの事もあるけれど』と二三の者は呟く。

『掟の定めた境界では――』

『へッ掟？それやお前さん蜘蛛の網ぢや、蠅を捕るためにこそ張つた物、それで熊ん蜂は捕れませぬ。掟なんて大頭の方々のためにあるものぢやござんせぬわい。』

『誠お主の言はつしやる通りぢや。誰にしたところで、自分所有の地所は自分が主人なのぢやからの。』

此の間も始終ヂョーヴァンニは地から引き上げられたヴィーナスを眺めてゐた。

横の窗から流れ入る日光は、冷めたい窖の暗黑の中に久しく幽閉されてゐた優婀な軀に、再び溫氣と優しみを與へてゐるやうに見えた。像の周圍の金色の蘂は宛然後光のやうに輝いてゐる。

ヂョーヴァンニは再び彼の未識の人を注意した。彼は像の前で膝を着いて、コンパスと定規と銅製の半圓弧とを使つて、それを測つてゐるのであつた。依然として動じない平靜な顏で、其の青色した冷めたい眼は依然深い興味を帶びてゐる。

『何をしてゐるのだらう？何ういふ人だらう？』とヂョーヴァンニは心の中で尋ねながら、指を大膽に迅く使つて、女神の四肢や、其の美の存する深奥な處や、又餘りに纖細なため肉眼では認め難い此の大理石のありとあらゆる精巧な點を調査してゐるのを見た時、彼は殆ど恐怖の感に打たれる程であつた。

山莊の表扉で次第に散り行く群集を罵つてゐる僧の聲がまだ聞えて居る。

『殘つてゐろ、此の畜生共！基督樣を賣つた謀叛人共！町の兵隊が恐さに宗門に弓を彎く奴を打遣つて置くとは何事ぢや！名打ての說敎者カンタベリーのアンセルム樣が言はつしやつた通り、まことと Ipse vero Antichristus opes malorum effodiet et exponet（此句の意は次の基督敎に反對する云々の語である）ぢやわい。分るかい effodiet（掘り出す）が分るかい？基督敎に反對する奴が昔の偶像を地中から掘り出して、最一度此の世へ持ち出さうとするのぢやぞ。』

併し僧の言葉に注意を拂ふ者は一人もなかつた。

『實に厄介な人ぢや、此のドン・ファウスチノ樣と云つたら！』と首を振りながら注意の細かい水車場の持主が言つた。『生命が風前の燈ぢやのに此の荒れ廻りやうは何うぢや。俺あ兎に角

寶の見付かつたのが嬉しいわい。』

『何でも銀の彫像ぢやさうな。』

『銀？　否然うぢやない、俺ら此の目で見たのぢや。大理石で出來て、素裸の怪しからぬ物ぢやて。』

『お、神樣、御免して下さりませ！俺達の手をそんな俄羅倶多で汚して堪るもんか。』

『お主は何ちらへ、ツァッケルロ？』

『野良へさ、行つて仕事をするのぢや。』

『お主と共に神樣も行かつしやれ！ぢや俺も葡萄畑へ行くべい。』

此の始末に僧の憤怒は此の度は檀家の者に注がれた。

『實に不信心な犬畜生ぢや！カインから生まれた出來損ひ奴！貴樣ら此の住持を捨てゝ行く積りか？ちぇ、サタンの小僧ッ子共、晝夜共に私が貴樣達の冥利を祈つて、此の胸を打ち叩いて泣いてやつたり斷食してやつたりするのに、それがなけりや何時の昔に此の罪業深い村中がすつぽり大地の中へ埋もれてゐる事を貴樣らは知らんかい？え、最う駄目ぢや！どれ、足の埃を拂いて私は貴樣の勝手にさせるとしよう。此の村に碌な事はないぞ！穀類にも、水にも、羊にも碌な事はないぞ。それから貴樣らの倅や倅の倅にも、ちえっ此の私は貴樣らの父ぢやのに。羊の貴樣らを保護する飼ひ主は最うゐなくなつたのぢやぞ。貴樣らを捨てゝしまうぞ！破門ぢやわい！』

七

金色の寢臺に女神の寢てゐる山莊では再び舊の靜けさに復つたので、デョルヂオ・メルラは彼の外來人の方へ歩み寄つた。彼は未だ寸法を取つて居る。

『神像の比例を研究してゐらしやるな？斯う長上振つてメルラは言つた。』あなたは美を貶して數學にする御料簡と見える？』

相手は一寸目を擧げて見た切り、斯んな質問が聞えないものゝやうに、沈默の儘で相變らず手を働かしてゐた。コンパスは開いたり窄んだりして、幾何學上のいろ〳〵な形を示してゐた。彼の人は靜かに併し聢と角度尺をアフロヂテの美しい唇（あゝ其の唇の湛へてゐる微笑はヂョーヴァンニの心を恐怖せしめたのであつた）に當てゝ、其の結果を知つてから、それを手帳に書き入れた。

『斯んなに問ひたがる好奇心を宥して下されい』とメルラは尙も尋ね掛けた。『それには區分けが幾つありますか？』

不承々々一方の人は口を開いた。『此の尺は粗雜に出來てゐるのです。毎時も私は人體の顏面を度、分、秒、三分一と斯う分けて量ります。そして分は度の十三分の一、秒は分の十二分の一、と云つたやうに下の區分は夫々上の區分の十二分の一に當るので。』

『左樣で？ では其の最後の三分一といふのは細い事此の上もない髮の毛よりか未だ幅が狹いと思ひますがな。』

相手の人は矢張り不承々々答へた。『三分一は顏面全體の四萬八千八百二十三分の一に當ります。』

メルラは信じ兼ねるやうな微笑を見せて眉を釣り上げた。『成程、生命あれば學問が出來るものぢや。そんな精密な事が分らうとは遂今迄思ひませんでしたわい。』

『もつと精密に行ければ尙ほ好いのですが。』

『實際それは然うでせう。然うでせうが、あなたも御存じの通り美術でも美でも總じて數學の計算といへば……熱奮して、烈々たる神來の興に乘じて白熱した、神の呼息を受けた美術家は……』

『左樣、左樣』と明かに倦怠の色を見せながら、彼の人は肯いて、『その通りですか、私は切に知りたいのですから……』

左樣云つて屈んで、髮の毛の生え際から脛に至る間を量つた。

『知りたいつて？』とヂョーヴァンニは心に思つた。『そんな事柄が知り得られるものか？ 馬鹿な！ 彼の人には感じがないのか知ら？ 了解力がないのか知ら？』

飽く迄相手に探りを入れて見ようと思つてメルラは古代人の事、並びに彼等を模範とせざるべからざる所以を說き立てた。彼の人はメルラが言ひ終る迄待つてゐてから、莞爾として金色の長髯を微動させながら言つた。

『泉から飲み得られる人なら、茶椀からは飲まないでせうな。』

『お待ち下されい！』と學者は叫んだ。『古代の人を茶椀と仰有るのなら、泉は何でござらうな？』

『自然です』と相手は靜かに答へた。

そして怒氣を含んで無遠慮に喋り續けるメルラに對して最早反駁を試みようともせず、巧に

外しながら鄭重に首肯してゐたが、其の冷めたい眼に倦怠と抑制の色が益々明に現れて來た。其のうちヂョルヂオの議論は到頭終結して口を噤むに至つた。そこで相手の人は大理石にある幾つかの凹みを指したが、それは如何な光の中でも肉眼に認められるものではなく、單り滑かな表面に手を置いて動かす時にのみ明かに感觸できるものであつた。そして『實に美妙な』と呼んで石像の上に目を走らせた。宛ら一目で以て其の總計を知らうとするかのやうに。

『感じのない人だと私は思つたが！』とヂョーヴァンニは腹の中で考へた。『併し感じがあるにしたところで神像を量つて細かく數に分ける事が出來るものかしら？』そしてメルラの耳に口を寄せて、『先生、あれは誰です？あの人の名を聞かして下さいませんか？』

『ほう、若道心か！其方ぢやつたか？』とメルラはクルリと振り向いた。『其方のゐる事を失念してゐた。誰でもない、あれが其方の偶像ぢやものを、それが分らんといふ法があるものか？あれがレオナルド・ダ・ヴィンチさ。』

と語つて史家はヂョーヴァンニをレオナルドに紹介した。

八

初春の朝まだき、草は、橄欖樹の黑い根の間に綠玉のやうに光り、藍色した花菖蒲はその細い莖にそよとも動かぬ、靜けさの充ち滿ちた中を、ヂョーヴァンニは徒步、レオナルドは馬に乘つて、共にフロレンスへの歸途に就いた。

『これが實際其の人か知ら？』とヂョーヴァンニは獨りで考へながら、まじ〳〵見守つて、其の細かい擧動にさへ興味の發するのを覺えたのである。

年齡は四十以上、默して考へに耽つてゐる時、其の鋭い、青い、小さな目は、金色に垂れてゐる眉毛の下で冷々として人を射るやうに見えるが、話をしてゐる時はそれが非常に善良な性質たる事を示すのである。それから長い美髯と縮れて總々とした頭髮は威容を具へしめ、身體は高くして强さうであるが、併し其の顏には女にして欲しい美妙な魅力があり、細く、調子の高い其の聲は、耳に快く響きながらも男性のものではなかつた。現に荒馬の手綱を握つてゐる手は頗る力强くあつたが、これも又優しく、すらりとした指は女其の儘のであつた。

段々フロレンスの城壁に近づいて來た。霧を含んだ朝日は伽藍の丸屋根と舊御殿の怪塔の上を照してゐた。

『今が好い機だ。』ボルトラフィオは斯う考へた。『先生の弟子になつて畫室へ這入りたい事

を話さなくちや。』

と、其の時レオナルドは馬を停めて鷹の子を屹と見た。鷹は緩かにそして無造作に空に圜を描いて、ムニョーネの河岸の葦間にゐる鴨でなければ鷲の獲物を睨み下ろしてゐるのであつた。程もあらせず鳥は一聲叫んで、頭を下に勢よく石のやうに落ちた。そして上から飛び掛つて、やがて林の後ろに沒してしまつた。此の間始終レオナルドの目は鳥を追つて、其の廻轉、其の動き方、強い雙翼の羽搏きを一つとして見逃さなかつた。そして手帳を帶の間から取り出して觀察した結果を記入した。

ボルトラフィオは見ると、其の鉛筆を運んでゐる手は左の方なので、兼て聞き及んでゐる奇妙な話の事を思ひ起した。それは彼が不思議にも左ぎつちよで書くため、其の字は丁度東洋の人のやうに右から左へと行つて、鏡に寫して初めて讀めるといふのであつた。あれも詰りは自然に關し神に關する自分の異端の邪說を誤魔化すためなのだと――中には斯んな事を言ふ者もあつた。

『今を外しては又とないぞ！』とチョーヴァンニは獨語したが、併し其の後から直ぐアントニオの『君の魂を亡くしたければ彼處へ行くが好い、彼奴は無神論者で罪人なのだから』と言つたあの棘々しい言葉が心に閃いた。

莞爾としてレオナルドは一本の巴旦杏に注意を寄せた。風當りの強い小さな禿山の頂に其の木があつて、非常に小さな、非常に軟弱な、全く獨りぼつちの木ながら、希望に滿ち喜びに溢れて、白い花を着けて、太陽の輝いてゐる紺青の大空に對してきら〳〵光つてゐる。

ボルトラフィオは其の木を感心して眺める事が出來なかつた。彼の心は重苦しくなつて混亂して來たのである。其の不安を推察してか、レオナルドは靜かに次ぎの事を言つたが、後々まで長くこれが少年の記憶に殘つてゐた。

『美術家になりたいのなら、美術に關する以外の心配や懸念を心から皆んな棄てなくては可けない。心を凡ての事物、凡ての色、凡ての運動の映る鏡にしなさい。併し心其のものは毎時も曇りのないやうに動搖のないやうになつてゐなくては可けない。』

二人はフロレンスの城門を潛つて町へ這入つた。

九

ボルトラフィオは此の朝フラ・ヂロラモ・サヴォナロオラの說敎があるといふ御堂へ出掛けた。

中へ這入つた時丁度オルガンの最後の音がサンタ・マリア・デル・フィオレのアーチからアーチに反響しながら消え去つた所であつた。堂内に人が滿ちてゐるため、息の根が止まるやうな人熱れがして、絶えず些やかな身動きから發する低いバサ〳〵した音がする。男、女、子供の席には夫々カーテンを張つて劃つてあつた。鏃のやうに細く狹い其のアーチの下には薄暗い神秘な氣が、眠れる森のやうに深く漂ふてゐた。花やかな色硝子に屈折された太陽の光線は、虹の色を成して、會衆と灰色の大理石の柱との上に落ちた。神壇の周圍の、半ば暗黑なるを明るく染めてゐるのは、蠟燭のちら〳〵燃え立つ光りであつた。祈禱は濟んで、說敎者を待つ群集の顏は悉く木製の說敎壇の方に向いてゐた。

ヂョーヴァンニは群集の間に一席を見付けて、隣人等の囁いてゐるのに聞き耳を立てた。

『お坊樣は直ぐに這入らつしやるぢやらうかの？』と性急に訊いたのは背の低い、蒼い顏に汗を搔いて、疎らな髮を紐で結んでゐる大工であつた。

『さ、何うだかなア』斯う答へたのは鍛冶屋で、大きな赭ら顏の、喘息持ちであつた。『サン・マルコのお坊樣は偃僂で吃りなさる弟御のマルフィと云ふ方と一つにゐらつしやるので、其の弟御がお兄樣の此處に這入らつしやる時間をお定めなさるとの事ぢや。何時かなぞは四時間も待つて、今朝はもうお說敎がないのぢやと思つてゐたら、それでも到頭お出でになつたのぢやからな。』

『おゝ、ところが、いやはや此の私は昨晩眞夜中から待つてゐるのぢや！眠いのと、それに麵麭の片なりと口の中へ入れたいのとで、もう〳〵堪らなくなつたわい。宛で刄物の上に坐つてゐるやうなものぢや！』

『そこぢやダミアノ、忍耐が肝腎ぢやとお主に言つて聞かしたぢやないか？それほど早く來てもかう說敎壇はあんなに遠くて何も聞えんぢや。』

『んにや、能つく聞えるとも！お坊樣があの大聲を出しなさつて雷のやうに喚かつしやる時には、聾は無論のこと、死人の耳にさへそれが吃度聞えるに相違ないのぢや。』

『今も皆んなで言つてゐたが、お坊樣は未來の預言をなさるさうぢや。』

『否未だぢやらう！ノアの箱船を拵へなさらぬ中にそんな事はあるまいて。』

『箱船は出來上つたのぢや、もう全然成就したのぢや。然うだ、お主、お坊樣は喩へを用ゐて其の說明をなされたぞ。其の長さは信仰、幅は慈愛、高さは希望ぢやとよ。そして斯う仰有つたわい――急いで、戸の明いてゐる間に急いで救ひの箱船に乘りなされ、やがて戸の締まる

日が來る程に、何故丁度良い時、後悔して船中へ這入らなかつたらうて、其の時になれば大勢の者が泣かう、と斯う仰有つたのぢや。で、今日は創世記六章十七節の大洪水に就いての御說教だとよ。』

『何でもお坊樣は、飢饉、戰爭、疫癘が來る示現を得さつしやつたさうぢや。』

『ヴァルロンブロザの伯樂の話では、一兩日前の晩、此の市の天空で多勢の軍が戰ひ合つて、劍の渡り合ふ音、甲冑の鳴る音があり〳〵と聞えたげな。』

『そしてお主、これも確とした事ぢやがなう——キエザ・デイ・セルヴィの節度使館に血が一雫落ちてゐたとやら。』

『成程！それからルバコンテ橋のマドンナの御目から夜な〳〵涙が出るさうぢや。私の叔母のルチアが現に見たさうな！』

『受け合ふが、其のマドンナ樣の事は吉兆ぢやないぞ。お、神樣、此の憐れな罪人にお慈悲を垂れて下さりませ！』

一方、婦人側の方にも騷ぎがあつた。老婆が一人卒倒して、身體を起してやつても未だ正氣に復らなかつた。誰も彼も久しく待つてゐるので最早や待ち疲れた。顏の蒼い大工は此の上我慢がしきれなくなつた樣子。

併し突如として頭が一齊に海の波のやうに動いて、堂內に囁きの聲が傳はつた。

『お出でになつたぞ！』

『然うぢやない、お坊樣ではない、彼はフラ・ドメニコ・ダ・ペシア樣ぢやわい。』

『いや確にお坊樣ぢや！お坊樣がお出でになつたのぢや。』

ヂョーヴァンニは見ると、それは黑衣と白衣とのドミニカン派の法衣を纏ふて、腰に紐を締めてゐる人で、徐々に說敎壇の階段を上つて頭巾を脫いだ。顏色憔悴して蠟の如く黃ばみ、厚い唇に、鷲の嘴のやうに彎曲した鼻、そして前額は低く凹んでゐる。左手を元氣なく机の上に載せ、十字架を持つた右手を空に擧げて、沈默の儘爛々たる目を聽衆の上に向けた。彼等は今か〳〵と待ちながら戰慄してゐるのである。深い沈默の氣が漲つて、各自の心臟の鼓動が聞える程であつた。次第に僧の目の輝きが强まつて、遂に眞赤な炭火のやうになつたが、依然口を閉ぢた儘なので、待ちに待つて張り詰めた心は此の上堪えられなくなつた。今一瞬で群衆は騷ぎ立つかと思はれた。

併し靜けさは一層深く、一層恐ろしくなつて行つた。其のうち突然沈默を破つて、僧の恐ろ

しい掻裂くやうな超人間的の叫びが聞えた。

『Ecce ego adduco aquas super terram, 見よ、私は地上に洪水を齎したぞ！』

群集は颯と戰慄に打たれて、髮の毛が逆立つた。ヂョーヴァンニは蒼くなつて、大地が搖れて御堂のアーチが今や落ちるかと思つた。彼の側にゐる頑丈相な鍛冶屋さへ木の葉のやうにブル〳〵震ふて、齒をガチ〳〵鳴らしてゐる。弱い大工は毆打されたやうに首を縮め、顏に皺を寄せて、眼瞼を塞いでゐた。

尋いで起つたものは說敎ではなく人事不省であつた。數千の聽衆は宛ら此の人事不省に襲はれたやうになつて、暴風に對する枯葉のやうに吹き捲かれてしまつた。ヂョーヴァンニは耳を澄まして聞いてはゐたが、殆ど了解は出來なかつた。斷々の句が耳に達した。

『これ皆んな御覽なさい、天は旣に暗くなつて、日輪は血の凝つたやうな紫色をしてゐる。逃げなさい！隱れなさい！今といふ今硫黃の雨、火の雨が降つてゐるのぢや、火に熱した石、雷霆が霰のやうに降つてゐるのぢや！

バビロンの娘と共に接めるシオンの子よ脫れよ。

お丶伊太利！折檻に次いで折檻が來るぞよ。疫癘の後には戰爭、戰爭の後が飢饉ぢや！此處にも審判！彼處にも審判、到る處悉く審判ぢや。お前さん方の中で生命ある人は、澤山の死人を運ぶに足らんのぢや。お前さん達の家々に死人が多い故、墓掘者は、死骸を戶外へ投りなさいと呼んで、それを悉く荷車に着けて、いや、馬の頸へも着けて、積み重ねて茶毘に附するのぢや。それから又往來を歩るいて、死人がないか？死人がないか？と呼ぶのぢや。するとお前さん方は、私は伴をお前に渡さう、私は兄弟をお前に渡さう、私は夫をお前に渡さうと言つて應ずるぢやらう！そこで墓掘りは向ふの方へ進んで行つて、死人を出しなさい！死人を出しなさい！と常住呼ぶのぢや。お丶フロレンス！お丶羅馬！お丶伊太利！絃歌饗宴の時代は過ぎてしまつたぞ、お前さん方は死病に罹つてゐる。お丶神樣、あなたは御存じでございませう。私は口を開きましたなら此の災害を防ぎ得た事を御存じでございませう！併し今となつては最う私の力に及びませぬ。最う私の言ふべき言葉はありませぬ。私は唯泣いて涙を灑ぐだけでございます。お慈悲を！お慈悲を！お丶慈悲深い神樣！傷ましいのは此の憐れな人々でございまする！傷ましいのは此のフロレンスでございまする！』

と、僧は兩腕を開いた。そして此の最後の語は囁きのやうに沈んで、殆ど耳に聞えない位であつた。それは群集の上を通つて、風に鳴る木の葉の音のやうに、無限な愛憐の歎息となつて

消え失せてしまつた。

そして血の氣のない白い唇を十字架に押し付け、僧は跪いて啜り泣いた。說敎は終りを告げた。重たげな音のオルガンは徐々と鳴り始めた。人の心を誘ひ入れるやうな、太洋のそれのやうに廣々とした音は絕えず崇嚴と恐怖との度を增して行つた。

一人の女の聲は『御慈悲でございます！』と叫んだ。

すると數千の聲が互にそれに和した。そして玉蜀黍の莖が風に吹かれて首を曲げるやうに、聽衆が一齊に上半身を膝に着けて、互に群り、互に擦れ合つた樣子は、丁度暴風雨の襲來に驚き騷ぐ羊の群のやう。そして世がすぐにも寂滅するてふ恐怖に驅られた懺悔者等の悶絕するやうな長歎は、寺院の牀や、大理石の柱や、穹窿を轟々と搖すぶる音樂と相繆はつて天に上るのである。

『御慈悲でございます！御慈悲でございます！』

ヂョーヴァンニも身體を膝の上に曲げて咽び泣いた。背の高い鍛冶屋は息を荒くしてヂョーヴァンニに倒れるやうに倚り掛つた。顏の蒼白い大工は息を凝らして小兒のやうに泣きながら、『御慈悲でございます！』と呻つた。

ボルトラフィオは此の時自分の慢心、生命に對する愛好、又フラ・ベネデットの許を逃げて神の敵たるレオナルドの危險極まる美術に投じたい希望なぞを思ひ出した。それから水車場の山の恐ろしい夜の事、發掘されたヴィーナスの事、『白夜叉』の外道的な美しさを罪深くも熱愛した事なぞを回想した時、兩手を天の方に擧げて、喪心したやうになつてゐる群集の聲に和して叫んだ。

『神樣！神樣！私に憫れみを垂れて下さりませ！私はあなたの前で罪を犯したのでございます！宥して慈悲を垂れて下さりませ！』

其の瞬間、涙に濡れた顏を擧げた時、自分の側にゐるレオナルド・ダ・ヴィンチの高い、端正な姿が目に止まつた。美術家は無造作に柱に倚り掛つて、例の寫生帳を右の手に持ち、左の手で繪を描きながら、更に說敎師の首を見んと欲する如く、折々說敎壇の方を眺めてゐる。

恐怖に滿ちた人々が前後左右にゐる中にあつて、レオナルドは堂內の光景を少しも知らぬ人のやうに此の上もない沈靜な態度を保つてゐた。彼の冷々たる青い目、微細な觀察をする人のそれのやうに固く結んだ薄い唇――其の目と唇とに彼がアフロヂテの神體を數學的に量つた冷淡と好奇心とがあつた。此の人を見るなりヂョーヴァンニの目の涙は乾いて、祈りは唇の上

で止んでしまつた。

そして寺を出て畫家に伴つた少年は、件の寫生帳を見る許可を乞ふた。レオナルドは拒んだが、併し直きにそれを少年の手に渡してやつた。デ・ヴァンニは見るとそれは恐ろしい諷刺畫で、サヴォナロオラではないが、サヴォナロオラに似た僧衣を着た憎々し氣な老惡魔の圖で、其の慢心と欲念とを未だ壓服する事が出來ず、自分から求めた苦しい難行に相好が變じたやうになつてゐた。其の下脣は突き出て、皺は頰一面に爬つてゐるし、首は木乃伊のやうに曲つて且つ黑く、蓬々として長く伸びた眉毛と恐水病のやうな目付きとは殆ど人間らしい點を止めてはゐない。あらゆる黑いもの、恐ろしいもの、迷心的なもの、又サヴォナロオラをして、不具な、舌を結へたやうな吃りの、夢想家マルフィの力に左右されしめたやうな趣を、レオナルドは此の寫生に表してゐたのである。怒りもせず、憐れみもせず、沈靜無私な明察を以て彼はそれを描き出したのである。

で、デ・ヴァンニは、『畫の天才たらん者は一箇の鏡でなければならない。あらゆる事象、色彩、運動を映じながら、それ自身は常に透明且つ平靜たるを要する』と言つた此の人の言葉を思ひ出した。

ベネデットの弟子は目を上げて此の畫家の顏を見た。そして永遠の墮罪てふ感じにびくつきながら、又レオナルドに於いて眞乎反基督敎徒の僕を見てゐると思ひながら、然かも此の人を殘して立去る事は出來なかつた。何か抗し難い力がこの少年をレオナルドの方に引き寄せた。此の人物、此の技能の眞底が、少年に洞察されないのなら、如何にそれは彼に取つて悲しむべき事であらうぞ。

十

それから二日後の事、グリルロは最も不吉な報道を齎してチブリアノの家へ飛び込んで來た。蓋しチブリアノは用務に支へられてフロレンスを出る事が出來ず、ヴィーナスの運搬は未だ片付いてゐないのであつた。グリルロの言に據ると、ドン・ファウスチノは何でもサン・ヂェルヴァソを去つて、隣村サン・マウリチオへ行つた。そして其處で天の懲罰の話をして村民を恐怖させた上、夜になつてから其の一隊を率ゐて、山莊を圍んで、石像の見張りに殘して置いた園丁のストロッコを袋叩きにして、手足を縛り上げた。それから僧は女神に對して或る古代の祈禱文を頌讀したが、それは地中から掘り上げた彫像や容器と其の他の物を淨めて、基督敎徒の靈の利

益になるやう、又三位一體の光榮に轉化するやう、敎會の僕が神に願ふものであつた――庶幾は諸の汚穢を消滅し去り、信仰の力に由りて我等の主たる基督の忠僕となる事を得せしめ給へ――といふ。そして一隊の者は像を散々に破壞した上それを爐に入れてセメントにしてから、それを村の墓地、新に築いた壁に塗つたのである。

此の話をした時老人は悲しみに暮れて泣いた。併しヂ・ヴァンニ・ボルトラフィオを決心せしめるに此の事件は與かつて力あるものであつた。即日彼はレオナルドに會つて弟子入りを乞ふた。レオナルドはそれを承諾した。

それから暫らく後、唯ならぬ報道がフロレンスへ傳はつて來た。それは基督敎に最も誠實な佛蘭西王シャルル八世が無數の軍勢を引連れて雨シシリーを初めとして、恐らくは羅馬、フロレンスをも征服するため戰ひに來るといふのである。恐慌が市民の間に擴がつた。後等はサヴォナロオラの預言が實現されさうになつてゐると思つた。あゝ罰は家の入口に下つた！神の劍は拔かれて伊太利の上にかざゝれた！

二の巻　此の神を見よ――此の人を見よ――一四九四年

「此の人を見よ！」――約翰傳第十九章第五節。

「此の神を見よ！」――（フランチェスコ・スフォルツァの碑銘）

一

『鷲が空氣の最も稀薄な處で體を支へ、大船が帆に依つて波濤を蹴つて浮揚し得るなら、何故人類も同樣に強い翼を用ゐて、自ら風伯の主人となり、且つ進んで空間の征服者となられなからうぞ？』

レオナルドは五年前、欣然たる希望を抱いて手帳の一冊の中に書いて置いた上の語を見付けた。そしてこれと隣り合つてゐる頁に、或る機械の下圖があつたが、それは一本の梁に數多の鐵の棒を結へて翼となして、絲と滑車で動く仕掛けになつてゐたが、今となつては此の機械も彼には不手際で滑稽なものとしか見られなかつた。

彼の新らしい機械は大蝙蝠に似て、翼は骸骨の掌のやうに、木製の五指から成つて、接目や軟靭な關節が澤山あつた。それから指と指との間を連結してゐる腱や筋は鞣皮を細く切つたのや生絹の組紐で出來てゐるし、翼は曲肱と自在に動く喞子との作用で上昇するのであるが、一面に水の浸透しない琥珀織を張り詰めてあるので、丁度鵞鳥の蹼の足に似てゐた。翼の數は都合四枚で、交る〳〵馬の脚のやうに動き、長さ四十ブラッチオ、幅は八ブラッチオあり、且つ推進に利なるため後方に曲がつて、機を上昇せしめるに都合の良いやうに下に垂れてゐた。搭乘者はこれに跨つて坐して足を鐙に入れ、細引、木材、挺から成つてゐる機械で翼を動かすのである。又鳥の尾の形をして羽毛を植ゑてある一つの大舵は搭乘者の頭に依つて廻轉するやうになつてゐた。

併し凡て鳥は一度羽敲きして地上を離れる前に、先づ自分の兩脚で身體を上に揚げるのに相違ない。其の證據に、あの脚の短かい鷸鷭を地上に放つと、翔たうと焦りながら翔てないのである。されば發明者レオナルドは外觀の美の損せられる事を甚だ氣にしたに拘らず、何うしても二本の脚棍を機械に取付けねばならないのであつた。美を缺いて、完全なるものゝ存する理がない。レオナルドは錯誤のある點を仔細に調べようと思つて計算に沒頭した。併し依然甘く行かないので、彼は數字を一杯に書いてある全紙の上に性急に鉛筆で線を引いてしまつて、其の緣の方に、『駄目』と書き、直ちに又『畜生！』と書いた。彼は癇癪を起したのである。

そして計算を再び始めたが益々無茶苦茶になる計り、ちら〳〵と搖れて目を害する蠟燭の光りで手を進ませるに從つて、殆ど氣付かない程の誤算が愈々はつきりと目に付いて來た。

其の時猫が不意に目を覺まして仕事の机の上に躍り上つた。そして四肢を伸ばして背を曲げながら、止まり木から落ちさうになつてゐる剝製の、蠹魚の喰つた鳥を相手にして戯れようとした――此の鳥は飛翔の際に於ける重力の中心を研究するため工夫されたものであつた。其の猫をレオナルドは怒つて押し除け、毆らん計りにして牀へ下ろした。猫は哀れ氣な鳴聲を立てた。

『我慢しろ！何處へなりと好きな處へ行け。その代り私の邪魔をしちや不可い』とレオナルドは辯解らしく言つて、猫の滑かな黑い毛を撫でゝやると、其處に電氣の火花が出た。猫はゴロ〳〵喉を鳴らして、天鵞絨のやうな四足を折つて、滿足と神祕との滿ちた綠色の目を確と主人の方に付けて、さも嚴し氣に坐した。

數字、分數、括弧、二次方程式、立方根式、平方根なぞが再び紙に書かれた。彼は此で二晩

眠らないのであるが、フロレンスから歸つて最早や滿一ヶ月になるのに、其の間は滅多に外に出ずに、絶えず此の飛行機の事に從事してゐたのである。

白いアカシヤの枝が明いてゐる窗から這入つて、時々其の馨りの高い優しい花を机の上に落した。霞のやうな雲に柔げられて眞珠の色を帶びてゐる月光は室内に流れ這入つて、獸脂の蠟燭の陰暗な輝きと相縺れた。部屋は天文、物理、化學、工學、解剖なぞの諸機械、諸道具で詰まつてゐた。車輪、槓杆、發條、螺旋、喞子、弧、吸込管、眞鍮、鐵、鋼鐵、硝子は麥の朧ろな化物の手足の如く、又巨大な昆蟲の如く、暗い中から顏を出してゐた。潛水器の側には大きな目の形をしてゐる視官の機械の、稍曇つた水晶體があるし、馬の骸骨、剝製の鰐、それからアルコールに漬けてあるのは流産した人間の胎兒、又水上を歩むに用ゐるボート形の靴、最後にあるのは此の彫刻家の製作室から此處へ迷ひ込んだ石膏の首で、それは小兒か又は天使のやうに見えるが、狡るさうな又悲しさうな笑方をして四周の物を見てゐるのである。後ろにあるのは坩堝と鍛冶の鞴で、爐の灰の上には石炭が赤く熾つてゐた。二枚の巨大な翼の中、一枚は既に膜が張つてあつて、他の一枚には未だ張つてないが、それが部屋一杯に擴がつて、牀から天井までを全然占領してゐた。其の牀の上に轉ろがつてコクリをしてゐるのはレオナルドの助手のヅォロアストロで、黑ずんだ眞鍮の柄杓を手に持つた儘、中の油を零しつゝ仕事をしながら眠つてゐた。翼の一枚が此の眠つてゐる男の胸に觸れてゐるので、息をする度、翼は柔かに震搖いで、宛ら生命が宿つてゐるやうに見え、其の尖つた上端は天井の梠に當つてさら〳〵と鳴つてゐた。

朧ろな明りの内にあつて、其の擴がつて動いてゐる翼の間に此の男を置いてゐる機械は、將に身を揚げて飛ばんとしてゐる途方もない大蝙蝠に似てゐた。

二

こゝミランの郊外にあるレオナルドの家（城とサンタ・マリア・デルレ・グラチエと名くる修道院との間にある）を圍んでゐる園からは菓實、草、百里香、佛手柑、茴香なぞの快い香氣が漂ふて來た。月は這入つてしまつて、窗下の燕は囀りながら翔ち掛つてゐるし、近くの池では家鴨が水を飛ばせて鳴き、蠟燭臺の蠟燭は將に消えなんとしてゐる。此の時、つい側の製作室に弟子達の聲がした。

弟子は二人で、ヂ・ーヴァンニ・ポルトラフィオとアンドレア・サライノとであつた。ヂ・ーヴァ

ンニは解剖圖を寫しながら、遠近法を研究するために一個の機械を前にして坐してゐたが、それは網が張つてある木製の框で、畫用紙に描いてある線は其の網の形に現れてゐた。サライノは雪花石膏の板を一枚持つて木の鏡板に當てがつてゐたが、これは罪のない目をして、髪の美しく縮れ上がつた美少年で、先生はこれを愛して、天使を書く場合此の少年をモデルにしてゐた。

『アンドレア、君は何う思ふ？』とボルトラフィオは尋ねた。『先生のあの機械は直き完成するか知ら？』

『何うだか』と口笛を吹きながらサライノは答へて、刺繍のしてある自分の新らしいスリッパを片付けた。『昨年も二月の間先生はあれに著手してゐられたが、其の結果といへば唯笑ひに終つた計りさ。それはね、ヴォロアストロ――あの旋毛曲りの熊奴が何でも構はず飛ばうといふので、先生は止められたけれど、それでも奴試みたのだ。あの馬鹿、例令落ちても負傷をしないやうにと牛の膀胱を幾つも首の周圍へ吊るして、屋根に上つて機械の翼を羽搏きさせたのだ。成程身體は上つたが、併しそれは風が上げて呉れたのだから、直ぐ樣眞逆樣になつて肥料貯めの上へズドンと落ちたのだ。お陰と貯めは柔かであつたのだから身體の骨は折れなかつたが、膀胱は大砲のやうな音を發して破裂したゝめ、鐘樓の鴉は恐れて飛び去つたし、あの蠟の翼が太陽の熱に溶けてクリートの海中に落ちたといふイカルスのやうに、此の先生、肥料の中に頭を埋めながら、足でバタ〳〵空氣を蹴つてゐたのさ。』

丁度此の時三番目に這入つて來た弟子があつた。チェサレ・ダ・セストといふ名で、最う若くもない年頃、病氣持ちに癇癪持ちで、其の意地惡るい目付きの何處かに怜悧さうなところがある。片手にサンドウイッチ、片手に酒を持つてゐた。

『チェー此奴あ酸つぱいな！』と彼は顔を蹙めて唾を吐きながら、『全くだ、此のハムは靴の皮のやうだぜ――斯んな御馳走のために毎年二千ヅカット（一ヅカットは邦貨四圓五十九錢）の金を出すのだからな！』

『それでは食器部屋の階段の下にある別の樽のを試て見給へ。』

『それは試たよ。ところが兩方の中であれは一段と惡るいのだ。』そしてサライノが被つてゐる小豆色の、けば〳〵しい羽の着いてゐる新らしい帽子を指しながら、チェサレは言葉を續けた。『あれ！あれ！僕らの仲間で新らしい品を貰つた奴があるらしいぞ。けども最う二月になるが臺所へは一向新らしいハムも來ない。マルコは老體のお母さんに縋つて、先生の財布には

一ソルドも這入つてゐませんと言つたつけ。實際先生はあんな碌でもない翼のために何も彼も拂つてしまつたので、これから儉約をして僕らを餓死させようとしてゐらつしやるのだ。併し先生の金は未だ外に引け道があるのだ、言つて聞かさうか。それはね、先生の氣に入りの人達が貰ふのだよ、鑄牌や天鵞絨の帽子などをね。アンドレア、君はそんな頂戴物をして恥ぢとは思はないのか？レオナルド先生は君のお父さんか兄弟にでも當るのかい？それとも君は未だ嬰兒なのか。』

ヂョーヴァンニは話頭を一轉させようと思つて遮つた。『チェサレ、君は遠近法の法則を私に說明して呉れる約束だつたね。先生はあの通り機械に凝つてゐらつしやるから、待つてゐても時間を無駄にする計りだし……』

『然う、然う、君。僕らも何日かあの機械に祟られるのだぜ、畜生！縱しんば今の飛行機でないにしても、他の機械にね。僕覺えてゐるよ、それあの食堂で食つてゐる最中、先生は腸詰を刻む機械を發明しようとして、突然食を止さゞるを得なかつた事があらアネ。で、其の切れ物の刄が先生の意に滿たなかつたものだから、聖徒、雅各の首が兩肩の間に接着かずにあつた譯さ。それから豕の子を炙る燒串を工夫してゐた間は、先生の製作したマドンナの中で最上の奴が隅に押遣られて待ち呆けを喰つてゐたしね。今一つの大發明、リンネルを洗濯する時に使ふのだと言つて鷄の糞を灰水に浸したなぞは君は何う考へてゐる？先生は繪筆から遠かつてさへゐれば、何んな馬鹿な眞似でもして時間を空費するのだからね。』斯う言つてからチェサレは顏中に皺をよせ、唇を歪めて意地惡る氣な笑ひを洩らした。

そして『何故、ね君、何故神はあんな種類の人達に天才を賦與するのだらう？』と彼は低い聲を震はして言ひ足した。

三

レオナルドは寫字檯に倚つて仕事を續けてゐる。其の時燕が一羽、窗から飛び込んで、室內をくる〳〵廻りながら、天井や壁を掠めてゐたが、到頭大蝙蝠に捕まり、その生きて居る小翼を細工をした腱の網におさへ付けられてしまつた。レオナルドは用心して起つて、手柔らかに外してやつた鳥を手の中に持つて、絹のやうに光つてゐる其の黑い頭に接吻してから放してやつた。燕は飛んで、喜びの聲を發しながら、青空の中に沒してしまつた。

『何といふ簡單な、何といふ容易な飛行だらう』と思ひながら、レオナルドは羨し氣に失

望の目を放つて燕を見送つてゐたが、やがて巨大な蝙蝠の暗い骸骨たる自分の機械を蔑むやうに眺めた。

牀の上で眠つてゐた男は不意に目を覺ました。これはフロレンス生れの者で、名はヴォロアストロ、更に縮めてアストロ・ダ・バレトラといふので、技倆の優れた機械師であり又鍛工である。顔は小兒のやうに無邪氣ながら、不恰好な大男で、宛ら一ツ目入道のやうに見られた。蓋し明いてゐる目は一つしかないからで、片方のは眞赤に熱した金の火花のため、ずつと昔に明を失したのである。

アストロは一つしかない目を擦つて、髮の毛のモジャ〳〵した頭を掻きながら叫んだ。『何といふ馬鹿だらう、此の私は！先生、何故先生は私を寢させないやうにして下さいませんでした？私はあんなに熱心に心を傾倒してゐましたのに、夜が早く經つて、朝になつて飛行したいと計り思つてゐましたのに！』

『いや眠つてゐたのは悧巧だつた。翼はうまく行かなかつたのだから』とレオナルドは言つた。

『えッ今度のもですか？まあ先生、私は二度と再び先生の機械は作りませんよ。まあ風に飛ばしてしまつた勞力や金の事を考へて下さい。併し先生これ以上に出來ないではありませんか？斯れ位の翼に乘つて飛行できんなんて、そんな事はある譯がございません！象が乘つても機械は揚る筈です。何うか先生、私に試めしをさせて下さい！私は水の上で試驗して見ませう、縱しんば落ちたところで水に漬かるが關の山ですから。私は魚のやうに泳げるのですよ、決して溺死するやうには出來てゐない人間なんです。』

と言つて歎願するやうに手を合はせたが、レオナルドは首を振つた。

『待つてゐ給へ、君、も少し待つてゐ給へ。今に其の時節が來るから。そして其の時には……』

『其の時にはですつて？』と涙を流さんばかりになつて鍛工は叫んだ。『何故今でないのです？確に先生、神樣が天にゐらつしやるやうに確に飛行して見せますよ、私は。』

『否や、アストロ、君は飛べまい。或る數學の法則によつて……』

『然う仰有るだらうと思つてゐました！數學の法則なんか何の役に立ちます。其奴のために何も彼も滅茶になるのです。ま、私等が幾年間働いたか、それを考へて下さい！そんな事を思ひ出してさい私は胸が惡くなります！何んな蚋だつて飛ぶんです、蚊だつて飛ぶんです。尾籠な事を申すやうですが、何んな肥料蠅だつても、何んな糞蠅だつても翅を持つてゐるんです。

それだのに人間は蟲のやうに爬つて歩く。實に此の上もない不公平な事です！ですから私等は疑ふ譯がないではありませんか？先生、彼處に先生の翼がございます、ちやんと準備の整つた。美しい翼がございます。ちやんと神樣の御加護を受けて、擴げて、飛行する計りになつてゐるのです！で、何んな事になるものか演つて見ようといふのです！』

アストロの言葉は途切れたが、何か思ひ出すやうな樣子をして、さらに落著いて續けて言つた。『先生、私、先生にお話したい事があるのですが。それは今晩夢を見たのです、然う、私夢を見たのです……』

『君の夢は分つてゐる！君は飛行したのだ。』

『然うです。併し何うしてゞすか分りますか？ま、私の話を聞いて下さいまし。何處か知りませんが私は兎有る部屋の中にゐたのです、然かも人込みの中にゐたのです。で、奴等私を見て指して笑ふんでせう。私思はず獨語を言ひましたよ。『飛行ができないとは實に殘念だ』つてね。そして私は起きて、兩腕を振るつて立ち上りました。實に辛らかつたです、宛然背中に山でも負つて立つやうでございました。併し直きに輕くなりまして飛び上つたんです。丁度私の頭が屋根に屆きました。すると皆んなで以て大聲を揚げるんで――御覽よ、飛行したつて。

え、、そして私、彼處の鳥のやうに窓を越して、高く〳〵圓形を描いて、到頭天に達したのです。風は耳の端でヒュ〳〵鳴るし、餘りの嬉し紛れに大聲を揚げて笑ひました。で、私斯う思つたのです。『何故私は今まで飛ばなかつたのだらう？斯んな事は非常に容易しい事だ、機械の手なんか些つとも借りなくて宜いのだ』。』

四

叫ぶ聲、怒罵の聲、階段を蹈み鳴らす躁急な足音、兩人の話はこれがために途切れてしまつた。そして戸を廣く押し開いて部屋の中へ躍り入つたのは、赭毛の頭に雀斑の顏をしてゐる男で、十歳になる少年の耳を掴みながら、此處へ曳き摺つて來たのである。この男はレオナルドの弟子なるマルコ・ドッヂョネであつた。

『此の罰當り奴！』とマルコは叫んだ。『此の野郎、貴樣の喉を土足に掛けて呉れる！』

『マルコ、何をそんなに騒いでゐる？』とレオナルドは尋ねた。

『先生何うぞ聞いて下さい。此の畜生、子供の癖に、私の持つてゐた銀の扣金を二つとも盗んだのです。あれは一つ十フロリン宛の金が掛かつてゐるのです！ところが此の小僧、一つは

賭博で亡くしたし、今一つの方は靴下の中へ入れてゐたのを私が見付けたのです。で、私此奴の頭の毛を掴んで引っ張りましたら、此の惡魔の小伜は私の指を喰ひついたのです、骨まで這入る位深く喰ひついたのです。』

と言ひ樣、再び少年の髪の毛を掴まうとしたが、レオナルドは逸早く少年を救つてやつた。するとマルコは革囊から一聯の鍵を取り出して牀の上に叩き付けた。蓋し此の家の鍵を保管してゐるのは此の男なので。

『先生、鍵を受取つて下さい！此の家の番は私には最う出來ません。惡漢や盜賊と一緒になつて此の家に居る事は此の上私に出來ないのです！』

『落着いて、マルコ、落着いてさ。此の子を私に預けて置いて呉れ。』

三人の弟子も、製作室から比處へ來たし、肥つちよの女料理人マッリナも買ひ出しの籠を抱へながら直ぐに此の仲間の中へ割り込んだ。そして此の小さな罪人が目に入つたので、マッリナは兩手を擴げて、囊の破れ目から乾した豆の零れ落ちるやうな單調な聲音をして喋り出した。チェサレはチェサレで滔々と辯を揮つて、此の異教のヤコポはありとあらゆる惡計、邪謀を考へ出して、或る時は番犬を不具にしたり、或る時は燕の巣に石を投げ、蝶の翅を拐り取つたりして惡戯をするのに、何故家の中に留めて置くのかと其の理由を訊ねた。

ヤコポは主人の蔭に隱れながら、其の青白い美しい顏に至極平氣な色を見せ、目を惡くしく光らして、無言の儘レオナルドの方を歎願するやうに顧みた。

レオナルドは此の喧騷を取り鎭めようと思つたが、當惑氣な、弱つたやうな奇妙な樣子が其の面に顯はれ、それが蔑んだ色を見せてゐるチェサレの目に止まつた。

併し騷ぎは程なく獨りで鎭まつた。そしてレオナルドは平生の沈着に復つて、ヂョーヴァンニを呼んだ。それは彼の最大の傑作たる『最後の聖餐』を見に行くために招いだのであつた。ヂョーヴァンニは顏を紅くして喜んだ、そして兩人は一緒に出て行つた。

五

併し兩人は中庭の泉の前で留まつたが、それは徹夜をしたレオナルドが顏を洗つて、心氣を回復するためであつた。日は曇りながらも風は無く、物皆の上を流れてゐる銀色の光線は水の下から發するやうに見える。斯樣な日は畫を描くに畫家の最も喜ぶ日であつた。そして二人が未だ泉の緣を離れないでゐると、少年のヤコポが竊然姿を現した。其の手に樹皮で作つてある

小筥を携へて。

『レオナルド先生、私これを持つて來ました――先生にお目に掛けようと思つて』と少年は低い聲で言つて、用心して其の蓋を揚げながら、中に入れてある大きな蜘蛛を見せた。そして熱心に、『私、三日間此の蜘蛛を見てゐました。此奴に毒があるのですよ。蠅を喰ふ樣子を見てゐますと恐ろしくなります、先生！』

少年は今は顏を活々と光らせながら、蠅を一匹捕へてそれを蜘蛛に宛行つた。蜘蛛の毛むくじやらな脚が蠅を掴むと等しく格闘が起つて、翅の音がブン〳〵と高く鳴つた。

『ほら、蜘蛛が食つてゐますよ！蠅を食つてゐますよ！』と少年は恍惚となつて叫ぶし、レオナルドはのしかゝつて、爭つてゐる動物を見詰めた。

此の二人の顏は非常に異つてゐるのに、恐ろしい事を甚だ樂しむといふ同じ表情が現はれてゐる――とヂョーヴァンニには思はれた。

蜘蛛が蠅を殺して喰ひ盡してしまつた時、少年は小筥の蓋を閉めた。『先生、これをあなたの机の上に置きますから、他の蜘蛛と喧嘩をさせて見て下さい。』

そして歎願するやうに目を擧げて、唇を顫はしながら言葉を續けた。『先生、私の事を御立腹なさらないやうに願ひます。私は先生のお宅を出たいのです。先生もお分りでせうが私は先生に御迷惑をかけます。先生は御親切にして下さいますけれど、他の人は可けません、そして實際のところ私も其の可けない方なのです――他の人のやうに私には胡魔化して行く事が出來ません。それは兎に角私はずつと遠くの方へ行つてしまつて、自分一人でゐる積りです。其の方が餘つ程可いかと思ひます。只何うか先生私を宥して下さい、後生です、お願ひです。先生、私を宥して下さい。』斯う話してゐる少年の長い睫毛に大きい涙の玉が宿つた。『レオナルド先生、私を宥して下さい。私の形見に此の蜘蛛を先生に差上げて行きます。蜘蛛は長壽をするものですから、私アストロに餌をやつて呉れるやうに賴んで置きます。』

『何處へ行かうと思つてゐる？否それには及ばん、マルコはお前の罪を宥すだらうし、私はお前に何も怒つては居ない。それから其の蜘蛛は本統に貰つて置かう。此の後は溫良しくして居るやうにしなさい。』

ヤコポが先生の方に向けた目の中には感謝ではなく、單に無限の驚異があつた。レオナルドはヤコポを見て莞爾とした。其の有樣は丁度自分の大智で此の少年を了解して、此の少年は天性が惡に作られてゐるのだから、惡い事をしても罪がないのだと認めたやうであつた。

『さ、ヂョーヴァンニ、遲くなるから出掛けよう』とレオナルドは言つて、兩人は共に沈默たる市街を歩いた。市街は庭園、葡萄畑、菓樹園の塀の間から、サンタ・マリア・デルレ・グラジエの僧庵に通じてゐる。

六

先生に納める事に決めてある六フロリンの月謝が最早や納められなくなつてゐるので、ポルトラフィオは此の間中から其の事で心を惱ましてゐた。叔父と喧嘩をしたゝめ、今後の助力を撥ね付けられるし、二月の間金を貸して呉れたフラ・ベネデットもこれ以上そんな事は出來なかつた。

そこで此の朝ヂョーヴァンニは事の始末を先生に話さうと決心した。哀願するやうに先生の方に向いて、髪の根元まで赧らめながら、彼は吶るやうに言つた。

『先生、今日は月の十四日でございますが、私は十日の日にお金を差出す事に決めて置きました。實は斯んな事を打明けるのは私として苦しいのですが、唯今は三フロリンしかないのです。で、何卒先生にお待ちを御承諾して戴けないものでせうか？金は直きに這入つて來る望みがあのでございます。メルラが寫字を私にさせると約束したのですから。』

レオナルドは吃驚してヂョーヴァンニの顔を見た。

『何です、そんな話は、ヂョーヴァンニ？君は恥辱だと思はないか？』

ヂョーヴァンニが顏を赧らめて、當惑相にしてゐる體や、其の補綴してある靴、毛の脫けた着物を見て、レオナルドは此の弟子の甚だ貧しい事を推察した。で、眉根を蹙めて話を他の事に轉じたが、やがて折を見付けて一枚の金貨を少年に手渡しながら、何氣なしに言つた。

『あゝ君、私の畫に使ふのだから、これで藍色の紙を二十枚に、赤いチョークを一束と、それに狸のブラシを一本買つて來て呉れ給へ、さ、此の金を取つて。』

『これは一ヅカットの貨幣でございますが？十ソルヂ位の買物をこれで支拂つて？では釣を取つて參りませう』

『いゝえ決して、そんな瑣細な事は私は念頭に置かん。折があれば何時か君は返濟できやうから。そして今後、金の話は私にしてはなりません。分つたらうな？』

と言つて直ちに、大船てふ名のある眞直な堀割の兩岸に霧に鎖されてゐる落葉松の恰好の説明に言葉を移した。松は長い列を作つてゐるので、眼はずつと遠くまで引かれた。

『ヂョーヴァンニ、霧が薄ければ木は青く見えるし、濃ければ灰色に見えるのだが、君はそれに氣が附きましたか？』

それから進んで、岡の上に雪が懸かつて作る陰影――即ち岡の樹木に葉のある夏時の陰影の調子と、葉が脱ちて樹木が裸になつてゐる冬の陰影の調子とを話した。それを話してから突然斯う言つた。

『君は始めて私の處へ弟子入りをした時、私が契約の細目を一々帳簿に記入してゐたのを見たので、定めて君は私を吝臭い男だと思つたでせう。併し實際あれは父のビエロから得た私の癖で、父は公證人であつたが、處世の法を非常によく知つてゐたのです。私に取つてはあんな事をする習慣は下らないもので、例へばサライノの帽子の羽根の價のやうな詰らない物をまで記して置く位極端にやつてゐるが、それで一方には私の手から何千ヅカットいふ金が出て行つて、それが何に支出されるのか私には分らない始末。だからこれからは、あの癖を氣に留めないやうに、金の入用な時があれば持つて行きなさい、屹度私は父が息子に與へるやうに君に與へるから。』

そしてレオナルドは非常に深切な微笑を含んでヂョーヴァンニの顔を見遣つたので、弟子の心は晴れ〳〵しくなつて、喜悦で溢れる程であつた。と、先生は再び木の話に戻つて、不恰好な白桑の木を指しながら、獨り一々の樹木のみならず、一々の葉に至るまで、其の他の樹木のとは形態を異にしてゐること、猶は一切の人が各々異れる容貌を有つてゐると同じい事實を弟子に觀察せしめた。で、ヂョーヴァンニは思つた、先生は私が貧乏な弟子である事を看破して其の積りで言葉を掛けて下さつた事は話の中にも現れてゐるが、それにも劣らぬ看破力を以て樹木の事をお話しなすつた。先生はありとあらゆる生物に對して親愛な觀察を下されるので、先生の目は鋭くなつて、宛ら先見者、千里眼の穿觀を具へたやうになつてゐると――

二人の目にサンタ・マリア・デルレ・グラジエが見えて來た。此の寺はドミニカン派の修道院に附屬して、天幕の形をした廣い丸屋根のある煉瓦の建物で、名匠ブラマンテの初期の工作であつた。寺は黒ずんだ桑林の後ろに方る原に聳えて、白い雲の背景に對して薔薇色に又灰色に見えた。

七

兩人は直ちに僧院の食堂の中へ通つた。

食堂は無裝飾の、長い、白塗りの室で、屋根裏には梠が見え、濕潤の氣、薫香の馨、精進日に攝る食物の匂が室内にあつた。僧院の住職の食卓は室の入口の壁龕にあるし、僧達の坐する長く狹い食卓は左右の側に並んでゐる。其の靜けさは窗々に囁く蠅の聲が耳に聞える程で、窗には黄色い、埃のかゝつた、小さい硝子板が嵌めてあり、室は蜂巣の房のやうに洞然としてゐる。併し時折、鐵の揚鍋のガチャ〳〵鳴る音と一しよに、人の聲が臺所から聞えて來る。

住職の食卓と向ひ合つた室の端に木の足場が組んであつて、粗雜な灰色の巾でそれを蔽うてあつた。ヂョーヴァンニは此足場の後ろには、先生が既に十二年來苦心してゐる最後の聖餐の大作があるのだと判斷した。

レオナルドは足場の上に昇つて、下圖、模樣形、繪具などの入れてある木の箱を開いてから、澤山な書き入れのある、痛く損じた拉典文の小さな聖書を取り出して、ヂョーヴァンニに渡しその約翰傳の第十三章を讀ませた。それから壁畫を蔽うてゐる掛物を外した。

ヂョーヴァンニが第一に得た印象は、自分が今見てゐる物は繪ではなく、此の食堂を引き伸ばしたもので、然かも天空を背景としてゐるものだといふ感じであつた。幕の揚がつてゐる奥には別の室があるやうに見えて、天井の梁が其處へまで延びて行き、その遠くなるに從つて間隔を縮め、日の光りは畫面の三重窗から照り込むシオンの岡の上の靜寂たる夕陽に混じてゐる。此の食堂の森嚴と、無裝飾とは此處僧院の食堂に比して差して劣つてはゐなかつた。盃、皿、ナイフ、細口壜などの載つてゐる聖卓は、縱し一段の尊嚴の感はありこそすれ、僧達が毎夜會食する食檯に似てゐるし、これに細い縞模樣や、隅々の結び目や、滑かならぬ襞のある食卓巾は、僧院の巾地類を入れてある室から唯つた今取り出したやうで、未だ濕り氣があるやうに思はれた。

ヂョーヴァンニは約翰傳を開いて讀んだ——

逾越の節の前にイエス此世を去りて父に歸るべき時いたれるを知り……時に彼等晩飯の席につく惡魔はかねてイエスを賣んとする事をシモンの子イスカリオテのユダといふ者の心に發さしめたり……。

——イエス此事を言て心に憂へ證して曰けるは誠に實に爾曹に告ん一人なんぢらの中に我を賣者あり。弟子たち互に面を覩あはせ誰を指て言へるなる乎と疑ふ。——イエスの愛する一人の弟子イエスの懷に倚てありし。

ヂョーヴァンニは壁畫の方に再び目を擧げた。使徒達の顏は活々と生動して、從來生起したあゆる大破裂中、最も神秘な且つ最も恐ろしいもの――神を死に致す罪の發生――のため周章の狀は見えながらも、然かもヂョーヴァンニ自身が宛ら彼等の語を聞き、彼等の魂の奧底を眺めてゐるやうであつた。

就中ヂョーヴァンニは猶太、聖彼得及び聖約翰から感銘を受けた。ユダの首は未だ描けてゐないし、それに後ろの方に曲げてゐる身體は薄く輪廓が取れてゐるのみで、其の痙攣的な指は荒荒しく金囊を掴み、鹽皿を顚覆して鹽を零してゐる。彼得は憤然として後ろから起ち上つて、右手にまだナイフを持つた儘、左手を約翰の肩に掛けて、此の愛弟子に、『此は誰を指て言るなる乎』と問うてゐるかのやう。そして銀髮と雄々しい憤怒とを合せて、彼の全身は炎々たる熱心と偉業に對する渴望とを示しながら、師の避くる能はざる苦痛を知解して、『主よ何故に今なんぢに從ふこと能はざるか、我は爾のために我命を捐ん』と叫ばうとしてゐる。それに反して長い絹の如き髮を有せる約翰は平和に眠つてゐるやうで、瞼を伏せて兩手を組んだ容子といひ、長味を帶びた瓜實顏といひ、天國のやうに平安な澄心の理想とも見られるのであつた。弟子中、獨り彼のみは苦痛、恐怖、憤怒を知らなかつた。

ヂョーヴァンニはこれを見て心の中で思つた。『これがレオナルド先生の先生たる處だ！私は先生に疑ひを抱いて諸種の惡言を殆く信じようとしてゐた。斯樣いふものを創作した人が不信心と云へやうか。否、凡そ人類中此の人くらゐ基督に接近してゐる者がゐるだらうか？』

一方レオナルドは巧みに畫筆を揮つて約翰の顏を仕上げてから、今度は木炭で耶蘇の首の輪廓を取りに掛つた。併しそれは出來なかつた。此の首に思ひを凝らして以來既に十年、然かも未だに基礎の下圖さへ了へ得ないのである。聖い顏を表現さるべき空虛に打衝かる每に、レオナルドは死ぬ程の懊惱と自己の無力の意識とを覺えて戰慄するのである。で、今も彼は木炭を傍に投げ捨てゝ輕く描いた僅少の線を巾で拭き消して夢みるやうな狀態に陷つたが、それは何うかすると數時間も續く事があつた。それを見たヂーヴァンニは强ひて師に近いて其の顏を窺ふと、年を取つて峻嚴相に見え、間斷なき緊張と沈默たる失望の印跡を帶びてゐるやうであつた。

併しレオナルドの目が弟子の目の上に落ちた時、彼は深切氣に言つた――

『あゝ君、此の畫に關する君の意見は？』

『私なんか何と言へませう！先生、美しい畫です。此の畫の美は世界のあらゆる物を超絕し

てゐます。外に誰あつて斯んな場面をこれほどに了解したものはありませんでした！否併し私は言ひますまい――言へないのです。』

と言つた聲は顫えて涙に濡れた。併し直ぐに低い聲で言ひ加へた。『先生にお尋ねしたい事が一つあります。斯んなに幾つも顔がありますが、猶太の顔は何んなになるのでせう？』

師は返事をせずに下圖の紙を取つてヂョーヴァンニに渡した。それに描いてある顔は恐ろしくはあるが、忌まはしくもなければ惡相でもなく、却て無限の憂愁と大『知』の深い苦味とに滿ちた顔であつた。

ヂョーヴァンニはそれを約翰の顔に比べて、恐怖に打たれて叫んだ。『左樣、これこそは猶太だ！（惡魔彼に入れり）とある猶太だ。恐らく猶太には弟子の誰よりも「知」があつて、かの（一切の者は一たらん）てふ叫びを受け取る事を肯じなかつた。何故なら猶太は自分自身で以て唯一の者たらん事を欲したのだから。』

此の時チェサレ・ダ・セストが宮廷服を着た男と一しよに食堂へ躍り込んだので、ヂョーヴァンニの言葉は途切らされた。

『到頭見付かつた！到頭！』とチェサレは叫んだ。『先生、私等は殘る隈なく先生を搜し廻つたのです。お妃樣が先生に御用があるとの事でして――重大な用件とかで。』

『何卒私に連れ立つて御殿へ御出で下さるやうに』と雜色は言つた。

『して其の譯は？』

『いやはや飛んだ災難が起りましてな、先生。實は水管が使へないやうになつたのでございます。今朝方の事、お妃樣が風呂を取らうと思召されまして、お附きの女が襯衣を取りに次ぎの間へ行つてゐる間に、栓の口が壞れまして、玉體既んでのことに湯傷をなさるところでございました。お妃樣には强いお怒り、大夫のアンブロヂオ・フェルラリ樣に大さうに苦情を並べられて、此の管に就いては一度ならず先生に御注意を申してあるとの仰有る始末。』

『何といふ子供らしい事だ』とレオナルドは答へた。『私の仕事をしてゐるのがあなたの目に這入りませんか。ヅォロアストロの處へ行つて下さい。三十分あればあの男が何も彼も修繕しませうから。』

『先生とでなければ御殿へ歸るなと仰せ付かつたのでございます。』

それに頓着せずレオナルドは畫の方へ行つたが、救世主の首を描く場所と定めてある無地の空處の上に目が落ちた時、眉は氣落ちしたやうに蹙まつた。そして又新な失敗を重ねてから、

足場を下りた。

『宜し、行くとしよう。ヂョーヴァンニ、君は私に會ひに城中の外庭へ來て下さい、其處へ行く道はチェサレが知つてゐるから。私は(騎士)のある所で君に會ひます。』

此の(騎士)とはフランチェスコ・スフォルツァの馬上の立像の事である。

かく言ひ捨てゝレオナルドは最後の聖餐には一瞥をも與へずに、雜色を從へて宮殿の浴場の管を修繕しに行つたので、ヂョーヴァンニは呆氣に取られた。

『そんなに君は其の畫から目を離されないのか?』とチェサレは蔑み顏にボルトラフィオに言つた。『確かにこれは名作だ——少くとも熟視しない間は名作だ。』

『それは如何いふ意味なのか?』

『それを僕に問ふ事かい。僕は君の信念を穢したくないからね。多分しまひには君は獨りで發見するやうになるだらう。それは兎も角として賞讃して眺め給へ。』

『チェサレ、君の考へを聞かして呉れ給へ。』

『ぢや宜しい。唯、僕の言ふ眞理を聞いても君は怒らんやうにね。君が何んな事を言ふか皆んな僕には分つてゐるさ。僕は唯君と爭ひなんかしたくないのだ。實際此の畫は立派さ。何んな大家だつてこれ位澤山な解剖は知らなからうね、斯んな遠近法、斯んな明暗の學問を有ちはせんのだ。僕はそれを兎や角は言はん。一事一物は直接に自然から來てゐる——顏の皺も、着物の襞も、何も彼もさ。それは然うだが生動する精神——そんな物が何處にあるのだ? 第一、神樣がお留守になつてゐるぢやないか。否、今ばかりぢやない、何時まで行つても此の畫面にはお留守をしてゐらつしやるのだせ。詰まり心底は、その精神に於ては、皆んな氷と死なのだ! 見給へ、ヂョーヴァンニ! 君の目を開いて見給へ! 此の幾何學をそつくりの規矩整然たる所をお目に入れたいね——三人組が四つあつて、思案最中のが二組、動いてゐるのが二組、そして其の中央が即ち基督だ。ま、細かく見て見給へ。先づ右の方から言ふと、約翰が點の打ち處のない善、猶太が申分なき惡で、彼得は善惡の判別さ(それが公平といふものだ)側にゐるのは活動組のアンデレとヤコブとバルトロマイの三人なんだ。今度は左の方を見給へ。此處にも三幅對がゐて考へに沈んでゐるだらう、詰まりビリボの愛、ヤコブの信、トマスの智なのだね。それから今一つ三つ組がゐて活潑さうにしてゐるぢやないか。ところでだ、ヂョーヴァンニ、此の畫にはインスピレーションが絶無で、あるのは幾何學ばかりさ、美の坐すべき席に數學がゐるのだせ。一切合切が珠盤づくめ、嘔吐を催すほどの理責、厭になるほど吟味に掛けられ、天秤

に懸かつて、コンパスで測つたのだ。ねえ君、神聖な物の裏に――輕蔑すべき物があるのだぜ。』

『チェサレ、チェサレ！』とヂョーヴァンニは穩かに窘めて言つた。『君は殆ど先生を了解してはゐませんね！何故先生が憎いのです？』

『では君は多分あの人の眞價が分つてゐると思つて居るので、從つてあの人を敬愛するのだね？』とチェサレは友を顧みて苦い微笑を浮べながら迅速に言ひ返した。其の目には消え難い惡意が燃えてゐたので、ヂョーヴァンニは我れ知らず目を反けた。

『君は誤つてゐる、チェサレ』と間を置いてから彼は言葉を繼いだ。『此の畫は未完で、基督は未だゐないのだ。』

『さ、それがゐるやうになるかね？君は然う思ふのかい？まあ宜いから試めしに見てゐやう。それは兎も角、君は僕の言葉に注意して呉れ給へ。僕は、先生は決して最後の聖餐を完成しない、猶太も基督も決して描きはしないと言ふのだ！何故つて君、考へて見給へ、科學の事ならば數學と實驗とでいろ〳〵の事が出來ようさ、併しそれで何もかも出來るわけのものではない。それ以上更に必要なものがあるのだ。あの學識を備へてゐる先生を以てしても到底通過する事の出來ない或る境目があるのだから。』

兩人は僧院を出て王城なるポルタ・ヂョーヴィア城の方へと進んだ。ポル・トラフィオは長い沈默の後に斯う言つた――

『チェサレ、此の一點は確に君の誤りだ。猶太は最う出來てゐる。私は見て知つてゐる。』

『何時？何處で？』

『唯つた今――僧院でさ。先生は其の下圖を私に見せて下さつた。』

『君が？』

チェサレは凝と見守つてから、努めて言ふやうに遲い語調で、『何んな風だつた？善い？』

ヂョーヴァンニは點頭いて見せた。それ以來チェサレは沈默を守つた。

八

兩人は宮城の門に達して吊橋を渡つた。此の橋はフィラレテ塔に通ずるもので、塔は南の方に向つて居て深い濠を周してゐつた。此處は晝尙ほ暗く、加ふるに兵營から發する名狀しがたい匂――例令ば厩舍、藁、饐えたパンなぞの香が空氣の中に混じてゐた。響き渡る拱廊の下からは外國の傭兵の笑ひ罵る聲が反響して來た。

チェザレは通行券を持つて居たが、ヂョーヴァンニは疑念の目を以て見られて守衛簿に其の名を記るされた。二の橋で再び取調べを受けてから、橋を渡つて武器の廣場てふ名のある城内の荒れた内庭に達した。正面にあるのは峻し氣なボナ塔で、右の方には君公の御殿の車寄、左には捲糸の竿と呼ばれて居る處があつて、これは正しく鷲の巣のやうな處で、城内でも一番行くに困難な部分である。廣場の中央を圍める粗雜な木の垣には早や苔が生えて風雨に曝された跡が見えるが、其處に聳えてゐるのは、綠色の膏土で作つて未だ完成になつてゐない馬上の巨像、即ち件の騎士で、高さ二十ブラッチオを下らず、レオナルド・ダ・ヴィンチの思ひ切つた仕事であつた。巨大なる馬は後脚で立つて、水氣ある大空と對して黑く見え、傷いて倒れた一人の武士が蹄の下になつてゐる。そして馬上の人は即ち大首魁のフランチェスコ・スフォルツァで、彼は半分は兵士、半分は强盗、これを引つ括めていへばヤマ師であり、己れの劍と己れの血とを他人に提供して以て金錢を得る底の人物であつた。素と一農民の子で、强きこと獅子の如く、狡黠なること狐の如く、怜悧と罪惡と大手柄とによつて權勢の絶頂に到達して、臨終の息はミランの君公といふ玉座の上で引き取つたのであつた。青白い日光は此の巨像の上に一杯に落ちて、莫迦に大きい其の二重顎と、勢ひ猛に見張つた貪りの目とに於いて、ヂョーヴァンニは飽食した

る野獸の平靜を見たのである。レオナルドは志銘として次の雙聯を像に刻んだ。

諸人の待ち設けたる大作成る。
銅は型に入り、聲は叫ぶ、曰く、此の神を見よ。

最後の『此の神を見よ』てふ二語はヂョーヴァンニを驚かした。

『神だつて？と彼は言ひながら、巨像を眺め、又猛き勝利者に蹂躙されてゐる犧牲を眺めた。そしてサンタ・マリア・デルレ・グラヂエの僧院の靜寂たる食堂や、シオンの岡や、聖約翰の天童のやうな美しさや、最後の聖餐の靜けさや、並びに『此の人を見よ』と言はれて居る基督を思ひ出した。

と、丁度此の時レオナルドの妻が現れた。

『さ、急がう。何うやら庖厨の烟突が烟を出してゐるらしい。今の間に早く逃げないと私は又呼び戻されて直しを頼まれるから。』

ヂョーヴァンニはこれに答へ得なかつた。俯首いた儘立つたが、其の顏は青白い。

そして程なく『先生』と言つた。『失禮ではございますが先生にお尋ねしたい事があるのです。すつと以前から考へてゐまして未に了解できないのですが、何故先生は騎士と最後の聖餐の製

作とを同時に著手なされたのでせうか？』

レオナルドは驚きながらも靜かに弟子を見守つた。

『何故了解できないか知ら？』

『おゝレオナルド先生！先生はあの二つを同時にやるのは不可能だとお感じになりませんか？』

『然うは感じない、ヂョーヴァンニ。私の考へではあの兩作は互に補益するものだと思ふ。最後の聖餐に對する私の最も善い概念は、巨像を製作してゐる時に生じたのだし、それに私は彼處のあの僧院の食堂にゐる時でも、此のフランチェスコ公の記念像の事を好んで考へる。詰り此の二つの仕事は雙兒だね。同時に始まつたから矢張り同時に仕上がるであらう。』

『同時に！基督と此の人とがですか？それは不可能です！』

そして自分の考へを何う表白して好いか分らぬながらも心に火が附いてゐるやうに感じて、再び『それは不可能です！』と烈しく繰り返した。

『では何故です？』と靜かな微笑を含んで先生は訊ねた。

ヂョーヴァンニは其の返答をしたかつたが、平靜な、不可解な先生の目に逢つたゝめ、語は唇の上で消えてしまつた。多分レオナルドは其の消えた言葉の意味を了解しまいと思つたからであつた。それで、少年は默して只考へた。

『實に不思議だ！一時間前にあの畫を見た時、自分は先生が了解されたと思つたのに、今は又全然分らなくなつた。一體先生は心の中で雙兒の孰れに就て《此の神を見よ》と言つてゐらつしやるのだらう？』

九

其の夜、人は皆眠つてゐるのに、ヂョーヴァンニは不眠症に苦められる餘り、起き上つて庭の葡萄の枝の天幕のやうになつて居る其下にある石の腰掛けのある處へ行つた。庭は方形で、中央に井戸があり、その石の腰掛けの後ろは直ぐ家の壁になつて厩舍と向ひ合ひ、左手の石垣にはヴェルチェルリナ門のある街路に通ずる耳門が設けてあり、右手に見えるのは小園の壁で、それには一枚の戸があつて毎時も錠が降りてゐる。其の戸を潜ると離れ屋があつて、其處の出入は獨りアストロに許されてゐるだけ、レオナルドは此の離れ家に閉ぢ籠もつて製作する習慣であつた。

夜は靜かに暖かく、濃霧四邊を罩めて、月光は朧に其の中を貫いてゐる。不圖此の時、往來に出る門を叩く音が低く響いた。と、下の窗の鎧戸が開いて顏を出して尋ねた男がある。

『カッサンドラさん？』

『え、私。明けて下さい！』

家から出て來たのはアストロで、女を門の中へ入れた。女の白衣は月光と露とのため異しく綠色に變つてゐる。兩人は門の處で何か談し合つてから、ヂョーヴァンニの居るとも知らず其の傍を過ぎて行つた。蓋しヂョーヴァンニは葡萄の枝の深い陰の中に坐つてゐたのである。

女は井戸の低い垣の上に腰を下ろした。其の顏の奇妙なこと、彼の古代の彫像に見る顏のやうに沈着き切つて動的な所がない。額は平、眉は濃い一文字、腭は並外れて小さく、目は澄んだ琥珀のやう。併し就中ヂョーヴァンニが驚いたのはその髮の毛で、色がうすくて柔かく、縮れてゐる具合は、宛らそれに生命が宿つてゐるかと思はれた。そしてメヅサの蛇髮のやうに、其の漆黑は女の顏を枠に入れたやうに見せ、その白い處は愈々白くし、唇は益々朱くし、琥珀の目には一段の清明を加へてゐる。

『ではアストロ樣、あなたも坊樣のアンヂェロの話をお聞きになりましたか？』と娘は言つた。

『聞きました。法王はあの人を派遣して異宗や魔法を剿絶させるとのこと。あなたに糺問の僧達に關する話をすると屹度身の毛が戰つでせう！併し神樣は彼等の爪牙に掛らないやうに私らを守つて下さいませう！カッサンドラさん、用心なさい。取り分けあなたの叔母樣に氣を付けないと可けません。』

『でもあの方は私の好い叔母樣です！』

『そんな事は何でも好い。それからあなたと一つにゐるシドニアさんに用心してゐなくちや。』

『では鍛冶屋さん、あなたは私達を魔法使の女と思つてゐなさるの？』

『そんな事は決して、兼々レオナルド先生から、魔術なんかあるものぢやない、自然の法則から云つてもそんな物のある譯がないと敎へられてゐます。あのレオナルドといふ方はありとあらゆる事を心得てゐられますが、何一つ信じはなさいません』

『何一つ信じはなさらない？では惡魔も？神樣も？』

『冗談ぢやない！レオナルド先生は聖徒ですよ。』

『ではあなたの飛行機は？あれは最う出來ましたか？』と女は輕蔑の語調で言つた。

鍛工は失望的に手を振つた。

『出來ましたかつて？そこ所か最う一度すつかり拵へ直すのです！』

『アストロ樣！アストロ樣！あなたはあんな譫けた物を未だ本統だと思つてゐらつしやるの？あんな機械は目の中へ這入る塵でございますよ。レオナルド先生はこれまで數回飛行なさいましたよ。屹度然うですよ。』

『飛びなさつた？何うして？』

『飛びなさいますよ——丁度私のやうにね。』

男は熟々女を見守つた。

『あなたの飛行は夢の中でゝせう、カッサンドラさん。』

『あなたは然う取りますか？然うぢやございません、私の飛んだのを見た人が幾人もございます。多分あなたは未だ彼の話を御承知ないのでせう？』

鍛工は躊躇の氣味で頭を掻いた。

『併し私は飛ぶのを忘れました』と女は嘲り氣味、『此處の御方は皆んな學者揃ひ、奇蹟を信じないで機械を信じなさるのだから。』

『然ういへば機械の畜生！彼奴あ私の首枷だ。眞實にあなたが知つて下されば……』と歎願するやうに兩手を擴げて、『カッサンドラさん、あなたは私の誠意を知つてゐらつしやる。それにアンヂェロ師の耳に這入つては好くないのだから、うつかり他にも洩らす樣な事はありません。だから極く內證で私に話して下さいませんか、私を可哀さうだと思つて詳しく話して下さいませんか。』

『何のお話をするのです？』

『何うしてあなたが飛ぶのか——』

『それは可けません、あなた、それは可けません。餘り能く分り過ぎると直ぐに年をお取んなさるから。』

そして間を置いて、長い間男の目の中を凝と見詰めてから優しく言つた。

『唯話すだけでは何の効がありませう？實行なさらなければいけません。』

『飛ぶのに必要な物は何です？』とアストロは音調を震はせ青くなつた。

『或る言葉が要ります。それから肌へ或る膏藥を塗らなければなりません。』

『其の膏藥は爰に持つてゐますか？』

『持つてゐます。』

『それから其の言葉を知つてゐる？』

女は點頭いた。

『そして誰でも飛べますか？』

『ま、試めして御覽なさい。あなたの機械よりか私の方の簡易なことが分りませうから。』

鍛工の獨眼は熱望の狂氣を以て燃えた。

『カッサンドラさん、其の膏藥を私に下さい。』

女は笑ひを嚥み殺した。

『あなた馬鹿ね、アストロ樣。五分前に魔術を馬鹿呼ばゝりした癖に、今では最うそれを信じてゐらつしやるやうだ。』

アストロは成程と思つて首を傾けたが、併し自分の請求を悔いはしなかつた。

『私は飛びたいのだ。機械だつて奇蹟だつて構ふもんか、飛べさへすれば好いのだ。唯待つことだけは最う〳〵堪へ切れない。』

娘はアストロの肩に手を掛けた。

『分りました、分りました。本統にあなたは可哀相です。飛べなければあなたの腦が破裂するに決まつてゐます。では宜しい、藥を差上げて言葉を敎へませう。敎へませうが併しアストロ樣、あなたも私の賴む事をして呉れなければ可けません。』

『それはしますとも、カッサンドラさん。何でもしますから言つて御覽なさい。』

娘は園の垣の中にある濡れた屋根を指した。

『私を彼處へ入れて下さい。』

アストロは眉を顰めて首を振つた。

『其奴あ可けない。其の他の賴みなら何でもしますが。』

『何故それが可けないのです？』

『誰も中へ入れないやうに先生と約束してありますから。』

『だつてあなたは這入るぢやありませんか？』

『それは然うですが。』

『何があります、彼處の中に？』

『不思議な物は何もありません、カッサンドラさん。別に大切な物もないのです。あるのは機

械類に器具類に書物や書き物。それから若干の奇觀植物や動物、爬蟲類もありますが、これは皆んな遠い地方から旅行家が持つて來て呉れたのです。それから毒の木が一本あります。』

『え？あの毒の木でございますか？』

『然うです。先生が試驗用に持つてゐらつしやるのです。毒の植物に於ける効果を見るために。』

『アストロ樣、賴むからその木に就て知つて居る丈の事を話して下さい。』

『別に御話するほどの事もありません。先生は初春になると其の幹へもつて行つて髓に達する位の孔を明けて、細長い針で少しばかり毒素をおさしになります。』

『まあ稀代な試驗ね！そして其の木は何の木でございますの？』

『桃の木です。』

『そしてそれから何うなります？矢張り果實にも毒がございますか？』

『然うだらうと思ひます、熟すればね。』

『で、あなたは其の桃の實に毒のあることが御覽になつた計りで御解りになりますか？』

『それは解りません。それだから先生は人をお入れにならないのです、知らずに桃を食つて命を捐てちや大變ですからつてね。』

『あなた鍵をお持ち？』

『持つてゐます。』

『アストロ樣、其の鍵をどうか私に下さいまし！』

『カッサンドラさん！先生に私は誓つたのぢやありませんか？』

『ね、其の鍵を下さいましな、今夜の中にあなたが飛べるやうにして上げますから――ね、今夜の中にね。さ、これが今言ひました藥なのです。』

女は重い液體の入れてある壜を取り出して、自分の顏を男の顏に摺り寄せ、巧みに取り込むやうに呟いた。

『あなた何をそんなに恐がつてゐらつしやるの、お馬鹿さんネ。彼處に不思議な物は何もないと言つたぢやありませんか。二人で行つて確めませうよ。鍵をさ、アストロ樣、鍵を！』

『可けない！あなたを入れはしません。其の秘密なんかも聞きたかありません。お歸んなさい。』

『此の臆病者が！』と女は顏にこまやかな侮蔑を見せて叫んだ。『秘密を知る事が出來るのに

聞かないつて！これで能つく分りました。レオナルドは魔法使です。子供を騙すやうにあなたを騙してゐるのだ！』

併し此の侮蔑も男を動かすに足らなかつた。アストロは首を後ろの方へ向けて、不機嫌らしく女の言葉を聞いてゐる。カッサンドラは再び側に寄つて、

『ぢや宜ございます、アストロ樣。それでは左樣として私は中へは這入りますまい。中へ這入りませんから唯戸を少し明けて私に覗かして下さい……』

『ぢや這入らない？』

『え、這入りません、戸を明けて一寸覗かして貰ふだけで好いのです。』

と聞いてアストロは鍵を取り出して戸の錠を外した。

ヂョーヴァンニは密つと身を起して近く寄つた。垣を周らした小園のずつと向ふの端に普通の桃の木のあるのが見える。綠色の月光の朧に霞む下で、木は氣味惡く不祥な物のやうに思はれた。

娘は戸口に立つて熱心な好奇の目を大きく開いて、周圍を見廻してゐるうち、足を一歩前に踏み出した。鍛工は慌てゝ引き戻した。併し女は身を交して蛇のやうにするりと男の兩手を拔けた。男は再び女を押し出して殆く轉ばしさうにした。女は直ぐ立ち直つて男の目を凝と見詰めた。其の青白い、鉛色をして、憤怒のため間の縮まつた顏は實に凄かつた。其の瞬間、女は誠に巫女のやうであつた。

鍛工は礑と戸を締めて、一語をも發せず家の方へ戻つた。女は金色の目をして男の後に跟いて來たが、直ぐ樣そゝくさとヂョーヴァンニの傍を過ぎて、例の耳門からヴェルチェルリナ門の往來へと拔けた。

園は再び森々として霧は益々濃くなつた。物皆は霧の中に消失した。

一人になつたヂョーヴァンニは苦し氣に目を瞑ると、彼の恐ろしい木が幻影のやうに眼中に浮かんだ。其の打ち濕つた葉、其の毒ある果實の上に宿る重い露は青白く輝いて見える。彼は行くりなく次ぎの辭句を思つた。

『園の各種の樹の實は汝意のまゝに食ふことを得然ど善惡を知の樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり。』

三の巻　毒ある果實――一四九四年

蛇婦に言けるは汝等必ず死ぬる事あらじ神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善惡を知に至るを知りたまふなりと――創世記第三章第四、第五節。

若木の心に孔を明けて、これに砒素と試藥と酒精で稀薄にしたる猛汞とを注入すれば毒は其の果實に迄及ぶのである――レオナルド・ダ・ヴィンチ。

一

公妃ベアトリチェは金曜日毎に髪を洗つて金を塗り、塗つた後を天日で乾かすことに決めてゐた。そして乾燥に利便ならしめるがため、スフォルツェスカの宏麗な別殿の屋根に欄干付きの臺を建てさせた。此の君公の別殿はチチノ河の右岸に聳えて、ヴィチェヴァノ城に近く、ロメルリナ州の肥沃な畑地と、四季の眺め緑なる水邊の牧場との間にあつた。公妃は此處に坐して烈しい暑さに氣根よく耐えるのであるが、これをする時刻には農夫や犁牛さへ日蔭を選んで其の中

に潜む習ひの時であつた。公妃はスキアヴィネッタと云つて袖のない寛やかな白絹の裲襠ようのものを着て、藁製の日避け即ち帽子を頭上に戴き、其の先端の開いてゐる所からは金を捺して廣やかに漣立つ髪が流れるやうに食み出てゐた。そして肌の橄欖色せるチルカシアの侍女は紡ぎ棒の先端に附けてある海綿で公妃の髪を濕してゐるし、藪睨みで、剩へ傴僂の韃靼女は象牙の櫛で髪を梳いてゐた。

髪の染料は五月の候を選んで調製されるもので、胡桃の根、泊芙蘭、牛膽、燕が作る石灰分、龍涎香、熊の爪、蜥蜴の脂の合劑であつた。公妃の直ぐ傍にあつて公妃自身で其の加減を見てゐるのは麝香薔薇と高價な諸香料との煎劑で、それは目に見えぬ程の焔に當つて、三德の上に懸けてある長い頸の蒸溜器の中で沸々と激つてゐる。

兩侍女とも全身汗浸しになつてゐるし、公妃の狆さへ此の燃えるやうな高臺の上で、不安氣に喘ぎながら舌をダラリと垂れ、主人を怨ずるやうに眺めて、毎時のやうに猿の挑戯に應じようともしない。猿と、それに珠玉を鏤めた眞珠母の鏡を持ち支へてゐる黑人の侍童だけは、却て此の暑さに得意然としてゐるらしい。

公妃ベアトリチェは己が自分の位の嚴なるに相應しくしようとして、極端に容貌と動作とを作つてゐるけれど、これが三年前に入内して、今は二人の子持となつてゐる當年十九歳の女とは受け取り難くかつた。其の黑味を帶びた頰の少女に見るやうな丸味、小兒らしい靨、細そりとした喉、ダブ〳〵した脣――そして唇を屹と固く塞いでゐる樣子は、始終然うしてゐないと動もすれば尖り勝ちになるを氣遣ふかのやう、それから痩せぎすな肩と平らな胸、兎もすれば小童のやうな荒々しい擧動――凡そこれらのものに徵して見ると此の婦人は未だ學校通ひの少女のやうで、氣隨氣儘、落着のない、自分勝手の點さへあつた。とは云ふものゝ確固たる黑い目からは細心と怜悧とが輝いてゐて、ヴェニスより此處に駐劄せる使臣で、兼て最も狡智ある政治家たるアリノ・サヌトは、政府に祕信を發して、『此の婦人は燧石の如く頑固にして、夫イル・モロ公に比し本官を手古摺らす事遙に大なり。公は一に妃に柔順にして以て賢明を致し居れり』と書き送つた程であつた。

此の時狆は腹立たしく吠え出した。見ると此の臺に通ずる螺旋狀の梯子を登つて來る一人の老婆がある。寡婦の服裝をして、片手には橦木杖、片手には珠數を持つてゐるが、若し夫れ皺の寄つた口を强ひて僞善らしく笑はせず、又目の輝きに恐ろしい狡猾が見えなければ、其の顏の皺に尊い面影がちら〳〵する筈であつた。

『やれ、やれ！年を取るのは何とした厭やなものでござりませう！私、此所へ來ることが六づかしい程でございました。神樣には何卒お妃樣の若さと健康を保存遊ばすやうに』と、禰禰の緣に接吻しつゝ件の老婆は言つた。

『おゝシドニアか。彼れは出來ましたか？』

老婆は用心堅固に上包みして、琻と栓のしてある瓶を取り出した。瓶の中のは白く濁つた液で、赤山羊と驢馬との乳の中に野茴香、獨活、及び白百合を入れて、それをらんびきに掛けた物であつた。

『成るべくならば今二日ばかり馬の上等な數藥の中に入れて置いて下さいませ。但し御入用でありますれば直ぐにも御使用になりまして宜しうございますが、其の代り先づ濾道具でお濾になりましてから、饒えたパンの切れに藥をお濕しなされて、彼の三信條を御誦讀に相成る時間だけ、お顏をお擤りなされませ。しますると五週間の後にお色の黑いのは消えまして、吹出物も亡くなつてしまふのでございまする。』

『あゝ一寸シドニア。彼の魔法に用ゐる厭な物が幾らか此の藥の中に這入つてゐるらしいが――蛇の脂とか、千鳥の血とか、フライ盤であげた蜥蜴の粉とか、何時か私の頰の黑子に生えてゐた毛を枯らすため持つて來た膏藥の中にあつたあんな種類の物が這入つてゐるらしいが。それに相違なければ此處で直ぐ然うと明してお呉れ。』

『ま、お妃樣としたことが。惡人の讒言にお耳を假されぬやうに願ひ上げまする。此の婆は良心の命ずるが儘、極く正直に致しましたのでございます。とは申せ、時と場合によりましては汚物の入用なこともないではございませぬ。例へばあの御立派なアンヂェリカ樣は髮の拔毛を防ぐため昨年一杯犬の小用でお頭をお洗ひになりました。そして首尾好く拔毛が止まつた神樣と私にお禮を申された程で――』と言つてから、公妃の耳際に身を寄せて、最近の噂話を語つた。それは鹽組合の長の未だ若い愛くるしい妻フィリベルタが夫を欺いて西班牙の騎士と通じ、放埒を極めてゐるとの事であつた。

ベアトリチェは戲れに指で嚇すやうにして、『そして可愛さうにそんな事をさせたのは的きり此處にゐる女衒婆らしい！』

『これはしたりお妃樣にはあの婦人を可愛さうと仰有りまするか？どう致してそれどころか歌でも唄ふやうに始終私に禮を言つて居りまする。此の頃では夫の接吻と情人の接吻との差異が分るやうになられました。』

『が、併しそれにしてもその罪はさ？良心に身を咬まれはせぬかえ？』

『へゝ、良心？お妃樣、此の婆は戀の罪をば大自然の作用と見てをります。聖いお水をタラタラと數滴注けますれば不義の罪はそれで洗ひ落されませう。角と飛車との取りかへこ、五分五分でございますはい。』

『では其方の考へでは其夫とやらも矢張り……』

『さ、聢と然うとは申し上げられませぬが――併しお妃樣、女房持ちの男は誰でも皆んな同じ事ばかり言つて居りまする。一本の腕をなくしても一人の女房丈けでは承知が出來かねるのでございまする。』

公妃はから〳〵と笑つた。『まあシドニア、其方を負かすのは仲々難いことー一體然ういふ事を何處で聞き出しました？』

『年寄りの言葉は信實と思召されませ。婆の申し上げる事は御經のやうに本統でございまするぞ。良心の事ならば粱のやうに大きな物と微塵のやうに小さな物との間にあるやうな相違を憚りながら婆は知つてをりまする。時節到來しますれば果物は皆熟します。女は若い間に能く戀をして置きませぬと年を取りましてから强う戀を望むやうになりまして、眞慕に惡魔の爪牙にかゝるのでございます。』

『其方の話口は神學博士見たやうな。』

『何う仕りまして。婆は無學者でございます。ちやが婆の言葉は皆んな心底から出まする。何とお妃樣、吳々も申し上げて置きますが、若い時は一生に唯つた一度しか來ませぬぞ。御同樣女の身柄、やがて年を取りますれば――ま、御免遊ばせ――女が何の役に立ちませう。大方、火鉢に炭を繼いだり、臺所の鍋釜を數へるのが落ちでございませう。諺にも《若い女は食ひ年寄りの女は嚥む》（イタリヤ語の嚥むは侮辱をもおとなしく忍ぶといふ意と同文字なれば此の諺がある）とありますのが何よりの實證、如何に美しうても戀がありませねば、朝のお禱にあの（天に在ます我儕の父よ……）を誦せぬと同じ事でございませう。』

『何を言ふのやら、最う一度言つて御覽！』と公妃は笑つた。

すつかり茶化してしまつたと見て取つた老婆は再び耳元に身を寄せて、何事か知ら呟いた。ベアトリチェの笑ひは止んで、顏に見る〳〵曇りが來た。そして伊太利語を知らぬ黑人だけを殘して侍女二人を退かせた。周圍は靜寂として熾熱せる空があるだけ。空は激しい暑氣の下に青ざめたやうに見える。

『馬鹿々々しい！そんな噂なら何も氣にかけるほどな事でもないのに』と公妃が答へた。

『お妃樣、婆は此の目で見ましたし、又此の耳で聞いたのでございます。他の人達も矢張り斯うした事を申し上げるでございませう。』

『大勢の人がゐて？』

『一萬人でございます。バヴィア城の前の廣場は人で埋まりました。』

『して、其方が聞いた事は？』

『イサベルラが彼の小つちやなフランチェスコを抱いて出て來た時は、手を拍つ、帽子を振る――涙を流した者も多勢ございました。アラゴンのイサベルラ樣萬歳！ヂアン・ガレアッツォ樣萬歳！正眞正統の君たる皇嗣子萬歳！と斯う叫ぶのでございまする。それから、君位の僭奪者は殺してしまへとも叫びました。』

ベアトリチェは眉を蹙めた。『實際そんな事を言つたの？』

『左樣でございます。最つと非道い事を言ひました。』

『言つてお了ひ――何も氣遣ひをするには及びません。』

『斯やうに申しました……何うもお妃樣、私の舌は仲々言はうとは致しませぬが……ま、斯んな事を奴鳴りました。泥棒死んぢまへつて！』

ベアトリチェは身を顫はしたが、強ひて己れを制して平氣で尋ねた。『未だ何か言はなかつたかえ？』

『ま本統に、お妃樣に何と申し上げて好いやら私には分りませぬ。』

『さ、さ、早く。何も彼も聞きたいから。』

『斯うでございます、お妃樣。ヂアン・ガレアッツォに取つては保護者であらせられ又恩人であらせられます我が君ルドヴィコ・イル・モロ樣は、甥をバヴィア城に押し籠め、刺客、密偵で押つ取り卷かしてあると申しました。そして皆でガレアッツォ公の出御を強みましたが、イサベルラが公には御不例であるからと答へたのでございます。』

と言ひ終つて、シドニアは再び公妃の耳に囁いた。

『婆、其方は亂心してゐる』と公妃が叫んだ。『用心せぬと此の屋根から突き落して、其方の骨を烏でさへ拾ひ集められないやうにしてやるから。』

此の威嚇もシドニアを恐れしめなかつた。がベアトリチェの方でも直ぐに氣を鎮めた。

『其方の言ふ事は一つも信じられぬぞ』と公妃は密かに老婆を見ながら言つた。

『それは御勝手に』と相手は痩せた肩を聳やかして、『ではござりまするが、私の言分の正しい事を妨げるものはござりませぬ。まあ御覽じろ』と唆かすやうに言葉を續けて、『蠟の小人形をお拵へになつて、右の脇腹に燕の心臟を入れ、左の脇腹に其の肝臟を入れまして、呪文を唱へながら針を人形にお通しになりますと、あの人は段々死ぬやうになるのでござります、そしてこれを助ける醫者とてもござりませぬ。』

『お默りっと―』公妃は命じた。

と、惡婆は裲襠の緣に恭しく二度目の接吻をして、『お妃樣は私の太陽でゐらつしやります る。斯うして餘りにお慕ひ奉るのが何より惡い私の過失でござります』と言つてから、暫く間を置いて一寸附加した。『尤も魔法でなくともそれは出來るのでござりまするが。』

公妃は默つた儘、何か聞きた氣に老婆を見てゐる。

シドニアは更に、『唯今御苑の傍を過ぎました時、園丁が見事に熟した桃を捩いで籠に入れてをりましたが、定めしヂアン・ガレアッオ樣への贈物であらうと見當を付けました』と言つて口を噤んで、又言ひ續けた。『フロレンスの人でレオナルド・ダ・ヴィンチと申しまする者の園にも矢張り見事に熟した桃がござります。が、それには毒があり。』

『え、毒が？』

『左樣でござります。姪のカッサンドラが見まして……』と又々囁いた。

其の返答を公妃は何とも與へなかつた。髮が最早や乾き上つたので、立つて裲襠を脫ぎ捨て、衣裳部屋に降りて行つた。衣裳部屋には大長持が三つあつた。一番目の長持の大さは寺院の聖器收納所にあるやうな物と等しく、當のミラン公に嫁して以來三年間に調へた八十四枚の衣類が中に入れてあつて、其の或る物は黃金と寶石とで鯱張つてゐるため疊の上に棒立ちになるし、又中には蜘蛛の網のやうに透き徹つて輕い物もあつた。二番目の長持には乘馬服と鷹狩に用ゐる器具の類、三番目には香料、液體、化粧水、膏藥、それに白珊瑚と小眞珠との齒に使用する齒みがき、無數の瓶類、精溜濾過器、らんびき、坩堝――これは取りも直さず婦人練金術の缺くる處なき實驗器具、及び畫と刺繍もて蔽はれた高價な杉箱を幾つか入れてあつた。其の箱の一つから侍女は純白の繻絆を一枚取り出した。刺賢坪爾や、東洋の菖蒲や、ダマスカスの乾した薔薇の香氣が部屋中に漂つてゐる。

ベアトリチェは着物を着けながら、自分の妹でマンツァ侯妃たるイサベルラ・デステがついぞ今し方飛脚で送り屆けて呉れた新衣の折目、皺などを直すやうに言つた。此の姉妹達は兼て各

自派手を競つてゐるので、ベアトリチェの如きは宮廷の密偵に金を與へて、マンツァ宮中の衣裳室にある珍奇な種類を殘らず自分に密告させたのである。

やがて公妃は氣に入りの着物を着用した。それは金色の繻珍と綠色の天鵞絨で筋を取つてあるもので、自分の背丈を大きく見せる着物であつた。覗き模樣のある袖は鼠色の絹紐で括つてあり、佛蘭西風に開口がついて居て、下着の白い膨らみが其處から顏を出してゐる。組んだ髮は金の網と綺麗な金の紐との間に納まつて、ルビーの蠟で留めてあつた。

二

公妃は朝の化粧に長時間を費すのが習はしとなつてゐるので、公は其の化粧の間に予は印度行きの商船を艤裝することが出來ようと言つた程であつた。然かも今朝は彼方に聞ゆる角笛の音と獵犬の吠聲とを耳にしたので、公妃は兼て出獵を命じて置いた事を思ひ出して、從つて化粧を急いだ。そして着物を附けてから通りすがりに矮人のゐる室を訪れたが、これはイサベルラ・デステが宮中の遊戯室と命名したのに模して『大男部屋』てふ名のある室で、此處に備へ付けてある椅子の如き、寢牀の如き、家具や梯子、又玩具のやうな神壇のある寺院の如き、凡て侏儒即ち矮人に適するやうに作られてあつて、右の寺院といふのは、侏儒中の物知りなるヤナキといふのが大僧正の衣と帽子とを附けて、日々これに向つて讀經するのであつた。此の『大男』共は常に騷々しく、笑聲、泣聲を初めとして、各種各樣の奇怪な聲が、偃蹇や、猿や、鸚鵡や、馬鹿や、韃靼人や、道化師や、其の他の常並ならぬ者共から發するのである。年少の公妃は時偶これらの者を相手にして一日中遊び暮らす事もあるが、今は唯、近頃ヴェニスから送られて來たナンニノといふ小黑奴の身體の樣子を見るためにのみ一寸立ち寄つたゞけ、そして此の黑人の皮膚はそれは〳〵黑いので、これを抱へてゐた前の女主人の言によれば、『これ程見事なる者は到底望まれ間敷候』とあつたのと、病氣に罹つてからはそれが然うでなくなつて、漆のやうに黑く光つてゐた皮膚は追々に剝けて白くなるので、ベアトリチェは痛く心を惱ましながらも、これに目を掛けてゐたのであるが、今や瀕死の重態にあることを聞いて非常に悲んで、至急基督敎の洗禮を施すやうに命じた。

そして階段を降らうとすると氣に入りの道化女モルガンチナに逢つた。未だ年少く、加ふるに美人で、其の可笑し味のあることは『死人をすら起つて笑はしむる』底の女で、自分の盜んだ品物をば鵲の如く巧妙に匿しはするが、深切な言葉を掛けてやれば直ちに罪を白狀に及ぶと

いふ、誠に小兒のやうに素直な罪のない者であつた。それにも拘らず時々氣鬱症に襲はれて、未だ曾て生んだ事もない自分の倅が果敢なくなつたと言つて號泣するのである。今も丁度それで、階段に坐つて膝小僧を抱いて懊惱して噎んでゐるので、ベアトリチェは頭を撫でゝやつて、『お廢し、これさ、お廢し。大人しくしてゐるのですよ』と制した。

すると道化女は涙のはふり落つる子供染みた青い目を擧げて、『まあ！まあ！まあ！皆んなで私の赤ちやんを浚つて行きました！お、神樣、何故でございます？赤ちやんは何んな惡事を致しました？』と喚く。

公妃はそれから何も言はずに其の儘庭へ降りて行つた。庭には獵の人達が自分を待つてゐたのである。

三

馬車の先乘者や、鷹匠や、勢子や、主馬や、扈從や官女に取り卷かれて、ベアトリチェは熟練なる騎手のやうに濃い栗毛のすらりとした姿勢のよい亞剌比亞馬に騎つた――これはゴンツァガの厩から出た逸物であつた。妃の出立を見るため宮殿の垣根道から出て來たミラン公は此の體を見て、『まこと彼のアマゾン女族の女王其の儘だわい』と誇りがに思つた。

公妃に續く馬上の人は金の刺繍あるけばけばしい服を着た鷹匠であつた。鷹匠の左の手に止まつてゐるのは土耳古王から寄贈されたサイプラス產の白きこと雪の如き鷹で、頭に載せてゐる金色の頭巾は綠玉できらきらと輝いて、爪には小さな鈴が附けてある。

ベアトリチェは上機嫌、微笑を含んで公の顏を見たが、公から『氣を注けないと、其の馬は疳が强いぞ』との注意を受けると其の儘矢庭に馳驅の合圖を一行に與へた。初めは道路に添ひ、後には廣い畑を越え、溝渠、小丘、掘割を飛んで行つた。公妃の供奉の人は皆後れてしまつて、續く者とては一頭の大きな狼犬と、それにカスチリアの牝馬の上のルクレチア・クリヴェルリだけであつた。ルクレチアは公妃の侍女で、數多の同輩中最も快活な、そして最も勇ましい女で、公は兼てからこれに虛心平氣ではなかつた。で、今や懸想の女と妃のベアトリチェが狂氣でもしたかのやうな速力で相並んで驅け行く姿を見た公は、孰れを孰れと團扇を揚げ難くかつた。それでありながら正しく若い妃に對して正しく深い懸念の情が起つて、深い穴をひらり飛び越えた時などは、思はず目を瞑つて氣息を止めた程であつた。幾度かこんな無鐵砲を叱責しながらも、それを止める氣にもなれなかつた。體質虛弱な公に取つて妃の男々しいのが却て一

種の誘りとも見られたのである。

妃の一行は谷合を下つて、チチノ河の低岸にこんもり繁つてゐる絹柳の中に隱れた。其處は鴫、山鷸、鷺の數多居る處であつた。

やがて公は宮殿に這入つて書院に戻つた。書院には公の秘書で且つ外國使臣の接待掛たるバルトロメオ・カルコが君命を聽くべく公を待ち受けてゐた。

四

公はやをら背の高い肘懸椅子に腰を下ろしてから、剃つて滑かになつてゐる頰を白い綺麗な手で靜かに撫でた。彼の美はしい顏には往々政治の術策に通曉せる老大家にして、始めて得られる圓滿な正直らしい表情を持つてゐた。筋の通つた鷲鼻と狡猾氣に歪める癖のある唇とは大首魁たる父君フランチェスコを偲ばしめるものがあるが、併し詩人達が言つたやうに、フランチェスコは獅子と狐とを兼ねてゐたに反して、子のルドヴィコは單に狐たるに過きなかつた。公の御衣は刺繍のある水淺黄色のふつくりとした絹物で、滑かなる髮は耳と額を鬘のやうに蔽ひ、胸には金鎖が下がつてゐる。言語動作共にいつもむらがなく禮に適つて、都びやかな人物であつた。

『リヨンから佛蘭西軍の出發するといふ消息は未だ來ないかな、バルトロメオ?』

『何もござりませぬ。皆の者は夜になれば消息は必ず明日には來ると申しまするし、朝になれば今夜のうちに來るに相違ないと言ひ合つてをりまする。佛蘭西の王陛下は大方武張らぬ獻れ事に耽つてゐるものと見えまする。』

『王の一番の氣に入りは誰か知ら?』

『それは澤山の人の名前が擧がつてをります。王の好みが樣々に變ると見えまして。』

『其方ベルヂョイオソ伯に手紙をやつて呉れないか。予は三萬——いや四萬乃至五萬ヴカットの位を送るから新に又進物を撒いて呉れ、聊かたりとも吝んではならぬと書くのだ。斯うしてリヨンから金錢の鎖で王を引つ張り出しでもしなくては仲々乘り出すまいからな。それからバルトロメオ、これは手紙に書くのではないが、此處にゐる尤物の姿繪を佛蘭西王に贈ると好いな。それは然うと今の手紙は出來てゐるのか?』

『出來てをりまする、陛下。』

『一寸見せて呉れ。』

イル・モロ公は嬉し氣に白い兩手を擦つた。恰も蜘蛛の大網の如き『權謀』を思ひ浮かぶる毎に、彼の心は快さを以て竣り立つやうに感するのである。元來彼は危險な輸贏を好愛する性質であつた。彼は又夷狄たる北方蠻族を伊太利に招いた事を過失とは認めなかつた。然うして極端な手段を取つたのは自分ではなく、自分の讐敵等がこれを行ふべく自分に強ひたからである。就中ヂアン・ガレアッォの配たるアラゴンのイサベルラの如きは、その隨一で、此の婦人は公が其の甥の君位を簒奪したと稱して居るのである。併しイサベルラの父たるネープルスのアルフォンソが此の事に參加して、戰爭と廢位とを以て公を威嚇するに至つたので、始めてルドヴィコは佛蘭西王シャルル八世に縋つた次第である。

『おゝ神樣、あなたの御業は人智を以て測り知る事は出來ませぬ！』と祕書が紙を重ねてある中から手紙を搜し出してゐる間に公は信心深く考へた。『予の國の伊太利の救濟――否、全歐羅巴の救濟は、彼の大自然から生れた畸形兒、彼の蕩兒、彼の無思慮な小兒――然かも最も基督教徒らしい王と稱せられる彼の佛蘭西王の掌中にあるのだ。光榮ある此のスフォルツァ家の繼嗣も彼の前では蹲踞して、腹這ひとなつて、馬鹿氣た事をせねばならない。けれども政略であつて見ればこれも致し方のない話、狼と共に狩する者は狼と共に吠えねばならぬ譯だからな。』

斯んな感慨の後、公は書翰を熟讀した。自分の言つた趣意は遺憾なく出てゐると公は思つた。

『基督教徒たるに最も適はせ給ふ大王よ、願はくは陛下の救濟軍に上帝の冥助あらむ事を。伊太利の諸門は開かれて大王を待てり。我が新ハンニバル、仰ぎ願はくは揚々として來り臨むを躊躇し給ふ勿れ。仰ぎ願はくは上帝の淨油を灌がれ給ひたる聖子よ、伊太利の庶民は鶴首して陛下の溫乎たる輦の下に恭敬するを待てるなり……』と書翰を此處まで讀んだ時、禿頭の老傴僂が戸を開けて室內を覗いた。公は莞爾としたが、待てといふ意を容子で示して見せた。すると其の首は引つ込んで戸は靜かに締まつたが、祕書は主君の注意が既に彼の男のために散じ掛つてゐる事を見て取つて、書翰を收めて室外へ出て行つた。公は用心深く爪先を立て、戸際へ行つて靜かに呼んだ。

『ベルナルド！これ！ベルナルド！』

『陛下、某は此處に』と言つて宮廷詩人ベルナルド・ベルリンチオニは神祕な、又卑屈な容子をして歩んで來て、膝を落して公の手に接吻しようとしたが、公はそれを押し止めた。

『好いかな？好いかな？』

『へえ、萬事順當に運びまして、陛下。』

『何うぢや、彼女は產蓐に就いたか？』

『昨夜重荷の責をお下ろしになりました。』

『ほゝう、無事か？それとも予の侍醫を遣らねばならぬか？』

『母上樣には至極御壯健にござりまする。』

『それは重疊、これも神明のお蔭ぢや！して產兒は？』

『お子樣も至極健かでござりまする。』

『男か女か？』

『御男子であらせられました。聲さへお揚げになりまして！產毛の美はしさは母御に似させられまするし、又黑目の敏捷なこと、燃えるが如き光あることは陛下に似させられまする。いや、誠に君家の御血統たることが見えまして慶賀至極、立派な小ヘラクレスであらせられまする！御母上チェチリア樣はお氣も狂ふばかりの御喜び、陛下に御思召の名を伺つて與れと私に仰せられました。』

『それは予も考へてはゐたが。ま、カヘサルと命名することにしよう。何うだな、此の名前は？』

『誠に御立派な御名でござりまする。口に滑かに昔樣の奧床しさ。えゝと、チェサレ・スフォルツァ！（カエザルの伊太利名はチェサレ）天晴れ英雄に適はしい御名でござります。』

『それからと――夫の方は？』

『ベルガミニ伯の善良と禮節は依然常とは異りませぬ。』

『見上げた男だ！』と公は叫んだ。

『寧ろ陛下の御許しを得まして稀に見る德人と申しませうか。實際のところ伯の如きお方は當今搜り廻りませねば容易に見付かるまいかと存じまする。御持病の痛風さへ宜しければ今夕の御宴に列して、尊敬を陛下に呈したいとの御諚でござりました。』

此の話題に上つてゐるチェチリア伯の夫人といふのは長い間此のルドヴィコ公の寵愛を受けてゐた女であつた。ところがフェルララ公エルコレ・デステの息女ベアトリチェが公に嫁して來てから二人に情交ある事を感付いて非常に嫉妬し、生家に歸ると言つて騷ぎ出した。此の威しは見事に功を奏して、公は爾來大婚の際に誓つた忠實を一層嚴守し、且つチェチリアを婚姻さす事を妃に約した。そして公が白羽の矢を立てた夫といふのは禮節に富める老伯ベルガミニであ

つた。

ベルリンチオニは衣兜から小さな紙を取り出して公に示した。それは產兒を頌したるソンネットであつた——

『御身泣き給ふよ、フェブスの神、此の銀雨は何の故ぞ、
そは蓋し驚動せる天界に今日こそは、
あゝら見よや、第二の太陽の起てるを我れは見たりしが、
此の太陽の光輝の前に我があらゆる光榮は消ゆればなり』

『そは笑ひ話にこそ』

『否とよ、そは苦痛の話なれ、
眞理は賢者の侮りを受けじ』

『さらば更に聞かせかし、我が大驚愕を
其の新王は何處より來りて御世知召すに至りしかを聞かんと欲するなれ』

『ムール人の苗裔たる新王は
美はしきチェチリアの腕に巢ひぬ——我れは見たりき、
彼の女の撫愛の翼より彼の光りの輝けるを——
あゝ今こそは我れ西の雲の中に隱れざらめやは、
フェーブスよりも大にしてやがて神たるべき者、其の我れに優れる光輝もて我れを蝕するなれば』

公は銀貨一個を詩人に與へた。

『それからベルナルド、此の土曜日はベアトリチェの誕生日だからそれを忘れてはならないぞ。』

と聞いたベルリンチオニは毛の脫ちた宮廷服の褶の間を慌しくさぐり廻した後、凹んでゐる處から皺くちやな一束の紙を引き出して、所要の詩を記るしてある紙を拔き取つた。外に未だアンヂェリナの鷹の死の哀悼と、又バラヴィチの所有の匈牙利から來た斑の牝馬の疾病とを、共に誇張的に詠じた賦が一しよにあつた。

『これに三首ございますので、陛下の御選擇を仰ぎたうございます。陛下の御滿足あるべき

ことは、拙者ペガサスの聖い足迹によりて誓ひまする。』

當時の君主達は宮廷詩人に樂器の代用をなさしめて、單に愛幸の女のみならず又妃の事をも歌に謠はせた。そは蓋し流行として夫婦の間に少くとも至純の愛があるらしく見せ掛ける必要があつたからである。

公は仔細らしく詩に目を通したが、然かも公然二行の詩も綴れはしないのであつたが第一の詩では夫が妻に向つて、

御身の輕き匙の落つる土にぞ花は咲くなる、
春の露に菫の生まるゝ如く。

と言ふ二行が氣に入つた。

第二の詩はベアトリチェを女神ダイヤナに比して、猪や鹿は斯くも美はしき女獵夫の手にかかつて果てる事をさぞ幸福と感ずるであらうと歌つてあつた。併し公は以上二首よりも第三の詩を滿足に思つた。それはダンテの口を假らしめたもので、ダンテはミランの公妃に於いて今一度己が愛人ベアトリチェを見んため神の許しを得て地上に還らん事を祈るのである。

『あはれ大神ヂョヴ！』と詩中のダンテ・アリギエリは絶叫する、『神は愛の光りをもて地を歡ばしめんと思召してベアトリチェを再び地に與へ給ひたるにより、願はくは我れをも彼の女と共にあらしめ、又其の夫君にも見えしめ給へ。ベアトリチェこそは夫君の福祥と云ふべけれ。ベアトリチェこそは夫君の生涯を最も誇りあるものとなし且つ歡喜あらしむるなれ。』

此の時イル・モロ公は懇切に詩人の脊を叩いて、冬の外套として一ブラッチオの代價十ソルヂするフロレンス產の赤地の織物を其方にやらうと約束した。併しベルナルドも去る者これにて足れりとはしなかつたが數多たび低頭し平身した結果、狐の皮の裏ある外套を貰ふ約束を得たのであつた。――自分の毛皮は長く着てゐるため毛が拔けて天日に乾く索麪のやうに毛がなくなり透々になつてゐると說明した。

そして、『此の冬、寒さが强う身に應へましたので、家の梯子段ばかりか聖フランシス樣の木履をさへ燃やさうとした程でござりました』と言つた。

公は笑つて薪を與へる事をも約束した。と、ベルリンチオニは即座に奉頌の四行詩を賦した。

陛下は臣僚にパンを約し給ふ時、
神の如く天のマナを與へ給ふ、
されば大フェーブスと九人のミューズとは
尊きムールの君なる陛下にホザンナを唄ふなれ。

『ベルナルド、其方の血の循りは今日は余程好いと見える。今一つ其方の詩が入用だが。』
『戀のでござりまするか？』
『然うだそして熱烈なのをな。』
『お妃樣に？』
『ではない。したが決して此の事を口にしてはならんぞ。』
『これはしたり！それでは陛下此のベルナルドを侮辱遊ばすといふもの。ベルナルドは未だ曾て……』
『それは未だないよ。』
『ベルナルドは魚のやうに無口になつてござりまするぞ』と輕薄らしく又神祕らしく目を瞬いて、『成程、熱烈なので？宜しうござります。が、併し如何なる種類のものでござりませうか喜悅を表するのか、或はお口說きの？』
『其の後の方だ。』
と聞いた詩人は鹿爪らしく懸念な容子をして眉を寄せた。
『結婚濟みの人でござりまするか？』
『處女だ。』
『宜しうござります。だがお名前が入用でござりまするが。』
『名前なぞは何うでも宜しいではないか？』
『然うは參りませぬ。名なしで戀の口說きは出來ませぬ。』
『ルクレチアだ――何か持ち合はせがないか？』
『あるにはありまするが新作の方が餘計お氣に召しませうから、何卒暫らく次ぎの間に控へさして下さるやう、僅か一分が程の仕事でござりまする。早や頭の中には詩がムヅ〳〵爬うてゐるやうな氣がして參りました。』
丁度此の時扈從が、『レオナルド・ダ・ヴィンチ樣の參內』と報じた。ベルリンチオニはレオナ

ルドの這入つて來る戸と違つた戸から出て行つた。

五

先づ挨拶が濟んでから、公とレオナルドとは新に開鑿すべき掘割の話を始めた。此の掘割といふのはセシア、チチノの兩河を連結するもので、それから網の目のやうに溝渠を通じて、以てロメルリナの牧場や畑地の間に灌漑の用に供する目的であつた。レオナルドは此の掘割開鑿工事の監督でありながら、公家建築師の稱號を有つでもなかつた。レオナルドは又宮廷畫家の名があるのでもない。單にベルリンチオニの如き宮廷詩人より格の善い『琴の詩人』てふ稱號を帶びてゐるに過ぎなかつた。そして此の稱號を得た所以は、彼が當ミランに移つて來た時、手づから銀の竪琴を馬の首の形に作つてスフォルツァ公に獻上したからである。

レオナルドは掘割の設計を說明した後、工事遂行に要する金を更に得たいと公に要求した。

『如何程？』

『一里が五百六ヅカットに當りますから、總體で一萬五千百八十七ヅカットになります。』

ルドヴィコは思はず顏を蹙めた。唯つた今、佛蘭西の貴族連を買收させるために振り宛てた五萬ヅカットの金の事が思ひ出たのであつた。

『それは多過ぎる、全く多過ぎるよ、レオナルド。それでは其方のために予は破產せねばならない。そんな事は予の出來ない事だ。又そんな巨額の工費は未だ聞いた事もない。何故其方は途徹もない設計をしたのか？予は一つブラマンテに相談を掛けて見よう。彼れも斯んな工事の事には熟練してゐるから、其方のやうな工費を掛けずにするかも知れない。』

レオナルドは肩を聳やかした。

『何うなりと御意のまゝに。それではブラマンテにお任せして下さい。』

『いや、そんなにムキにならなくも可い。敢て其方を輕蔑する心で言つたのではないから。』

そして兩人は再び相談を始めた。

遂に公は、『ま、好いさ！ま、好いさ！』と言つて協約の締結を猶豫しながら、レオナルドの携へてゐる下圖帳を手に取つて、未完の圖を一枚々々めくつて行つた。それは主として建築乃至は機械に關するものであつたが、それが爲めレオナルドは稍急き氣味に說明と解說とを與へざるを得なかつた。

其の一枚に巨大な靈廟と築山の圖があつて、山上には柱廊付きの寺院があり、寺院の丸屋根

はパンテオンのそれのやうに突き立つてゐる。そして其の建築に關する正確なる計算と第一階全部の圖取、並に階段、窖、廊下の排列等の細分の點が次ぎの頁に詳しく記るしてあつて、全體で五百名の骨甕を納める豫定になつてゐる。

『これは何だ？何時誰のために斯んな設計をしたのか!?』

『別に誰のためといふ事はありません。眞の好事でやつたのでございます。』

『奇妙な好事だ！』と公は首を振りながら、自分で注を入れて、『察するところこれは神々か、でなければタイタンを葬る墓場だ。宛で夢の都にでもありさうな建物だ。』

其の次ぎの下圖は都會の形で、市街は段々上りになつてゐて、上の方は富人の棲處、下の方は貧民、動物、塵埃に宛てゝある。此の都會の建設は自然の法則に準じたものではあるが、良心の缺けてゐる人間は、其の上下の懸隔が餘り明白に平衡を失せるを見て自ら憤怒の念を發する底のものであつた。

『これは惡るくない！が其方はこれが實行できると思ふか？』

『無論です』とレオナルドは顏を活々させて言つた。『私は餘程以前から陛下が何處か郊外にこれをお試みになるお心になつて下されば好いがと希望してゐました。五千の家屋で以て三萬人を收容できる筈ですが、今こそ彼等は塵埃や病氣の中にうぢ〳〵して疾病の種子を撒いてゐますけれど、此の都會ではきちんと區分けされるのでございます。陛下、私の計畫が其の儘行へますれば、恐らく世界切つての最も美麗な市府となる事でございませう。』

ミラン公は呵々と笑ひ出した。それでレオナルドの熱心は挫かれてしまつた。

『其方は立派に狂氣してゐるぞ、レオナルド。其方の言ふが儘にしてゐれば、予の國は轉つくりかへつて了ふだらう。奴隷中の此の上もない柔順な者でも、其方の其の二段市街を怨むに違ひないて。其方が誇りにしようといふ其の清潔――樋や水道、詰り世界切つての最も美麗な市府とやらに唾を吐き掛けて、虱だらけな元の古町へ逃げ歸る事であらう。成程其方の言ふ通り其の古町は些つとばかり垢と病氣はあらうが、斯程まで自尊心を傷ける物はないからな。えとそれからこれは？』と公は別の圖を指して言つた。

これは所謂『便利家屋』の繪圖で、隱れ間、隱れ戸、隱れ廊下がある故、來客が同時に幾人あつても互に顏を合はせないで濟む仕組みであつた。

『成程これは見事だ！此の邊の强盜や殺人には弱つてしまふ、此なら萬事順序が立つて安泰に違ひない。直ぐに其方の設計通りに建てる事にしよう』と微笑して、更に加へて言つた。『見

事！實に見事だ！其方は實に器用人だから何一つ出來ない物はあるまい。あゝ然う〳〵、何時か（ヂオニシウスの耳）の事を讀んだのが今丁度思ひ出たが、其の耳といふのはシラキユースにある建物の事で、シラキユースの僭主が宮殿の中にゐながら石伐場にゐる囚人共の話が聞けるといふ處なのだ。何うだらう、其方の手で予の宮殿にも其の（耳）を建てられないか知ら？』

王の言葉は吃々として、顏に少し赧らみを帶びたが、直きに普通のやうになつてしまつた。

此の藝術家の如き人物の前では毫も恥ぢ入る要はなかつた。レオナルドは道義の問題を論ずる事なく熱心に思念から得られる音響の事を論じ立てた。

此のときベルリンチオニが再び姿を現して、ソンネットは見事麗はしく出來上りましたと言つたので、レオナルドは公から晩餐の請待をお受けして、さつさとお暇した。

ルドヴィコは詩人に其の作を讀ませた。火蛇は火の中に住むと云ふが、氷の如き純無垢なる氷の如き處女なる此の婦人の棲家は、情人の熾熱せるハートの中にある――と詩に書いてあつた。

次の結末の四句は恐ろしく可憐だと公は思つた――

憐れなる白鳥よ、我れは消盡したる歲月を歌ふなり、
されど歌は我れの苦痛に慰めを與へはせじ、
愛は笑つて悲哀の餞を打ち、
嘲りて叫ぶなり、『涙もてそを消せ』と。

六

妃の獵より歸り來るまでの待つ間を銷さんとて、ミラン公は後園を散歩することにした。先づ厩舍を覗いたが、それは希臘の殿堂風の建て方で、圓柱、玄關、並びに二重に明りを取つた窓がある。次いで立派な酪農場で乳餅と新製の乾酪とを風味してから、無數の糧秣納屋と物置きとを過ぎて、農場と牛部屋に來て見ると、一つとして自分の心を歡ばさぬ物とてはない。兼てから氣に入つてゐるランゲドック產の牝牛の乳房から出る乳の音、新に仔を生んだ豚の母らしい唸り、巢立ちせる蜂房から來く蜜の匂、滿足氣な微笑は公の黑ずんだ顏に輝いた。まことミラン公の竹の園生は充てる盃にも喩へらるべきものであつた！公は踵を旋して宮殿に這入つて、渡殿の下に佇んで妃を待つてゐた。最早や夕は迫つてゐるけれど日沒までは未だ間がある。チチ

ノの水の浸む牧場からは草のびり〳〵する新鮮な薫が漂うて來る。公は目を徐ろに領地の上に投げた。畑、牧場、畠には網のやうな溝渠の水が通つて、林檎、梨、桑などが長い列をなして栽培してあるし、葡萄樹の花環が格子形をしてこれらの木に懸かつてゐる。見渡す限り涯知らぬロンバルヂの原――モルタラからアッビアテグラッソまで、又それより遙か地平線にかけて百花燎爛と咲き亂れてゐる樣は、宛然神の樂園のやう、それにロサ山の雪が地平線に爬ふ薄光の中にキラ〳〵と輝く樣は、此の世の景色とは思はれなかつた。

『神樣、あなたに感謝致しまする』と敬虔なる公は目を天の方に擧げた。

『一切のものを與へ給ふたるあなたに感謝致しまする。此の上あなたにお願ひすべき物がございませうか。以前には何處も皆荒れて荒れて青葉とては見られない一面の野原でありましたが、予とレオナルドとで彼のやうに溝渠を穿ちまして、此處の土地に水を引いたのでございます。今ではあらゆる草葉、あらゆる穀物の穗は、予があなたを祝し奉るやうに、此の予を祝福して呉れまする。おゝ神樣！』

此の時獵犬の聲、獵夫の叫びが聞えて、赤い呼返しが葡萄樹の上に掲げられた。呼返しとは鷗鴿の翼を附けた形の定かならぬもので、鷹を空から下りさす用をなすのであつた。公と大膳職とは既に晩餐の準備が整へてあるかを見るため食卓の檢分に行つた。間もなく公妃も這入つて來、續いて賓客もぞろ〳〵と這入つて來た。その中にはレオナルドもゐた。食前の祈禱が捧げられてから一同は食卓に着いた。

一の膳にはヂェノアから速達で取り寄せた朝鮮薤、イサベルラ・デステから送られたマンツアの池の太い鰻と鯉、それと立派な去勢鷄の胸の肉をヂェリーとした物が並べてあつた。フォークの使用は盛醼の場合に限られてゐるので、客は皆指とナイフとを用ゐて口に入れたが、併し後に果物の出た時は婦人等にフォークの使用が許された。其のフォークは金で出來てゐて、又が水晶であつた。寛裕な饗宴人は賓客に無理に食する事を勸めるし、賓客の方では顏を赧らめて遠慮して空腹を忍んで居るものは一人もなかつたので、酒と肴は澤山に長時間のあひだ周つた。

例のルクレチアは妃の傍に坐してゐたので、君公の賞讃の目は此の兩人に向けられた。自分が思ひを掛けてゐる乙女を妃は勞つて、御馳走を自分の皿からルクレチアの皿の中へ移してやつたり、往々年端行かぬ女達の間に見る溢れるやうなそして戲れるやうな愛情をこめて、ルクレチアの手を握つたりしてゐるのが目に這入つた時、公は滿足氣に感じたのであつた。

談話は自から獵が中心となつて、ベアトリチェは不意に茂みから現れた一頭の鹿のため自分は

殆く馬から落ちさうになつた事を話すと、それに續いて自慢屋の道化師ヂオダが口を開いて、兎ても人間業とは思はれぬ程の大膽と巧妙とを以て、自分の手一つで猪を打ち止めた手柄話を語つた時は夥しい笑ひが起つた。併し其の猪といふのは實は豚で、態と道化師の通る道に投げ出したもの、それで其の死骸が此の席に運ばれて賓客の一覽に供された時、道化師は眞つ赤になつて此の誹謗を怒つたが、固より其の憤怒も又平生の馬鹿も共に伴つてゐるので、人の同じ愚弄に就てもその善し惡しの區別はちやんと心得てゐるのである。

次第に歡喜の聲は高くなつて、多量の酒は孰れの顏をも赤く染めた。密つと胸衣を留めるンースを緩める婦人達もあつた。酒藏の男は白と赤との極めて明るいサイプラス酒を持つて來たが、それは火に懸けてフスダシウの實、肉桂、丁子の香味を附けたものであつた。公が酒を呼ぶ時、其の命令は寺院の祭典の時のやうに壯嚴な歌の調子で給仕から給仕へと傳へられた。給仕長は戶棚から盃を一つ出して、金の鎖で繫いである一角獸のお守を其の盃の酒に浸けた。若し酒に毒があれば角は黑くなつて血色の滴りを落すからである。他に未だ蝦蟆の睪丸、蛇の舌と云つたやうな同じお守の種類が鹽藏の中に納れてあつた。チェチリアの夫のペルガミニには一の席を賜はつた。老齡の上に痛風を病みながら此の夜の伯は目立つて心地よげに見えた。

伯は一角を指して、

『私は考へまするに佛蘭西王すら陛下の此のやうな角をお持ちにはなりますまい』と言つた。

と、傴僂のヤナキは『ヒ、ヒ、ヒ！』と叫んで、豆大鼓を打ち振り、上に驢馬の耳の付いて居るだんだらまだらの帽子の鈴を鳴らしながら、『尤もぢやと思召せ、叔父ちやま、尤もぢやと思召せ』と公に言つた。

公は機嫌斜めならず、手を以てこの傴僂を打つ眞似をした。銀の喇叭が鳴つて燒肉――それは猪の頭と孔雀――が來た事を報じた。最後に出たのは城の形に拵へた硬い肉菓子で、其の城壁から喇叭が鳴り、それから菓子の外皮を切ると鸚鵡の羽毛を着た一寸法師が跳り出て食卓の周圍を跳ね廻つて歩き、遂に捕へられて金箔を押してある籠の中へ入れられた。すると一寸法師は聲をあげて『主の祈り』を稱へた。

公妃は、『陛下、何ういふお慶びがございまして、思ひ掛けぬ此の饗宴の見事な催しがあるのでせうか？』と公に尋ねた。

イル・モロ公はこれには答へずにペルガミニ伯とこつそり目交せをした。チェチリアの夫は此の御宴はチェサレの誕生のためであると了解した。

主客共に一時間以上かゝつて猪の頭を食つた。別に時間を節しようともせず、『人、食膳に在ては老を知らず』てふ諺も思ひ出された。宴果つる頃、僧のタルボネが巫山戯た事をして一同を喜ばした。此の僧は非常の肥大漢、其名健啖を以て籍甚して、爭つて諸君主から招聘された。彼は細かく切つて醋に浸した一僧正の法衣の三分の一を食つて、非常に法王貌下の機嫌を得たといふ男。さて今公の合圖と同時に榲桲と共に煑た腸をブッエラキオと稱する大盤に盛り上げたのがこのタルボネの前に据ゑられた。僧は溜息を吐いて十字を切つてから袖を挑け、兎ても本統とは思へぬ程の迅さで旨さうにそれを平げてしまつた。

其の拍子にベルリンチオニは

基督樣が奇蹟で調へたパンと魚を頒たれた時
汝が基督樣と一處にたべたなら
汝が不滿足氣に尙ほ飢ゑてゐるに
犬の腹を充すべき食物とても殘さゞりし

と耿句つたので、笑ひの高鳴りが一座から起つた。獨り寂し氣に默然としてゐるレオナルドのみは退窟を諦らめてゐる面持であつた。

最後の金箔の附いてゐる橙を銀の鉢に盛つて出され、それにマルヴォイジー酒が配られた時、宮廷詩人アントニオ・カメルラ・ダ・ビストヤが一詩を賦した。次ぎの一句は、詩中、美術と科學と萬物の原素とが公に呈した言葉であつた。

我等は奴隷の境涯にありしも、御身來りたるが爲、自由の身となりぬ。イル・モロ萬歲。

七

食後賓客は『樂園』てふ名のある庭園へと移つた。此の園は幾何學の圖形に模して造られたもので、枝頭に鋏を入れてある黃楊や、橄欖や、桃金孃木の小徑、樹蔭の步道、迷堂、凉み屋、手の込んだ東屋なぞがあつて、きら〳〵と光る泉のため一段の新鮮が加はつた芝生の上には絨毯や絹の枕が置いてあつた。婦人並びに婦人の保護者を以て任ずる武士達は禮儀の紐を弛るめ

て、小さな宮廷劇場の前に集まつた。狂言はプロータスの『ミレス・グロリオスス』中の一幕で、欠伸の出る物ではあるが、古代人に對する尊敬の念から、觀客一同は熱心を粧つて見物してゐた。此の喜劇が終ると若い男女は舞踏、テニス、盲人ごつこ、走り合ひをして、馥郁としてこんもりと茂れる薔薇と橙樹との中を、小兒のやうに笑つたり捉え合つたりしてゐるし、年寄り連は又骰子や碁や將棋を遊んだ。別の一連は泉の階の上に輪形に打ちかたまつて、『デカメロン』中の青年男女を氣取りながら小話を語つた。

尋いで一同は『ロレンヅォ・デイ・メヂチ』てふ流行唄の譜に合せて踊つた——

消え行く美はしの青春よ、
御身は幸福を捕へかし、
明日の吉と凶とは
測り知るべきやは。

踊りが果てゝから、愛くるしい青白い顏の性質溫順な少女ヂアナは、低い琵琶の音に合せて、

片戀を哀しむ一曲を唄つた。宛ら魔術にかゝつたやうに一同の騷擾と笑ひはピタリと止んだ。そして沈吟する如く、又其の事の我が身にありし昔を思ひ偲ぶが如く熱心に傾聽した。長い間森として一語も發せられなかつた。そして歌が終つても其の沈靜を破るものは唯泉の靜かな淙淙の音のみであつた。併し間もなく聲々や歡笑や音樂は再び起つて、橄欖樹の間に螢が光り、黑い空に新月の照る夜更け時までそれが續いた。『樂園』の空に漂ふ柔かな空氣には橙の花の馨りが滿ちて、『メヂチの』歌の曲がなほ顫えて聞えた——

明日の吉と凶とは
測り知るべきやは。

八

宮殿にある四塔の一つに明りのちら〳〵するのが公の目に見えた。それは天文長兼秘密會議の一員たるアンブロヂオ・ダ・ロサテが點してゐるランプの光りで、彼は寶瓶宮に於ける火星、

木星、土星の相合を觀測してゐるのである。當スフォルツァ家に取つて此の事は深い意味のある事件であつた。

公は突然思ひ出したやうに、情緒の濃やかな話を交はしてゐたルクレチアに急に別れの挨拶を述べて宮殿に這入つた。そして時計を眺めて、兼てアンブロヂオが敎へた時刻の來るのを待ちながら分秒も違へず、大黃の丸藥を一粒嚥み下して、曆書を繙いて、次ぎの記事を讀んだ——

八月五日。夜十時八分に跪きて手を組み目を天に擧げて心より祈るべし。

時間に後れて右の記事に見える功驗を無効にしては大變と、公は急いで禮拜堂へ行つた。禮拜堂には一枚の繪の前にランプが一つ供へてあるのみで他は眞暗であつた。此の公は繪が好きで、此はレオナルドの手になつたベルガミニ伯夫人のチェチリアが、マドンナの粧ひをして、花瓣の多い薔薇の一輪を祝福してゐる圖であつた。丁度時計が八分になつたので、公は跪いて手を組み祈禱文を誦し、目を繪につけて長い間熱心に祈つた——

『願はくは聖母樣、予と予の子息マスシミリアノ、及び新に生れましたるチェサレに御惠みを垂れて下さるやうに。妃のベアトリチェ、又チェチリアをもあなたにお任せ致します。同じく又甥のヂアン・ガレアッツォをもお任せ致したうございます。あなたは予の心中を照覽あらせられて、甥に不幸の出來ませぬやうにと予の念じてをります事は御存じと思ひまする。それは無論彼れが死にますれば當に予の領土のみならず伊太利全國は自由を得るのでございますけれど。』

斯う念じながら公はミラン君主の玉座に上るべき權利が、法學者に依つて自分に證明されてゐる事を思ひ出した。それは公の兄(即ちヂアン・ガレアッツォの父)はフランチェスコ・スフォルツァが未だ大首魁であつた時、即ちミランに君主たる以前に生れた人であるが、それに引き換へて弟のルドウィコは後のフランチェスコ、即ち卽位後の父の腹に宿つた人であるから、兩人の父なる人の其の君主號を嗣ぐべき者は、明白に弟であつて兄ではないとの事であつた。

然かも今の場合の公に取つて、右の決定は正理に基いたといふよりも寧ろ巧を弄したやうに思はれたので、聖母の前でこれを述べる事を躊躇して、以下のやうに言つて甘んずる事にした

——

『予は萬一過去又將來に於きましてあなたの前で何か罪を犯しましても、おゝ天の女王樣、それは予一個のためではなく、予の臣民の福祉、又伊太利の福祉のために已むを得ず其の仕儀

に出るものである事は、あなたの御存じあらせられる所でございます。願はくは予の爲めに神様に御取りなしを願ひまする。しますれば當ミラン府に宏壯な伽藍、バヴィアではチェルトサ、其の他又立派な記念物を寄進しましてあなたを奉頌致しまする。』

祈りを終つてから、寢室の方へ行かうと手に蠟燭を持つて、最早や眠りに入つてゐる宮殿内の部屋々々を通つて行く中途で、彼はばたりルクレチアに行き逢つた。

『締めた！愛の神様は此の通り予のためを計つて下さる！』と公は心で思つた。

『陛下！』とルクレチアは叫んだ。そして此の聲を出して、『お慈悲を願ひまする、陛下！』と續けた時は、公の前に膝を落さんばかりであつた。

そして自分の兄で侍從長を奉じてゐるマッテオ・クリヴェルリが多額の公金を賭博で費消した次第を公に語つた。自體不しだらな兄ながら、ルクレチアは深く愛してゐるのである。

『案ずるに及ばん！予が救つてやるから好い。』

そして暫時默してから深く溜息して、『で、其方も……えゝと、其方も予に對して今迄のやうなつれない振りを見せないだらうな？』

ルクレチアは晴やかな邪氣のない目で訝し氣に公を見た。

『陛下、何を仰られるのか私には分りませんが。何ういふ事でございませうか？』

斯う言つた内氣な容子に少女は一層の美しさを增した。

『それは斯うだ』と言ふと等しく公は大分荒々しく兩手をルクレチアの身體に廻して、『それは斯うだ――が、ルクレチア、其方に予の戀は分らないか？』

『放して！ま、放して下さいまし！これはまあ何事でございます。ベアトリチェ樣が……』

『いや、分りはしない！』

『可けません、陛下、可けません。お妃樣は私に大相善くして下さいますもの。御深切にして下さいますもの。後世でございますから何うぞ放して……』

『其方の兄を予が救つてやるのだぞ……其方の望みは何なりと叶はしてやる……予は其方の奴隷だ。だから唯予を可哀相だと思つて呉れ。』

そして情欲と涙とに半ば眞劍を見せて、震える聲音でペルリンチオニの詩を囁いた――

憐れなる白鳥よ、我れは消盡したる歲月を歌ふなり、
されど歌は我れの苦痛に慰めを與へはせじ、

愛は笑つて悲哀の鍬を打ち、
嘲りて叫ぶなり、『涙もてそを消せ』と。

『放して！放して！』と少女は唯絶望の聲を放つ。

それでも公は女に蔽ひ掛かつて、其の新鮮な息と、菫と麝香との香氣とを感じながら無理やり唇に接吻した。一瞬間ルクレチアは公に抱擁されて萎んだが、矢庭に絶望の叫びと諸共、公の手を振り放して逃げてしまつた。

九

それから寢室に來て見ると、ランプが消えてベアトリチェは既に牀の中に臥せつてゐる。牀は靈廟の形に出來てゐて甚だ大きく、青絹の天蓋が上から垂れて、床の中央の檯の上に載つてゐた。そして白銀色の帳が張つてあつて、金と眞珠を鏤めた蒲團が掛かつてゐた。此の蒲團一枚の價は僧侶の祭服に匹敵するほど高いものであつた。

『ビチェ』と公はあまへるやうに囁いた。『これ、ビチェつたら、最う眠たの？』と言ひながら、接吻しようとすると、妃は公を押し遣つた。

『おやビチェ――何故だ？』

『私に構はないで置いて下さい、眠いのですから。』

『だが何故さ、おい、何故つたら予が何れ程あなたを思つてゐるかそれがあなたに分れば……』

『御尤も、御尤も。女とさへ見れば誰でも皆陛下がお思ひになる事は能つく分つてをります。斯く申す陛下の妃や、チェチリア、彼の忌々しい露西亞の側女、それから私の衣裳部屋の一段と暗い隅で陛下が接吻なすつた赤毛の女道化、皆分つてをります！』

『あれは冗談だよ。』

『あんな冗談は私好みません。』

『ま、ビチェ、ずつと此の間中から予に好い顏をした事がない！では白狀する――予が惡るかつた。下劣な冗談だつた――詰り一時の出來心で。』

『陛下の出來心は度々の事でございます。』

そして腹立たしく公の方に向き直つて、『あなたは何故にそんなに恥といふ事が分らないので

せう？何故、何故そんな嘘をお吐き遊ばす？私に陛下は分らないで何としませう。陛下の心まで讀まないで何としませう。あの斯やうな事を申しましても嫉妬とお取りになつては困りますが――ではありますが、陛下、私はネ、御聞き下さいますか――私は陛下の情人と一處にされるのは厭でございます。』

『それは堅く誓ふ、ビチェ、予はあなたの外には誰も愛してはゐないのだ。予の魂の永遠の福祉に賭けて其の事は誓ふ。』

妃は公の言葉よりも言葉の調子に吃驚して口を噤んだ。公の言は丸が丸で嘘でもなかつた。妃を欺くたび妃に對して一段の愛を感ずるのであつた。即ち公の情欲は丁度恐怖、良心の煩悶、憐愍、悔恨等に依つて却つて煽られてゐるやうなものであつた。

『宥して呉れ、ビチェ、宥して呉れ。斯んなにあなたを思つてゐる心を少しは酌んで貰はないと……』と公は哀訴した。

で、到頭妃は折れて出た。暗とて目には見えぬ妃を抱いた時、公は晴やかな罪のない目と、新鮮と、菫と麝香の香氣とを思ひ出した。二つの愛は美妙な感官の中で混ざつてゐた。

『全く今日だけはあなたは些つとばかり愛人のやうでゐらつしやる！』と妃は内々自慢らしく言つた。

『本統だ、ベアトリチェ。丁度一番初めに二人が一緒になつた時のやうだ！』

『ま、馬鹿な！』とベアトリチェは笑ひながら、『そんな下らん事を投つてしまつて、最つと深重な事をお考へにならないと可けませぬ。あの、聞く樣子では彼の方は治るやうでございますが――』

『そんな事はない。最う助かる見込みはございませんと、ルイギ・マルリアニが斷言してから未だ二三日にしかならない。成程少しは快いやうだが到底永くは持つまい。運命が既に全快しない事に定まつてゐるのだもの。』

『それが何うだか分るものですか』とベアトリチェは語を勵ました。『彼の方の手當は餘程行き屆くやうですが。實際あなたの御辛抱の強いのには呆れる外ございません。だつて羊のやうになつて種々の惡口をちつと耐へてゐらつしやるのですもの。何大丈夫だ、實權は此方の手にあるから好いと、あなたは仰有るけれど、其の實權を維持したさに、夜も晝も泥棒見たやうに身顫ひしてゐるよりか、一層のこと投り出して了ふ方が好くはございませんか？あの佛蘭西王といふ高慢な私生兒の前で塵を舐つたり、圖々しいアルフォンソに自由にされてゐんな者の奴隷

になつたり、不忠なアラゴンの巫女の機嫌を取るに汲々としたり――そんな事を廢してしまつて實權をさらりと投り出す方が好くはございませんか？噂ではあのアラゴンが又身重になつたさうですが、定めし蛇の子があの呪はれた巣から這ひ出て來て、私達の生命を取ることでございませう！あなた、私達の一生の事をお考へ遊ばせ！何かと云へば實權は此方の掌中にあると仰有るのですもの！』

『あなたは然う言ふけれど醫者共はあの病氣は治らないと毎々斷言してゐるのだから。遲かれ早かれ……』

『左樣、それでは其の遲い方でございませう。死ぬ、死ぬと云つてから最う十年になりますから。』

ひつそりとなつたと思ふと、突然妃の美しい腕が夫の首に絡んで、それを自分の方へ引き寄せ、何事をか耳に囁いた――と、ルドヴィコは戰慄した。

『ま、ビチェ！あなたは基督と聖母に宥しを乞はねばならぬ！最う――予に氣を置きませんか？――最う二度と再び予にそんな事を言つてはなりませんぞ。』

『あなた恐いのですね、多分それでは私にさせたいのでございますか？』

公はこれには答へずに暫らくしてから、

『で、あなたの考へでは何でゞす？』

『陛下、桃の事を考へてゐるのでございます。』

『あ、然うだ。極く熟したのをあなたに上げるやうにと園丁に吩付けて置いたのだつた。』

『いゝえ、其の桃の事ではないのです。私が考へてゐるといふのはレオナルドの處にある桃の事でございます。あなたはあの桃の事を何かお聞きになりはしませんか？』

『何を聞くものか。』

『其の桃に毒のある事を。』

『何うして毒が？』

『それは實際の話でございます。實驗に供するためとかで、魔術を使つて桃に毒を注入したといふ事でございました。それを私に告げた者はシドニアでございますが、誠に美しい桃ださうでございます。』

そして再び森閑となつた闇の中で二人は抱き合ひながら默してしまつた。互ひの思ひは結び合ひ、互ひの耳は心臟の激しい鼓動を聞いてゐるので――最早や言語は不要になつたのである。

最後にイル・モロは宛ら父のやうな愛情を籠めて若い妻の額に接吻して十字を切つた。

『お寢み、サア、靜かに御寢み』と公は言つた。

此の夜の夢に妃は金の大盤に立派な桃が載せてあるのを見た。試めしに其の一つを食べると水氣がたつぷりとして旨い味であつた。と、突然、ベアトリチェに向つて叫んだ聲がある。

『毒です！毒です！』と二度續けて、最う一度『毒です！』と言つた。

公も同じく夢を見た。夢の中で自分は泉の傍のきら〳〵光る芝生の上を歩んでゐるのだと思つてゐるうちに、少し距つた前方に姉妹のやうに相抱いてゐる白衣の三婦人が見えた。近づいて見るとそれは一人はベアトリチェと、二番目がルクレチア、三番目がチェチリアであつた。それでも三人は到頭斯んなに友人になつて呉れたかと公は神に謝したもの〵、其の實、心では何故最初から友人であつて呉れなかつたかと怨んだのである。

十

城の塔の時計は眞夜中の時刻を報じて、何處も唯眠りの沈默ならぬはなかつたが、唯一つ公妃が髪に金箔を押しに上る例の臺のみは然うではなかつた。何故なら女道化のモルガンチナは押し籠められてゐた押入れを出て、此處へ逃げて來てゐるからで、此處の暗黑の中で唯一人小兒の死亡を哀しんでゐるのであつた。

『皆で私の赤ちやんを殺しました！何故でございます、神樣、何故でございますの？あの兒は誰樣にも惡い事はしませんでした。私の樂しみは彼れ一人でございましたのに！』

夜は閨として一天清澄に、遙か地平線上に聳ゆるアルプスの氷の如き巔は永遠の結晶とも見える。凶兆を報ずる鳥の聲に似たる狂女の哀哭は長い間靜寂を擾してゐたが、不意に溜息を吐いて、女は目を天に擧げて默り込んだ。

と、四邊は死の如き靜かさとなつた。女道化は此の夏の一夜の涯しなき紺碧の上又上なる星を見て莞爾とした。星は狂女の頭上に輝いてゐる——無垢にそして神秘に燦然として。

四の巻　巫女の安息日――一四九四年

上の天――下の天、
上の星――下の星、
人間頭上の一切は――其の脚下に現ずるなれ、
謎を解く人は頌むべきかな。

――タブラ・スマラグディナ。

一

所はミラン府の見窶しい町外れ、ヴェルチェルリナ門と税務署とカンタラナ川てふ掘割とに接近して古びた一軒の家がある。非常にひつそりとしてゐるが、人目に立つのは黒く曲つた大煙突から日夜大きな渦を巻いて立ち上る烟であつた。これは賢女の名あるシドニアの住家で、二階を錬金士ガレオット・サクロボスコに貸し、自身は姪のカッサンドラと共に下にゐるのである。

カッサンドラの父はルイギ・サクロポスコといふ著名なる旅行家で、古代藝術の資料を探るため、希臘、エーヂャン諸島、敍里亞、小亞細亞、埃及を踏破し、希臘の古大理石、琥珀の屑、ホーマーの墓から得たといふ僞の碑銘、新に發見したユウリピデスの悲劇、デモスセネスの演說の結尾――凡そ手に這入る限りの物は一つも剩さず所有してゐた。これを偉人と思ふ人もあれば、又ペテン師を以て目する者もあるし、狂人視してゐる者さへ尠くはなかつた。彼の心は一から十まで異端なる古代希臘の追憶に囚はれてゐたゝめ、何處までも嘉すべき基督敎徒でありながら、オリンピヤに在ます學問傳令の神ヘルメス（即ちメルキュリー）に祈りを捧げるのみか、同神の名から得た水曜日を以て商業の取引に甚だ好い日であるとして、此の日を自分の延喜日にしてゐたのである。何等の辛酸、何等の窮乏と雖も、彼の事業を挫くに足らなかつた。一度の如きは既に十里ばかり海上に乘り出してゐるのに、或る機みから其碑銘の事を思ひ出して、それを寫し取るため態々船を漕ぎ戻させた事があつた。又難船に遭つて折角の蒐集物を失つた時は愁ひの餘り髮が白くなつてしまつた。何故そんな無駄骨を折つて身體を疲勞させ月日を徒費するのかと訊く人があると、彼は斯う返答するのが常であつた。

『死人を起たしめるのが拙者の希望でござる。』

或る時希臘ラセデーモンの廢墟に近いミストラといふ小邑で、非常に美しい少女に逢つた。これは貧乏な上に飲んだくれなる村の牧師の女であるが、宛ら女神アルテミスの像そつくりなので、ルイギは伴つて伊太利へ歸つて來た。他に未だイリアッドの新寫本、女神ヘケテを詠じたるものの斷片、土燒きの甕の破片などが此の時の土產であつた。

夫婦は女子を一人設けた。其の時分ルイギはエスキラスの悲劇に夢中になつてゐた頃なので、取り敢へずトロイ王プリアムの公主の名を假りて此の產兒にカッサンドラと命名した。兎角する中に母は歿するし、父は常に家を去つて定めない旅をしてゐるので、娘はデメトリウス・カルコンヂラスの世話を受ける事になつた。此のデメトリウスはコンスタンチノープルの落人たる博學の希臘人で、スフォルツァ家の招聘に應じて當ミラン府に來たのであつた。當年七十歲の老翁ながら、巧みに二面を使つて、性質狡黠、常に腹に一物を貯へてゐる人物で、表面は基督敎に對して多大の熱心を裝ふ癖に、內心はカルヂナルのベッサリオネを始め同じ落人連の希臘人と同樣、ゲミスツス・プレトの門人を以て任じてゐるのである。ゲミスツスは學問囊てふ綽名のある人、古代學藝に精通する巨擘中の殿將であり、又新プラトーン派の哲學者で、ルイギが妻の「アルテミス」に戀をしたかのミストラで當時を去る四十年前に歿した人であつた。彼の弟

子達は師を以て高名なるプラトーンの權化であると斷ずるに反して、神學者等は背教者ユリアヌスの非基督教的左道を復活する者であるから辯爭議論を以てするのはまだるつこい、宜しく宗教糺問と棧火の刑とを以て攻むべき學者であると主張した。彼等が主としてゲミスツスに加へた非難の根據は彼が死に先つ三年に門人に告げた次の語にあつた。曰く、『私が瞑目して數年經たぬうちにあらゆる人民、あらゆる國民は、唯一の眞理の支配を受けるのだ。此の單一の信仰によつて人々は相結ばれるのである』と。そして此の預言の意味に就て、基督の信仰か或はマホメットの信仰かと問うた者があつた時、彼は『基督でもなければマホメットでもない、古代の異教と毫厘も異らぬ一個の信仰の意である』と答へた……

カッサンドラを預かつたカルコンヂラスは、假令僞りながらも基督教の嚴格な敬虔を以て此の少女を教養した。併しカッサンドラは神秘的色彩に富める新プラトーン説の話を時々洩れ聞いてゐるので、素より其の哲理的方面の精緻は解らぬながら、やがて來るべき諸神復活の怪奇な夢を自分一人で織つてゐた。其の胸に懸れる紫水晶は父から貰つた熱病除けのお守りで、裸形の若者となつて現れてゐる酒神ヂオニソスは、杖と葡萄の枝とを携へ、其の傍に一匹の豹がゐて、手にせる葡萄を啖らうと跳り上つてゐる。自分一人切りのとき少女は度々此の寶石を太陽の光線に當てゝ目がくら〳〵となるまで一心に其の紫の奥を見詰めると、幻想が浮かんで來て、酒神は宛然生けるかのやう、依然若々しく惚れ〴〵するやうに見えた。

父のルイギは寶物の探索に到頭身を害ねて、自分の發見したフェニシアの殿堂の廢墟に近い牧人の小屋で、腸チブスに罹つて、悲慘な最後を遂げた。すると、古物ではなく錬金術の所謂哲人石を索めるため多年のあひだ遊歷してゐたルイギの弟のガレオットが、それから間もなくミラン府へ來て、ヴェルチェルリナ門側の矮屋に落着く事となつたので、姪を引き取つて共に住む事にした。

併しカッサンドラは折々カルコンヂラスの家を訪ねる。そしてヂョーヴァンニ・ボルトラフィオもヂョルヂオ・メルラの筆寫をするために此處へ通つてゐるのであつた。

ヂョーヴァンニは二度目にカッサンドラを見たとき、毒の木に就いて此の女とツォロアストロとの間に交はされた話を盜み聞きしてゐた事を思ひ出して我れ知らず慄然とした。此の女が魔法を使ふ事は大勢の人に聞いて知つてゐたが、其の顏の美しさは否むべくもなかつた。ヂョーヴァンニは仕事が濟んでから殆ど毎晩のやうにヴェルチェルリナ門側の一つ屋にカッサンドラを尋ねるのであつた。聖ラデゴンダ精舍の附近の水門から餘り遠くない所に堀があつて、其の暗い水